

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書III

萩原遺跡

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書Ⅲ

はぎ わら
萩 原 遺 跡

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

「一般国道49号揚川改良」は、東蒲原郡阿賀町津川から同町白川に至る全長7.5kmの道路です。一般国道49号は太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路で、磐越自動車道を補完するとともに、国道49号沿線市町村と新潟市を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしています。

このうち阿賀町清川から同町谷花地区に至る区間は、急峻な岩盤斜面が阿賀野川に迫り、通行規制区间に指定されています。これまで様々な対策工事を実施してきましたが、抜本的な対策は困難であり、道路管理にも限界があることから、阿賀野川の左岸を通る別ルートを建設し、危険を回避することになりました。

本書は「一般国道49号揚川改良」の建設に伴って実施した阿賀町谷花字萩原甲555ほかに所在する萩原遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査の結果、阿賀野川左岸の河岸段丘上に営まれた縄文時代の遺跡であることが明らかになりました。出土した土器から、この地は縄文時代の中期後葉から後期中葉にかけての長きに渡って人々の生活の場として利用されていたと考えられます。しかし、その生活の跡は土石流によって埋没してしまい、今回の発掘調査が行なわれるまで人目に触れることがありませんでした。

発掘調査で得られたこれらの資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多大なご協力とご理解をいただきました阿賀町教育委員会、並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで格別なご配慮をいただきました国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所・同津川出張所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成20年11月

新潟県教育委員会

教育長 武 藤 克 己

例　　言

- 1 本書は新潟県東蒲原郡阿賀町谷花字萩原甲555ほかに所在する萩原遺跡の発掘調査記録である。
- 2 この調査は、一般国道49号揚川改良の建設に伴い、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 3 埋文事業団は掘削作業等を株式会社ノガミに委託して発掘調査を実施した。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業にかかる各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は「07ハギワ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。
- 5 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 6 引用文献は、著者及び発行（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第VI章の文献については章末に掲載した。
- 7 調査成果の一部は、広報誌『埋文にいがた』第61号で公開しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。
- 8 石器、石製品、礫の石材鑑定は埋文事業団高橋保雄が行った。
- 9 本遺跡の地質については高瀬信行氏（新潟大学災害復興科学センター）にご教示をいただいた。
- 10 自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託して実施し、結果を編集の上、第VI章に掲載した。
- 11 造構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は株式会社セビアスに委託した。
- 12 本書の執筆・編集は、高橋保雄（埋文事業団 調査課長代理）および上橋由理子（同 班長）の指導の下、小川真一（同文化財調査員）、荒谷伸郎（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部調査員）があたった。執筆分担は第VI章を除き、以下のとおりである。

第Ⅰ章・第Ⅱ章：小川真一	第Ⅲ章：小川真一、荒谷伸郎
第Ⅳ章・第Ⅴ章・第Ⅶ章：荒谷伸郎	
- 13 発掘調査から本書に至るまで、下記の方々から多くのご教示・ご協力をいただいた。
ここに記して厚くお礼申し上げる。（敬称略 五十音順）

阿部 泰之	速藤 佐	金子 拓男	田中 耕作	中島 栄一
阿賀町教育委員会	阿賀町小花地区			

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
A 試掘調査	2
B 本発掘調査	3
3 調査体制	4
A 試掘調査	4
B 本発掘調査	4
4 整理の経過と体制	5
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	6
1 遺跡の位置	6
2 地理的環境	6
3 歴史的環境	8
第Ⅲ章 調査の概要	14
1 調査の概要	14
A 遺跡の立地と微地形	14
B グリッドの設定	15
2 基本層序	15
3 調査の基本方針	18
第Ⅳ章 遺構	19
1 概要	19
2 遺構各説	19
A 住居	19
B 集石	20
C 性格不明遺構	21
第Ⅴ章 遺物	22
1 概要	22
2 繩文土器	22
A 資料の提示	23
B 分類	23
C 各説	23

3 土 製 品	27
4 石 器	27
A 石 遷	28
B 不定形石器	28
C 両極剥離痕のある石器	28
D 打製石斧	29
E 磨製石斧	29
F 磨製石斧未成品	29
G 敲磨石類	30
H 多面体敲石	30
I 砥 石	31
J 石 盆	31
K 石鏽未成品	31
L 石 核	32
M 剥 片 類	32
N 自 然 碼	32
5 石 製 品	33
 第VI章 花粉分析	34
1 はじめに	34
2 試 料	34
3 方 法	34
4 結 果	34
A 分 類 群	34
B 花粉群集の特徴	35
5 考 察	35
 第VII章 ま と め	37
1 遺跡の立地と埋没過程	37
2 遺構と遺物	37
 《要 約》	39
《引用・参考文献》	40
《別 表》	42

挿図目次

第1図 一般国道49号掲川改良予定路線図	1	第7図 基本層序	16
第2図 トレンチ位置図	2	第8図 混入物の含有率	18
第3図 調査・整理の経過	5	第9図 炉の部位名稱と礫重量計測値	19
第4図 段丘面模式図	7	第10図 縄文土器出土分布図	22
第5図 萩原遺跡及び周辺の遺跡地図	13	第11図 石器出土分布図	27
第6図 グリッド設定図、小グリッド模式図	14	第12図 花粉・胞子の顕微鏡写真	36

表目次

第1表 周辺の主要遺跡一覧	12	第4表 刃片類出土位置と点数	32
第2表 ピット計測表	20	第5表 花粉分析結果	35
第3表 器種別石器出土表	28		

図版目次

【図面】

図版1	調査範囲と周辺の地形
図版2	遺構配置図
図版3	遺構個別図1 SI1 (P8・9・10・11)
図版4	遺構個別図2 SI1 (炉)。SX2・3・4・5・6・7
図版5	遺物実測図1 縄文土器1
図版6	遺物実測図2 縄文土器2
図版7	遺物実測図3 縄文土器3・土製品
図版8	遺物実測図4 石器1
図版9	遺物実測図5 石器2
図版10	遺物実測図6 石器3
図版11	遺物実測図7 石器4
図版12	遺物実測図8 石器5
図版13	遺物実測図9 石器6・石製品

【写真】

図版14	遺跡全景、遺跡の位置と周辺の景観
図版15	遺跡遠景、調査前近景、完掘全景、拡張部分遺物出土状況、V層以下土層確認トレンチ
図版16	基本層序。SI1、P8・9・10・11
図版17	SI1 (炉)。P8・9
図版18	P10・11、SX2・4
図版19	SX3・5・6・7
図版20	縄文土器1
図版21	縄文土器2
図版22	縄文土器3、土製品、石器1
図版23	石器2
図版24	石器3
図版25	石器4
図版26	石器5、石製品

第Ⅰ章 序 説

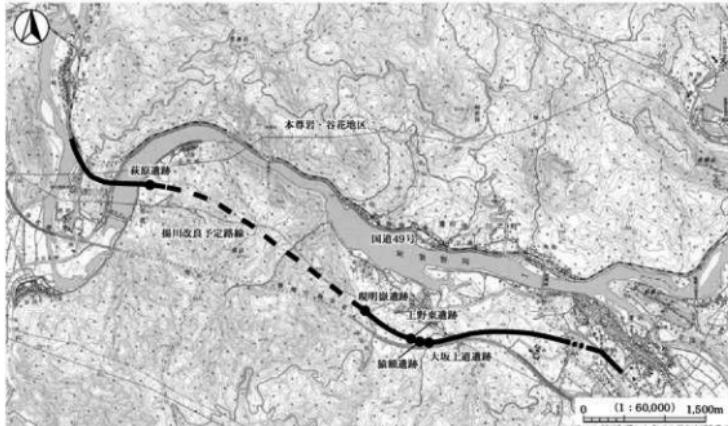
1 調査に至る経緯

「一般国道49号揚川改良（揚川道路）事業」は、阿賀町津川から同町白川に至る全長7.5kmの道路である。一般国道49号は、太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ主要幹線道路であり、磐越自動車道を補完するとともに、国道49号沿線市町村と新潟市を結ぶ幹線道路として重要な役割を果たしている。このうち阿賀町清川から同町本尊岩・谷花地区に至る区間は、急峻な岩盤斜面が阿賀野川に迫っており、この渓谷部に沿ってJR磐越西線と国道49号が併走している。したがって、国道の線形が悪く、幅員も狭いことに加え、度重なる土砂災害・岩石崩落及び雪崩の危険に晒され、通行規制区間（連続雨量150mm）に指定されている。

このため国土交通省は落石防止擁壁の設置、岩接着、岩塊除去などの対策工事を実施し、また落石探知センサー・テレビカメラの設置、斜面パトロール点検などの監視体制の強化に努めてきた。しかし、同ルートでの抜本的な対策は困難であり、このような道路管理にも限界があることから、対岸の阿賀野川左岸を通る別線ルートを建設し、危険を回避することとした。

昭和53（1978）年に同事業が事業化され、昭和63年12月に現ルートを2車線に拡幅し供用した。さらに、平成12（2000）年度に工事用道路の建設、平成13年度に道路用地の確保等に着手した。

これに対応し、阿賀町小花地に所在する「旧三川村地区」について、揚川改良ルート内の遺跡の存在や埋蔵状況を把握するための試掘調査を平成17年度から実施した。同地区のうち、阿賀野川左岸の段丘上の範囲を平成17年5月に行ったところ、縄文時代の遺物を多量に検出した。そこで、同地区の小字名



第1図 一般国道49号揚川改良予定路線図

（国土地理院「津川」1:50,000原図 平成11年発行）

から「萩原遺跡」を付して新遺跡として県の遺跡台帳に登録し、遺物が多量に出土したトレンチを中心とした範囲について本発掘調査が必要であると報告した（平成17年5月30日付新埋第70号）。平成18年10月には、平成17年度に調査した範囲に隣接する段丘際から段丘斜面・丘陵裾部にかけての範囲について試掘調査を行った。しかし、この調査では遺構・遺物とも検出されなかった。よって、平成18年度に調査した範囲について本発掘調査は不要であり、平成17年度報告の範囲のみ本発掘調査が必要であると報告した（平成19年2月8日付新埋第302号）。

上記の結果をもって、平成19年3月30日付教文第1602号の2により県教委から埋文事業団あてに萩原遺跡の本発掘調査の依頼がなされた。

2 調査の経過

A 試掘調査

平成17年度 平成17年度の試掘調査は平成17年5月9日～13日の5日間に、阿賀町谷花字萩原甲555ほかに所在する「旧三川村地区」において、9,300m²を対象に行った。調査範囲は阿賀野川左岸の河岸段丘上であり、調査範囲内に17か所のトレンチ（試掘坑）を任意に設定し、重機および人力による掘削・精査を行い遺構・遺物の有無を確認した。調査面積は536m²、試掘確認率は5.8%であった。調査の結果、段丘際の10トレンチでは赤褐色小砂利層を挟み、小砂利混じりの赤褐色土層（上層）と赤褐色シルト層（下層）で縄文時代の遺物が大量に出土した。上層は後期前葉、下層は中期後葉が主体である。この結果をふまえ、前述のように新遺跡の存在が明らかになり、小字名から「萩原遺跡」とし、特に遺物が多量に出土した10トレンチを中心1,200m²の本発掘調査が必要であるとした。また、南側段丘際の14トレンチでは土器9点がまとまって出土したが、この14トレンチを中心とした900m²については未買取地の試掘調査結果を含めて本発掘調査の要否を判断することとして、判断を保留した。

平成18年度 平成18年度の試掘調査は平成18年10月2日～13日の9日間に、前年度と同地区である「旧三川村地区」において、12,570m²を対象に行った。調査範囲は萩原遺跡と隣接する段丘斜面から丘陵裾部、および前年度に900m²が判断保留になる要因となった14トレンチ周辺である。調査方法は前



第2図 トレンチ位置図

年度と同様の方法で、21か所にトレーナーを設定して行った。調査面積は169.5m²、試掘確認率は1.3%であった。調査の結果、すべてのトレーナーにおいて遺構・遺物は検出されなかった。よって、今年度調査した範囲および前年度に判断を保留した範囲について本発掘調査は不要であり、調査範囲は平成17年度報告分で確定した。

B 本発掘調査

当初、本発掘調査の対象範囲内には南北方向に流れている水路があり、その水路をはさんで東西に調査区が設定されていた。しかし、平成17年度の試掘調査結果からは、水路から西側部分については遺跡が広がっていないことも予想された。よって7月18日に、本格的な着手に先立って調査範囲を確定させるため、西側部分に試掘トレーナー(07-1T, 07-2T)を2か所設定して遺跡の広がりを確認した(第6図)。その結果、平成17年度試掘調査時に遺物包含層とされた土層は確認できず、遺物についても確認できなかつた。よって、水路から西側部分については、文化行政課と協議の上、面的調査を行わないこととした。

その後、調査区内の雜物撤去、現場事務所設置等の諸準備にとりかかり、7月中旬に終了した。8月1日から重機による表土掘削を開始した。表土以下の土層と遺物包含層が非常によく似た土質・土色であることから、慎重に掘削を行い、遺物が出土しない部分については遺構確認面のほぼ直上まで掘削を行った。その結果、遺物が大量に出土する地点は調査区の北東部であり、それ以外の地点では遺物はほとんど出土しない状況が把握できた。表土掘削は8月10日で終了し、8月20日から作業員を投入しての包含層掘削を開始した。8月24日から包含層掘削と平行して遺構精査を開始した。調査当初は調査区周囲の法面や遺構確認面からの湧水によって作業がはかどらない状況であったが、調査区周辺での水田耕作が終了した9月初旬からは湧水が収まり、作業は順調に進んだ。調査の結果、人為的に構築された可能性が高い遺構や遺物は調査区の北東部分に集中することが把握できた。9月20日に全体撮影を行い、9月21日に阿賀町小花地地区への公開(参加者15名)を実施した。9月25日には、調査区北東角の法面を東側に約2m掘削して遺跡の広がりを確認する作業を開始した。その結果、これまでの調査の中でもっとも高い密度で遺物が分布し、さらにこれが北東方向に広がることが予想された。9月26日には、調査区南東部分にて重機での深堀りを行い、さらに下部から遺構・遺物が検出されるかどうかの確認を行ったが、いずれも検出されなかつた。9月28日には調査区北東部分について文化行政課と協議を行い、8×12m(96m²)を目途に法線内を東側に拡張して調査を行うことになった(第6図)。これを受け、10月1日には重機で本格的に拡張部分の表土掘削を開始した。10月4日から作業員を投入して包含層掘削を行い、遺物が出土する範囲は拡張部分に収まることが確認された。10月10日には遺構精査を行つたが、遺構も検出されず、本遺跡は法線内にはこれ以上広がらないことが確認された。10月15日に文化行政課による終了確認が行われ、10月22日に現地を国土交通省に引き渡した。

3 調査体制

A 試掘調査

調査期間 平成17年5月9日～13日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括	波多 俊二（財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）
管理	長谷川二三夫（ 同 総務課長）
庶務	長谷川 靖（ 同 総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（ 同 調査課長）
指導	寺崎 裕助（ 同 試掘確認調査担当課長代理）
調査担当	滝沢 規朗（ 同 調査課班長）
職員	齐藤 準（ 同 調査課嘱託員）

調査期間 平成18年10月2日～10月13日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括	波多 俊二（財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）
管理	齊藤 栄（ 同 総務課長）
庶務	長谷川 靖（ 同 総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（ 同 調査課長）
調査担当	田海 義正（ 同 試掘確認調査担当課長代理）
職員	田中 一穂（ 同 調査課嘱託員）

B 本発掘調査

調査期間 平成19年7月18日～10月22日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括	木村 正昭（財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）
管理	齊藤 栄（ 同 総務課長）
庶務	長谷川 靖（ 同 総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（ 同 調査課長）
指導	高橋 保雄（ 同 本発掘調査担当課長代理）
調査担当	土橋由理子（ 同 調査課班長）
職員	小川 真一（ 同 文化財調査員）
支援組織	株式会社ノガミ
現場代理人	小熊 晋介（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部）
調査員	荒谷 伸郎（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部調査員）

4 整理の経過と体制

図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。10月22日から支援業者の整理室にて、本格的な整理を実施した。整理作業の主な流れは以下のようになる。

	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
本調査	準備工								
	調査								
	現場撤収								
	図面整理								
整理作業	遺物水洗・注記								
	遺物実測								
	遺物トレース								
	原稿執筆								
	編集・校正								

第3図 調査・整理の経過

整理期間 平成19年10月22日～平成20年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

整理 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括	木村 正昭（財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）
管理	斎藤 実（ 同 総務課長）
庶務	長谷川 靖（ 同 総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（ 同 調査課長）
指導	高橋 保雄（ 同 本発掘調査担当課長代理）
調査担当	土橋由理子（ 同 調査課班長）
職員	小川 真一（ 同 文化財調査員）
支援組織	株式会社ノガミ
調査員	荒谷 伸郎（株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部調査員）
整理作業員	磯部 真佐枝 潮田 亜紀 高橋 淑恵 星 芳子 山田 和子 (以上、株式会社ノガミ埋蔵文化財調査部)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

萩原遺跡が所在する阿賀町は、東蒲原郡の津川町、三川村、上川村、鹿瀬町の4町村が平成17年4月1日に合併してできた町である。阿賀町は新潟県の東部に位置し、県都新潟市から東へ磐越自動車道で約35分、一般国道49号では約60分で町の中心部に到達する距離にあり、東側は山形県・福島県の県境と接している。

阿賀町の中央には阿賀野川とその支流の常浪川が流れ、その沿岸の段丘を中心に開けた山間地域である。中心部は比較的平坦だが、周辺は急峻な山岳地帯に囲まれており、北に大きく飯豊山地が広がり、北西には越後山脈が南北に走っている。面積は952.88km²で新潟県内の市町村で2番目に広い面積を持ち、新潟県面積の約6.8%を占める。総人口14,825人、総世帯数5,270世帯である（平成19年3月31日現在）。

気候は、夏は高温多湿で他の地方と大差はないが、内陸盆地のため一日の温度変化、日格差が大きい。8月の平均気温は23.4℃、平均日照時間は182.9時間である。一方、1月の平均気温は0.3℃、平均日照時間は61.4時間（1日平均2時間程度）であり、寒く暗い冬となる。また、冬の降水量（雪）は12月と1月では200mmを越え、大変雪深い地域となる〔中島2006a〕。

東蒲原郡は12世紀から約700年間、会津による支配を受けていたが、会津にとって東蒲原郡の阿賀野川流域は、陸路・水路とも交通路として重要な役割を担っていた。阿賀野川を利用した水路は、会津から津川までは「揚川通船」、津川から新潟までは「津川船道」と呼ばれており、津川から新潟までの水運は安全で物流の中心であった〔中島2006a〕。現在でも、阿賀野川沿いに福島県に通じる磐越自動車道、一般国道49号が通っており、交通の重要な地域となっている。

2 地理的環境

阿賀町の北部には飯豊山地が位置している。飯豊山地は新潟県・山形県・福島県にまたがる山地であり、飯豊山（2,105m）、大日岳（2,128m）を中心にして1,000～2,000m級の山々が連なっている。南部には越後山脈の一部である日本平山（1,081m）、御神楽岳（1,386m）など1,000m級の山々が位置し、西部には、菱ヶ岳（974m）、五頭山（912m）を中心とする五頭山地、皆名岳（909m）を中心とする皆名山地が位置している。地質的にはブロック状の古生界（二疊・石炭系）と白亜紀花崗岩類などで構成されている〔歌代・高野1977〕。これに対し、旧津川町地域から会津地方にかけては、グリーンタフと呼ばれる凝灰岩が厚く堆積している。この地質の違いによって、この地域は丘陵性の低い山地と盆地となっている。また凝灰岩のほかに流紋岩などが多数貫入している特徴を持つ。これらの岩石は凝灰岩に比べて硬質であるため、差別侵食によって取り残された結果、麒麟山（195m）などのように切り立った岩山となり、この地域に独特の景観を作り出している〔鶴井1995〕。

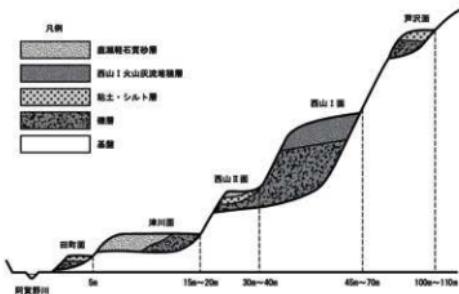
この山間部を横切って流長約210km、流域面積約7,710km²の阿賀野川が西流している。阿賀野川の源流は、福島県と栃木県の県境付近、荒海山（1,581m）から流れる阿賀川（大川）である。日光街道に沿

って北上し、猪苗代湖を源流とする日橋川と喜多方市塩川町会知地区付近で合流し、西へ向きを変え。さらに、尾瀬沼を源流とする只見川と喜多方市山都町三津合地区付近で合流する。新潟県に入ると阿賀野川と名を変え北に飯山盆地、南に越後山脈を望みながら、阿賀町津川地区で常浪川と、阿賀野市分田付近で早出川と合流。さらに新潟市万願寺付近で小阿賀野川と分流した後、新潟市松浜町付近で日本海に注ぐ〔高橋ほか2006〕。

この阿賀野川が阿賀町域を流下する際には、山地列を横断する付近では谷幅も狭く、直線的な最短路をとるが、山地と山地との間の凹部では、谷幅も広く曲流するようになり、中州の発達も見られる。このような流路はグリーンタフ地城を流れる河川の特徴である〔鈴木1986〕。河岸段丘は、この山地列を横断する付近には発達しておらず、山地間にみられる曲流の滑走斜面にまとまって分布している。河岸段丘がもっともよく発達しているのは阿賀野川と常浪川の合流部分であり、阿賀野川との比高、段丘堆積物から5面に区分される。高位面から「芦沢面」、「西山Ⅰ面」、「西山Ⅱ面」、「津川面」、「田町面」と呼称されており、阿賀野川流域の段丘の標識地となっている〔二宮1973〕。これらの河岸段丘の基盤層は、いずれも第三紀層である。「芦沢面」は阿賀野川河床との比高（以下に出てくる比高は、すべて阿賀野川河床との間の比高である）が85～105mで、開析されて丘陵状を呈する。堆積物は著しく風化した疊層と赤色土化したシルト層で、層厚は5m以上である。「西山Ⅰ面」は比高40～60mで、内縁部から外縁部にむかってゆるく傾斜している。堆積物は3m以上の疊層であり、その上に福島県大沼郡金山町に位置する沼沢火山を起源とする火山灰流堆積物が2mほど覆っている。「西山Ⅱ面」は西山Ⅰ段丘崖下の常浪川に沿って細長く分布する面で、比高は約35mである。堆積物は疊層、植物遺体を含む泥炭層および火山灰質の灰白色粘土層である。この面は西山Ⅰ段丘の堆積物を削り、その上を薄い堆積物で覆った面であると考えられる。「津川面」は比高約15mであり、堆積物は疊層、砂層および鹿瀬軽石質砂層である。「田町面」は比高約7mであり、堆積物は確認されない〔稲葉ほか1976〕。

前述した鹿瀬軽石質砂層は、福島県大沼郡金山町に位置する沼沢火山の噴出物である。しかし、噴火に伴う直接的な堆積層ではなく、噴出した火山灰や軽石が只見川、阿賀野川を流下して堆積した二次堆積層である。今までの研究では、この砂層は「津川面」に堆積しているとされていた〔稲葉ほか1976〕。しかし、「津川面」より一段上位の「西山Ⅱ面」においても、ここに立地する遺跡を発掘する過程で、この砂層が存在することが確認されている。既存の遺跡の中で、この砂層の最高地点は上野東遺跡の標高94mである〔高橋ほか2006〕。

鹿瀬軽石質砂層の堆積年代は、層中の炭化自然木片の放射性炭素年代測定法によって得られた結果から、 $4,950 \pm 100$ 年B.P.、 $5,030 \pm 100$ 年B.P頃と推定されている〔只見川第四紀研究グループ1966〕。このことから、その堆積時期が「縄文時代前期の後半」であると考えられる。これを裏付けるように、その後の遺跡発掘調査で、鹿瀬軽石質砂層の上下層から縄文時代前中期に比定される大木6式土器の出土事



第4図 段丘面模式図〔稲葉ほか1976を一部改変〕

例が報告されており、放射性炭素年代測定法で得られた年代との間に齟齬は見られない。このことから、阿賀野川流域で遺跡の発掘調査を行う際には、鹿瀬軽石質砂層が時代を特定する鍵層として重要視されている。

3 歴史的環境

阿賀町の遺跡分布状況を見てみると、その多くは阿賀野川及びその支流によって形成された河岸段丘上に位置している。その中でも、津川面に最も多く遺跡が位置しており、旧石器時代を除く各時代の遺跡が確認されている。旧石器時代の遺跡が存在している段丘は西山Ⅰ・Ⅱ面である。縄文時代以降の遺跡も数は少ないが確認されている。さらに高位の芦沢面には現在のところ、遺跡は発見されていない〔中島2006b〕。

阿賀町では1950年代から山間部の小瀬ヶ沢洞窟、室谷洞窟などで発掘調査が行われてきた。そして1990年代に入ると、磐越自動車道、常浪川ダムの開発に伴って遺跡調査が行われ、旧石器時代から平安時代まで幅広い時代の遺跡が相次いで報告された。さらに、本報告を含む一般国道49号揚川改良事業に伴う調査で、新たな成果が報告されている。

旧石器時代

これまで旧石器時代の遺跡の報告は、1968年に調査が行われた旧鹿瀬町角神A遺跡（6）のみであった。しかし、磐越自動車道の建設に伴う発掘調査で、旧三川村上ノ平遺跡（3）のA地点から1,091点、C地点から686点、さらに旧三川村吉ヶ沢遺跡（2）のB地点からは12,451点の旧石器時代の石器群が検出された。両遺跡から出土した石器は杉久保型を含むナイフ形石器と、神山型を含む彫刻刀形石器が主体であり、杉久保石器群の範疇に含まれる。後期旧石器時代後半に位置づけられている〔沢田ほか1994・1996・2004〕。2005年3月、これら2つの遺跡から出土した石器群1,103点が県指定有形文化財（考古資料）となった。

縄文時代

草創期

旧上川村小瀬ヶ沢洞窟（52）は日本を代表する草創期の遺跡である。1958～59年に中村孝三郎氏を中心に調査が行われ、微隆起線文・爪形文・多縄文などさまざまな文様をもつ土器や棒状尖頭器・有舌尖頭器・植刃などの石器が大量に発見された〔中村1960〕。この小瀬ヶ沢洞窟と並ぶ著名な洞窟遺跡に、同じ旧上川村に位置する室谷洞窟（57）がある。この洞窟遺跡は1960～62年に長岡市立科学博物館と新潟大学医学部解剖学教室が共同で調査を行い、草創期から弥生時代に至る各時期の遺物が層位的に発見された。さらに、縄文時代前期初頭とされる女性の入骨一体が屈葬状態で発見された。この人骨の他に6体の人骨が発見されており、これらの入骨は県内最古の人骨として貴重である。〔中村・小片1964〕。この2つの遺跡の調査結果は、縄文時代の時期区分に草創期を設定する一要因となり、学術的な面からも画期的な調査であった。また、両遺跡については、近年新たな観点を加えた再検討が行われ〔小野・鈴木1994；谷口1996〕。1999～2001年には国の重要文化財指定のための整理作業が行われた。これを受け2000年6月に小瀬ヶ沢洞窟、2000年12月に室谷洞窟の主要遺物がそれぞれ国指定重要文化財（考古資料）となった。

早期

早期の遺跡には旧上川村大谷原遺跡（56）、北野遺跡（41）、戸中遺跡（58）、鍵取遺跡（59）上小島遺跡（60）、旧津川町古志王遺跡（29）が挙げられる。

大谷原遺跡では、早期中葉と考えられる住居跡・水場・貯蔵穴・墓穴・集石などが検出された。水場を中心とする貯蔵穴群が存在し、その周間に住居跡と墓と考えられる土坑が弧線を描くように分布しており、この時期に規則的な施設配置が認められる点が注目される〔遠藤2006a〕。北野遺跡は前述した鹿瀬軽石質砂層を挟んで上層と下層に分かれるが、下層からは、周囲からの出土土器により早期中葉と考えられる竪穴住居跡5軒、土坑9基、焼土4基が検出された〔高橋・荒谷2003〕。古志王遺跡では、鹿瀬軽石質砂層を挟んだ下層から、川原石を2列に並べた配石遺構が検出されている〔國島2006a〕。

前期

北野遺跡、旧津川町猿額遺跡（22）、中棚遺跡（21）、大坂上道遺跡（23）、上野東遺跡（20）、現明嶽遺跡（18）、旧上川村八田蟹遺跡（50）、室谷居平遺跡（61）、池ノ尻遺跡（62）が前期の遺跡として挙げられる。これらの遺跡の中で、前述した鹿瀬軽石質砂層が確認されている遺跡は、北野遺跡、猿額遺跡、大坂上道遺跡、上野東遺跡、現明嶽遺跡、池ノ尻遺跡であり、いずれの遺跡でも前期に構築された遺構は同砂層より下層で検出されている。

それまで鹿瀬軽石質砂層の堆積は標高80m付近が最高位と考えられていたが、猿額遺跡では標高88mの高所まで及んでいたことが確認された。また同遺跡は鹿瀬軽石質砂層を挟んで上層と下層に分かれるが、上層から前期末葉に位置づけられる大木6式新段階の土器が出土し、下層から同じく前期末葉に位置づけられる大木6式古段階の土器が出土している。同砂層の堆積環境や堆積時期を考える上で貴重な資料となった〔滝沢ほか1995〕。なお、現在確認されている鹿瀬軽石質砂層の最高位は、前述したとおり上野東遺跡の標高94mである。北野遺跡では、前期後葉～末葉の集落跡が鹿瀬軽石質砂層によって覆われていたため、極めて良好な状態で保存されていた。環状集落や竪穴住居跡の周堤、フ拉斯コ状土坑の掘り上げ土などを含め、同砂層に覆われる直前の遺跡・地形が明らかになった〔高橋・荒谷2003〕。室谷居平遺跡では、大木2a式に比定される縄文土器や竪穴住居などが検出されており、前期中葉の集落跡と考えられる。〔遠藤2006b〕。

中期

中期に入ると遺跡数は急速に増加し、前期から続く北野遺跡、大坂上道遺跡、池ノ尻遺跡のほかに、旧津川町原遺跡（14）、桶川遺跡（40）、旧鹿瀬町長者屋敷遺跡（10）、角神D遺跡（9）、屋敷島遺跡（63）、大鹿瀬遺跡（27）、菱湯遺跡（64）、旧上川村キンカ杉遺跡（43）、粟瀬遺跡（53）、旧三川村五十島遺跡（65）、本書で報告を行う萩原遺跡（74）などが挙げられる。拠点的な大規模集落が築かれる点も注目される。

原遺跡では、1983年に町道の改良工事に伴い本発掘調査が行われ、調査の結果、縄文時代中期～後期の土坑16基を検出し、大木8a～10式を主体とする土器が出土した〔山武考古学研究所1984〕。その後、2002年～2003年にかけて行われた土地区画整理事業にかかる確認調査では、石圓炉・石組炉・土坑・柱穴・埋設土器などの遺構を検出し、大木8b式を主体とする土器が出土した。遺物が多量に出土したことや段丘の縁辺部を中心に遺構が検出されたことから、段丘上に大規模な環状集落があった可能性が高い〔國島2006b〕。長者屋敷遺跡は古くから知られている遺跡だが、1999年に行われた本発掘調査では中期～晩期の土器が出土している。また、遺跡の本体と思われる範囲から表面採集された土器は、中期中葉の大木8a～8b式と晩期前半を主体とし、この2つの時期に築かれた大規模集落であると考えられる〔石川

2006a】。角神D遺跡は、立地する段丘は比較的狭いが、遺物の表面採集が容易にできるほど遺物密度が濃い遺跡であり、中期中葉を主体とする拠点的な集落と考えられる【石川2006b】。屋敷島遺跡は阿賀野川右岸に位置するが、その対岸は福島県であるという県境に位置している遺跡で、2003～2004年にかけて本発掘調査が行われた。調査の結果、壁溝を持つ竪穴住居・長方形大型住居・フラスコ状土坑・蓋石を持つ逆位の埋設土器など多くの遺構が検出された。検出された住居の配列からは、環状集落あるいは馬蹄形集落の可能性が指摘されている。出土土器は大木7b式・大木8a式が主体であり、そのほかには磨石・石皿・敲石などの石器や土偶・三角彫形土製品などが出土している。土器の中には、口縁は大木8a式、胴上半部は馬高式という東北と越後の折衷型の土器が出土し、縄文中期においても北陸の様相を持つ越後と東北的様相を持つ会津との接触地域であったことが窺われる【中島2006c】。キンカ杉遺跡は1993年・1994年・2003年と三次にわたって約2,100m²の範囲を調査した遺跡である。それほど広い調査面積では無いにも関わらず、住居跡10軒、フラスコ状土坑60基、捨て場2か所、埋設土器4基、ほかビット多数が検出されており、この地域の拠点的集落と考えられている。この遺跡で検出されたフラスコ状土坑は、その配置から集落あるいは数住居単位での管理を示唆するものである。遺物は、大木7b式から大木8a式を主体とする多量の土器や現存する長さが27.7cmを測る大型の土偶などが出土しており、ほかにも三角形岩板や三角彫形土製品、石棒など当時の精神文化を物語る遺物が多く出土している【遠藤2006c】。また本発掘調査は行われていないものの、栗瀬遺跡は表面採集された遺物とその採集範囲から、中期前葉～中葉に築かれた大規模集落と推定されている【遠藤2006d】。

後期

後期の遺跡は、前期または中期と複合しているものが多く、萩原遺跡、北野遺跡上層、大坂上道遺跡、現明嶽遺跡、楠川遺跡、菱潟遺跡、旧上川村孤窓遺跡(49)、下小島遺跡(67)、大尾遺跡(68)、旧三川村堂田遺跡(1)、蟹沢遺跡(69)などがある。中期に引き続き、遺跡数は多い。

北野遺跡の上層では住居跡64軒、土坑328基、埋設土器132基、焼土18基、集石22基、掘立柱建物1棟、溝9条、性格不明遺構5基、ビット多数が検出された。これらは中期前葉～後期中葉の集落跡を構成する遺構であるが、出土した遺物から、多くは中期末葉～後期初頭の集落に営まれたものと考えられる。この時期の土器の系統は、東北系の大木10式古段階から在地系の三十稻場式が主体であり、これに関東系の加曾利E式、称名寺I・II式が混じる【高橋ほか2005】。現明嶽遺跡では、後期中葉の竪穴住居跡3軒、土坑10基、焼土1基、集石1基が検出された。本遺跡は幅の狭い段丘上に立地することから、集落の立地を考える上で特異な場所といえる。さらに、数は少ないがミニチュア土器、土偶、スタンプ形土製品、石棒、丸石など精神生活にかかる遺物が出土しており、注目される【高橋ほか2006】。孤窓遺跡は、後期初頭から後期中葉にかけて築かれた拠点的な集落である。本調査の結果、石棒・丸石とこれを取り巻く硬面が検出されており、当時の祭祀形態を表す重要な成果が得られている【遠藤2006e】。下小島遺跡は、東西35m、南北60mほどの比較的小規模な段丘面に立地し、加曾利B式と推定される土器や特殊な形態の石棒、スタンプ形土製品などが表面採集されている。狭い段丘面という立地から拠点的集落とは言い難いが、現明嶽遺跡と同様に、小規模ながら特殊遺物を有する遺跡として、後期の集落の在り方さらには集落の関係性を考える上で重要である【遠藤2006f】。大尾遺跡では、後期初頭の竪穴住居1軒、竪穴状造構1基、溝2条、配石土坑1基、土坑2基が検出されている。検出された配石土坑は、三十稻場式の土器が埋設されていたことや土坑の形状などから墓と考えられており、多孔石・石皿も出土しているので被葬者が特殊な人物の可能性がある。出土土器は後期初頭から前葉の土器が大半であり、拠点的

な集落であると考えられている〔遠藤2006g〕。堂田遺跡は、本発掘調査は行われていないものの後期前葉を主体とした土器が出土しており、大規模集落と推定されている〔伊与部2006〕。蟹沢遺跡は、後期前葉を主体とする土器が出土している。南側約200mには大集落のある堂田遺跡が位置しており、当遺跡との関連が考えられる〔伊与部・金子2006〕。

晩期

晩期の遺跡も中期・後期と複合しているものが多い。大坂上道遺跡、長者屋敷遺跡、楠川遺跡、旧上川村揚城遺跡(51)、大屋敷遺跡(44)などが挙げられる。揚城遺跡では、晩期中葉の大洞C2式から後葉の鳥屋1式にかけての土器が多く表面採集されている。また、わずか1点ではあるが縁泥石岩製の丸玉も採集されている。拠点的な集落遺跡であったと推測される〔阿部2006a〕。大屋敷遺跡では、晩期後半期の遺物を主体とし、該期の建物跡が2軒検出されている。東蒲原郡内において晩期末の集落跡が発掘調査された事例は少ないため、貴重な資料である〔阿部2006b〕。

そのほかには、旧三川村下西ノ沢遺跡(70)、若宮洞窟(4)、旧津川町入道岩洞窟(71)が挙げられる。下西ノ沢遺跡では、晩期末葉の鳥屋2式の土器が出土している。このほかに弥生前期の縄立式の土器も出土しており、県内でも希少な縄文晩期末から弥生前半への変遷を辿れる可能性のある遺跡である〔阿部2006c〕。

弥生時代

弥生時代に入ると遺跡数は極端に減少する。室谷洞窟、原遺跡、大屋敷遺跡、入道岩洞窟、若宮洞窟、下西ノ沢遺跡、吉ヶ沢遺跡、旧上川村入ヶ谷岩陰(46)、天ノ原B遺跡(72)などで確認されているにすぎない。これは山岳地帯が卓越し、平坦面が少ないという当地の状況により、弥生時代以降に確立した水田稲作文化を受容し切れなかった地形的要因が大きいと考えられる。

人ヶ谷岩陰では、1985年・1986年に新潟大学による学術調査が行われている。調査の結果、火を使用した場所を示す灰層が3か所検出された。出土した土器は弥生前期の縄立式が主体であり、器種構成と使用痕の観察から、煮炊きに用いる道具が多いとしている。石器は石鎚が大部分であり、ニホンカモシカやツキノワグマを主体とした獸骨が多量に出土していることから、狩猟地における短期逗留の場として使用された可能性が高い〔阿部2006d〕。

古墳時代・古代

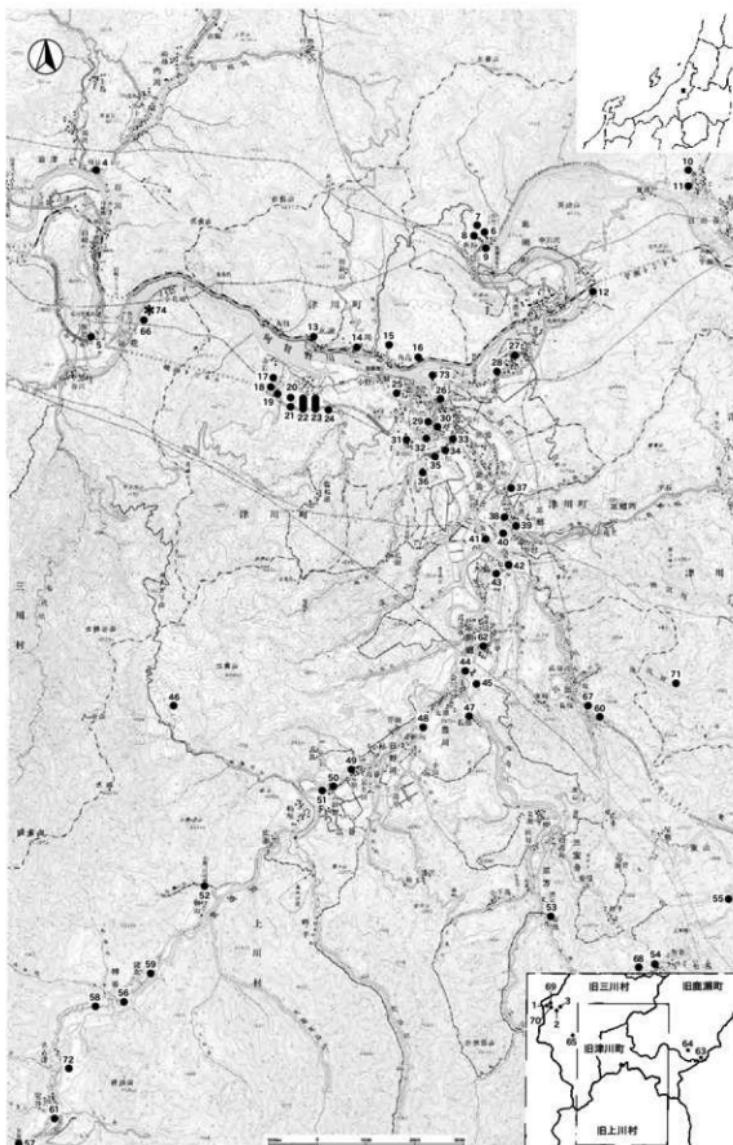
弥生時代から引き続いている遺跡数は少ないままであるが、平安時代の遺跡はいくつか確認されており、大坂上道遺跡、上野東遺跡などを挙げることができる。上野東遺跡では、カマドを有する9世紀後半～10世紀初頭と推定される住居が検出された。これは東蒲原郡内における平安時代の住居の初例となった。〔高橋ほか2006〕。大坂上道遺跡では、1992・1993年の調査で平安時代の須恵器・土師器・黒色土器が少量であるが検出された。このうち会津大戸窯産の須恵器が数点確認されている。大戸窯産の須恵器が確認されたのは県内では初例である。〔滝沢ほか1995〕。また同遺跡は、2006年に行われた一般国道49号揚川改良に伴う調査では平安時代の住居跡・掘立柱建物が検出され、近接する遺物包含層から腰帶石鈇(巡方)が出土している。石鈇の出土はこの地域では初例で、古代史を解明する上で重要な資料である〔桐原ほか2008〕。

中世・近世

北野遺跡の上層から中世の建物跡・溝・近世の墓などが検出されているが、この時代の遺跡も数が少ない。県指定史跡となっている津川城跡(73)は、1252(建長4)年に藤倉盛弘により、阿賀野川と常浪川の合流点に位置する鶴鳴山に築かれた山城である。特に会津藩にとって1627(寛永4)年に江戸幕府の命により取り壊されるまで、越後・会津国境の重要な拠点であった。

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	堂 田	純文(中・晚期)	38	高 澤	純文、奈良、平安
2	吉 ケ 沢	旧石器、純文(前期)	39	天 澤	満 純文
3	上 ノ 平	旧石器、純文(前・後期)	40	補 川	純文(中・後・晚期)
4	若 宮 洞 窟	純文(晚期)	41	北 野	純文(早・前・中・後期)、中世、近世
5	牧 ノ 沢	純文(後・晚期)	42	七 塚 道 下	純文(中・後・晚期)
6	角 神 A	旧石器	43	キ ン カ 杉	純文(中期)
7	角 神 B	純文	44	大 星 敷	純文(中・後・晚期)
8	角 神 C	純文	45	開 後	純文
9	角 神 D	純文(中期)	46	人 ケ 谷 岩 陰	純文(晚期)
10	長 者 尾 敷	純文(中・後・晚期)	47	石 烟	純文
11	中 貝	純文(中期)	48	山 口	純文
12	深 戸	純文(中期)	49	猿 窪	純文(中・後・晚期)
13	大 師 堂	純文(後期)	50	八 田 蟹	純文
14	原	純文(中・後・晚期)	51	堀 城	純文(晚期)
15	角 嶺 岩 陰	純文(後期)	52	小瀧ヶ沢洞窟	純文(草創・早期)
16	角 嶺 山	純文(後期)	53	東 澤 B	純文(中・後期)
17	赤 岩	純文(中・後・晚期)	54	谷 地	純文(中・後期)
18	現 明 嵐	純文(前・後期)	55	中 山	純文
19	上 野	純文(前期)	56	大 谷 原	純文(早・中期)
20	上 野 東	純文(前・後・晚期)、平安	57	室 谷 利 宿	純文(草創・早・中・後・晚期)、平安
21	中 横 顕	純文(前・中期)	58	戸 中	純文(早・中期)
22	猿 顕	純文(前・中期)	59	鍵 取	純文(早期)
23	大坂 上 道	純文(中・後期)	60	上 小 島	純文(早期)
24	今 井 野	純文	61	室 谷 居 平	純文(前期)
25	小 野 戸	平安	62	池 ノ 戸	純文(前・中期)
26	上 犀 麋 町	純文(中・晚期)	63	屋 戴 島	純文
27	大 鹿 澤	純文(後期)	64	菱 湯	純文(中期)
28	瓢 鳴 山 東 方	純文	65	五 十 島	純文(中期)
29	古 志 王	純文(中・晚期)	66	小 花 地	純文(中・後期)
30	金 花 清 水	純文	67	下 小 島	純文(後期)
31	上 ノ 山	純文、平安	68	大 尾	純文(中・後期)
32	羽 黒 林	純文	69	蟹 沢	純文(後期)
33	中 島	純文	70	下 西 ノ 沢	純文(晚期)、弥生(前期)
34	奥 田	純文	71	人 道 岩 洞 窟	純文(晚期)、弥生(中期)
35	大 舟	純文	72	天 ノ 原 B	弥生
36	エ ン マ 坂	旧石器	73	津 川 城 跡	中世、近世
37	吉 天 神	純文(後・晚期)	74	萩 原	純文(中・後期)

第1表 周辺の主要遺跡一覧



第5図 萩原遺跡及び周辺の遺跡地図

(国土地理院発行 平成11年「津川」「野沢」平成9年「御神楽岳」平成元年「大日岳」1:50,000原図)

第III章 調査の概要

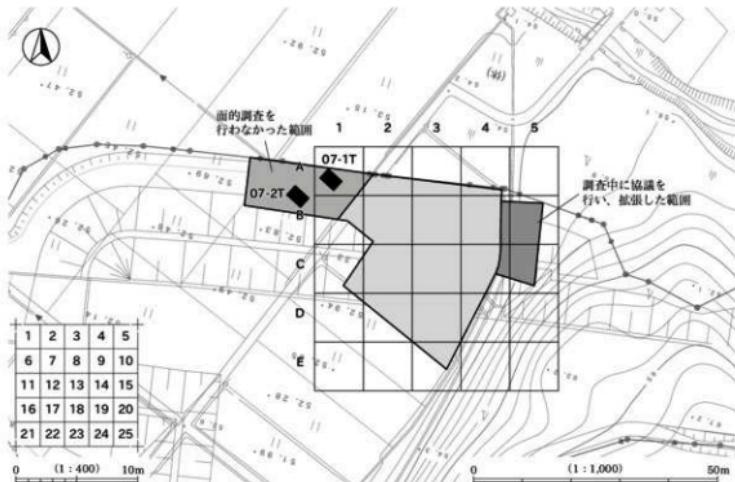
1 調査の概要

A 遺跡の立地と微地形

萩原遺跡は、南流する阿賀野川の左岸、流れから東に約120m離れた河岸段丘上に位置する。

遺跡が位置する段丘は東側に、段丘崖と段丘崖から続く丘陵が迫っており、長さ約1.1km、最大幅約180mの北東-南西方向に細長い地形を示す（図版1）。この段丘は、標高約53m、阿賀野川との比高が10m程度であることから、「津川面」〔二宮1973〕であると考えられる。この段丘は東から西方向に向かって緩やかに傾斜している。この斜面は、遺跡の北40mほど離れたところを西流して阿賀野川に注ぐ支流によって形成された扇状地部分で特に発達している（図版1）。なお、この遺跡の立地する段丘よりもさらに低位の段丘が存在する。しかし、遺跡周辺では阿賀野川の下流500mでの掲川ダム建設によって水没してしまい、現在は確認することができない。

遺跡周辺の土地利用であるが、明治期の地形図から判断するかぎり、積極的な土地利用はなされていなかったようである。その後、遺跡及び周辺が水田や畑などに利用されるようになったのは、昭和初期に客土を用いた耕作整理が行われた以降であるといふ。この客土は、基本層序のIb層（第7図）に相当すると考えられる。なお、同じ段丘面に位置する遺跡としては、本遺跡から南西に200m離れた地点に、純文時代中期中葉の遺物が出土した小花地遺跡（第5図）がある。



第6図 グリッド設定図・小グリッド模式図

B グリッドの設定

グリッドは、国家座標WGS系に沿って10mの方眼を組み、これを大グリッドとした（第6図）。大グリッドの呼称は、西から東へアラビア数字で1～5、北から南でアルファベットの大文字でA～Eとした記号を組み合わせ、1A・2A……、1B・2B……、1C・2C……のように呼称した。さらに大グリッド内を25分割し、北西隅を1、北東隅を5、南西隅を21、南東隅を25となるように番号を付し、大グリッド番号との組み合わせで、「3C21」等と表した。調査範囲のはば中央に位置する3Cグリッド北西隅の杭の座標はX=188350.000、Y=78980.000である。

なお、調査区際には農作業用の水路が廻っており、調査区の境界線際まで掘削を行ってしまうと、この水路が崩壊してしまう危険性があった。よって、水路から十分な距離をとって表土掘削を行った。

2 基本層序

本遺跡は阿賀野川によって形成された河岸段丘上に立地している。段丘の形成過程については、基本層序として把握したV層以前の堆積層については、重機による掘削によって確認できた深度（図版15）までは、阿賀野川本流によって供給された土砂によって形成されたと理解し得るものであった。その後、阿賀野川からの離水により比較的安定した状態が維持し、地表化が進む時期（IV層）を経て、人々が生活の痕跡を残す時期を迎える（III層）。しかし、この生活の跡は、遺跡の北を西流して阿賀野川に注ぐ支流で発生した土石流（II層）により短期間のうちに埋没したと考えられる。このII層は1m以上の層厚であったために、本遺跡は後世の擾乱を逃れ、遺存状態は極めて良好であった。この土石流を伴う支流の活発な活動痕跡は、支流をはさんだ北東側に広がる扇状地地形からも読み取ることができる。

調査区内における各層序の局地的な比較では、土質・土色に若干の違いがみられたが、本質的な層序の理解をこえるものではなく、調査区内全域にて同一認識の下での対応が可能であった。なお、試掘調査において間層を挟んで検出された2つの遺物包含層は、調査区全域での表土掘削の過程を経て、同一層中の上下の内で理解するよう認識を改めた。これにより調査方針も、単層調査へと変更した。この間層状の堆積はIII層中に局所的に存在し、同層中に普遍的に混入する破碎礫の集中と理解される。これをIII層内で完結する小規模な水成作用によって形成された可能性が高いと判断した。

以下、基本層序I～V層の説明をする（第7図）。本遺跡は阿賀野川と、その支流によって形成された段丘の北東から南西方向へ下る緩斜面上に位置している。この傾斜している状況を表現するため、基本層序の上層の取得は① - ② - ③ラインと② - ④ラインで行った。なお、本調査は既報の試掘調査〔齐藤2006〕の基本層序とは異なる層序を用いて行った。

I a層：灰褐色シルト（7.5YR4/2） 粘性中 しまり中 層厚10～40cm。近現代の耕作土。

I b層：黄褐色粘質シルト（10YR5/6） 粘性弱 しまり強

層厚15cm。遺跡外からの客土。ローム質土が選択されており、近現代の田面の床土に用いられた。地域の人の話によると、この床土が用いられるより以前の当地は、保水性に乏しく耕作には向きであったとのことである。

II層：暗褐色粘質シルト（7.5YR3/3）～褐色粘質シルト（7.5YR4/4） 粘性中 しまり中

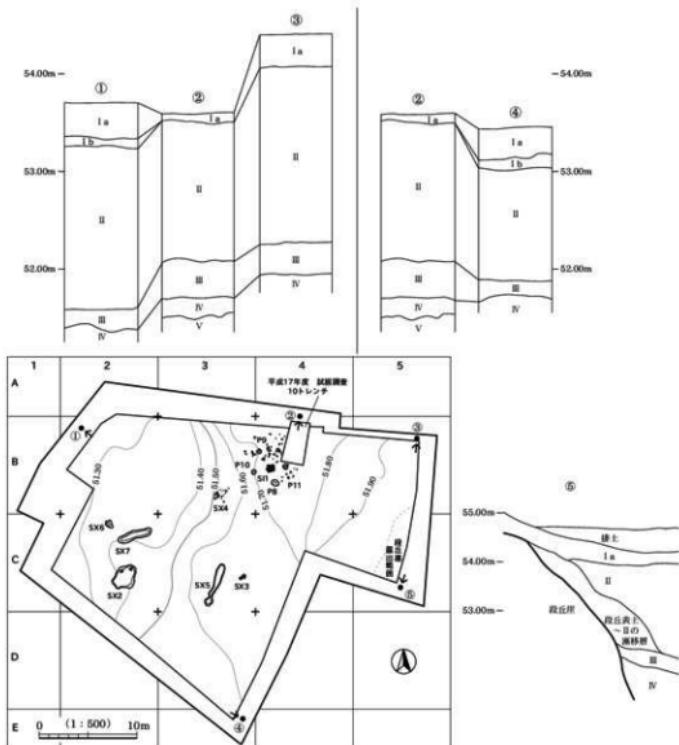
暗赤褐色粘質シルト（5YR3/3）～にぶい赤褐色粘質シルト（5YR4/3） 粘性中 しまり中

層厚 120 ~ 180cm。径 1 ~ 80mm の砂、及び破碎礫を 3 ~ 20 % 含む。混入を完全に否定し得ないが、無遺物層という認識で調査を行った。砂を含まない層であることや破碎状態の礫を多量に含むことから、堆積土は阿賀野川本流から供給されたものではなく、調査区の北側を西流する阿賀野川支流から土石流によって供給されたと考えられる。これは本遺跡から支流を 200m 上った地点においても同様の土質を示す堆積層が存在することでも追認し得た。

土質・混入物の差異からは、層状に複数回、断続的に堆積したと理解できる部分が存在する。しかし、層の上部と下部では混入物の差異による分層は可能であるものの、土質・土色については違いがみられず、正確な回数については明らかにできない。なお、堆積が層状であることから、調査区の東側にある段丘斜面からの崩落土が本層中に介在した可能性は低い。本層が、土石流により短期間の内に堆積した状況を示していると考えられる。

III層：褐色粘質シルト (7.5YR4/3) ~ 暗褐色粘質シルト (7.5YR3/3) 粘性中 しまり中

縄文時代中期後葉および後期前葉～中葉の遺物包含層。層厚 10 ~ 30cm で、北側の支流に近い



第7図 基本層序

地点では厚い傾向がある。径1～5mmの砂、及び破碎礫を1～3%均等に、径1～5mmの炭化物粒を局所的に1%含む。Ⅱ層に比べて本層のほうが破碎礫を含む比率が低い。Ⅱ層と土質・土色ともに近似することから、堆積土はⅡ層と同様に北側を西流する阿賀野川支流から供給されたと考えられる。

上記のようにⅡ層とⅢ層は視覚的に近似していることから当初、遺物についても土石流による他地点からの流入の可能性が高いとの認識で調査にあたっていた。しかし、調査を進めるにつれて、遺物の出土レベルがⅢ層の下部10cmからⅣ層上面にかけての部分に揃う状況、および住居跡と考えられるSI1周辺に遺物が集中的に散布するという人為的と考えられる状況が明らかになってきた。これらを受けて、出土した遺物の多くが人為的な行動に直接的に関わっていると認識を改めた。一方で土石流による流入、移動の可能性を否定できないものもあり、出土した遺物が人為的な行為に伴う原位置を保つものか、他地点から流入したものかについては明確には分離し得なかった。したがって、Ⅲ層の下端から10cmより高い位置で出土した遺物については、Ⅲ層上部がⅡ層堆積時の土石流の影響を多分に受けていると考える必要があり、原位置ではなく土石流によって巻き上げられたか、他地点から流入した可能性も考慮されなければならない。この部分から出土した遺物については、認識し得たもののみだが、観察表に「Ⅲ層（上位）」と記載した。

IV層：暗褐色シルト（7.5YR3/4）～黒褐色シルト（7.5YR3/2）粘性弱 しまり中

層厚20cm。基本的に混入物を含まないが、極めて局所的にはあるが径1mmの炭化物粒を1%、径1mmの砂を1%以下の割り合いで含む地点がある。無遺物層であり、本層上面を本調査での遺構確認面とした。地表化した後に形成された比較的安定した土壤であり、斑状の黒色化した部分は植物性の作用によるものと考えられる。上位のⅡ・Ⅲ層に比べて保水力が強く、調査中はⅡ・Ⅲ層を浸透した地下水がⅣ層中に含まれ、浸み出している状況が確認された。

V層：褐色シルト（7.5YR4/6）～灰褐色シルト（7.5YR4/2）粘性弱 しまり強

上位層と比較すると粒度が揃い、混入物も少ない。乾燥状態ではサラサラした状態となる。調査区西端に進むにしたがって硬化し、径1～3mmの輕石粒を1%均等に、径1～5mmの砂、及び円礫を3%均等に含む。通常、津川面には約5千年前に降下した沼沢火山を起源とする火山灰の二次堆積層である鹿瀬輕石質砂層が認められることが多く、本層がそれに対応するのではないかと考へて調査を進めていた。しかし、通常この段丘面で確認される鹿瀬輕石質砂層はしまりが弱く、砂や輕石を大量に含んでいる点と比較すると、本層には粒の粗い砂や輕石などが含まれず、しまりが強い点で相違がみられる。そのため本層は、約5千年前の火山灰の再堆積層ではなく、現在から約5万年前に降下した沼沢起源の火山灰の再堆積層である可能性も指摘された¹⁾。

V層以下については、重機による掘削が可能な深度までは阿賀野川の河川堆積層であることを確認した（図版15）。加えて、この河川堆積層中に5万年前に降下した沼沢起源の火山灰の2次堆積物を含むとのご教示²⁾も得ることができた。また、調査区の東壁では上位段丘の段丘崖が露出した（第7図）。この上位段丘は「地すべり地形分布図³⁾」によると、地すべりによる斜面移動体とされている。包含層との新旧関

1) 今回の調査に関わる地質全般については、高濱信行氏（新潟大学災害復興科学センター）から現地にてご教示をいただいた。

2) 馬場綾佳氏（新潟大学大学院生）の顕微鏡を用いた観察による。

3) 独立行政法人防災科学技術研究所がインターネット上で公開している。

係については、第7図⑤の土層堆積の観察により相対的に古いものであることを確認した。これにより、段丘下に包含層が潜りこんで存在することないと判断し、ここを調査範囲の東端として確定した。

3 調査の基本方針

土層注記にあたっては客觀性を確保するため、現場での調査段階において調査員間で共通認識を持ち、記載を行った。

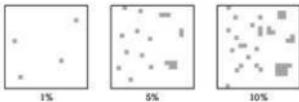
色 調 農林水産省農林水産技術會議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』(2002年版)を使用したが、色調は乾燥の度合い、空気に触れた後の酸化の進行によって著しく変化する。可能な限り水分を含んだ新鮮な状態で色調を判断するように心がけた。

土 質 本遺跡の土質は基本的には「シルト」であるが、より粘性が強く粒子が細かいシルトを「粘質シルト」、より粘性が弱く粒子が粗いシルトを「砂質シルト」と区別した。

粘 性 同じ土質に分類された土層の中で、さらに強・中・弱の3段階で細分した。感覚的要素が強く関係する記載であるが、調査員が相互に共通認識の構築に努め、記載内容にズレがないように記載した。

しまり 十分に水分を含んだ状態で、強・中・弱の3段階で区別した。しまりは、粘性と同様に極めて感覚的要素が多い記載であるので、この記載についても調査員が相互に共通認識を持って行った。

混入物 混入物には、炭化物、破碎砾、焼土等が認められた。混入物の含有率は、色調と同様に『新版 標準土色帖』(2002年版)に基づいて判断した(第8図)。また、混入の状態は、その土層について均等に混入するのか濃集するのかを明記し、混入物の粒径も記載した。



第8図 混入物の含有率 (『新版標準土色帖』から作成)

第IV章 遺構

1 概要

確認した遺構は、住居1軒（付隨するピット4基を含む）、集石1基、性格不明遺構5基である。いずれもIII層中、及びIV層上面で確認した遺構である。このうち、明確に人為的な痕跡が認められるのは住居、集石、性格不明遺構に含んだSX2の3つに限定され、ほかは自然的な要因で形成された可能性を含む。なお、遺構番号は種別ごとではなく、住居に付隨するピットも含み、通し番号を付してある。

2 遺構各説

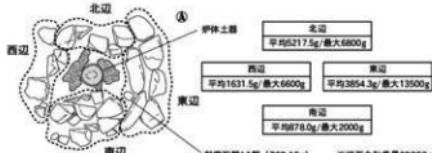
A 住居

S11（図版3・4・16～18）

土器埋設石組炉とその周辺に広がる敷石部及び、その範囲内から検出されたピット（P8・9・10・11）をもって構成される遺構である。なお、図版3の配置は便宜的に、炉の北側の一辺を下に置いて設定したものである。

位置・形態・規模 炉の置かれる4B11グリッドを中心位置する。III層掘削中に炉石の露出により確認した。IV層上面に構築される遺構である。確認後は竪穴住居を想定し、土層観察用ベルトの設定を行なったが、掘り込みを認識できなかった。これは、いわゆる平地式住居として構築されたか、あるいは掘り込みが極端に浅いためと考えられる。そのため、建物としての規模を数値で明確にし得ないが、礫の配置状況、遺物の出土状況から、概ね3B10・15・20、4B1・2・6・7・11・12・16・17グリッドの範囲内に収まるものと想定される。この内に礫が敷かれるのは、主に炉の東から北側にかけて、東から西方向へと緩やかに下る傾斜地である。配置は自然地形に従っており、平坦な床面は作出されなかつたと考えられる。一方の炉の西側では、遺物、礫共に出土が少なく、機能時の形態を留めていない可能性もある。配される礫の大きさは大小様々なものが用いられており、大形のものは北側に集中し、扁平な形状を呈するものが多い。この範囲から出土した礫の合計重量は、57.0kg、内、最大のものは9.7kgである。

炉 いわゆる「土器埋設石組炉」[高橋2007]に分類し得る。石組み部分の形態は不整であるが、概ね方形を意図して構築したものと考えられ、この内に土器の胴下半部分（図版5-1）が埋設される。この炉体土器の周囲では、厚さ2～5cmの焼土が形成されている。炉の規模は、東西約90cm、南北約85cmである。用いられる礫は、東辺で敲磨石類A1類からの転用が1点みられる以外は大きさ、形状共に多様な自然礫を用いている。この内、細長い棒状の礫は、東辺のように寝かせて配置されるものもあれば、西辺でのようすに掘り形を深く取り、立てて配置されるものもある。さらに各辺の構築状況を比較（第9図）すると、北・東・西・各辺では比較的大形の礫を用い、北・西辺



第9図 炉の部位名称と礫重量計測値

では掘り形も深く、しっかりと据えられるものがある。一方、南側に配される礫は小形のものが主体である。据え方も、掘り形は有しているものの、深い位置に据えられるものは皆無で、いずれも床面と同じ高さに並べるような状態で配置されていた。また、掘り形埋土の観察では、5・6層間は新旧とも理解できる分層線であり、炉の作り替えが行なわれた可能性を指摘できる。石材は、安山岩、花崗岩、凝灰岩、砂岩が用いられている。これらは遺跡近隣で取得可能な石材で、特に花崗岩については調査区東側に接する段丘斜面で路頭を確認しており、特に容易に調達出来たと考えられる。なお、炉の機能面上に堆積した1層、及び構築土の一部について土壤サンプルを取得し、水洗選別を行なったが、有用な遺物の回収には至らなかつた。

柱穴 P8・9・10・11の4基のピットを検出した(第2表)。礫、遺物を取り上げた後に精査を行い、炭化化物の混入する覆土により確認した。しかし、覆土の色調、

P.No.	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
P8	80	68	18	
P9	44	41	8	覆土中から剥片1点が出土
P10	48	42	30	
P11	52	44	30	

第2表 ピット計測表

土質はIV層と容易に識別できるものではなく、炭化化物の混入以外に覆土と認定できる要素は極めて薄い。そのため精査、トレンチ掘削の手段を用いても視認し得ない柱穴の存在も否定できない。いずれも形態は不整な円形で、深さも一定しない。遺物は、P9から剥片が1点出土するのみである。

出土遺物 出土遺物については、炉、及びピット部分を除き、掘り込みを有さない造構のため、覆土からの出土遺物は存在しない。しかし、住居と想定される範囲内から出土した遺物については、調査時の所見に出土状況図(図版3)を添えることで、SI1出土土器して報告することとした。ここでは、出土状況を中心に記載する。

土器は、小破片が散乱するような状態での出土で、重量の総合計は2,097gであった。炉の直近からは出土せず、東側から北側にかけて集中する分布を示す。しかし、調査区内での土器出土量のピークはさらにこの東側、小グリッドをひとつ挟んだ4B14グリッド周辺にあり、住居と想定した範囲内に出土が偏るわけではない。時期は、後期前葉に位置付けられるもので占められている。その内は、南三十番場式に比定されるものが主体で、系統を異にするものはわずか(9・10・13)である。

石器は、不定形石器が8点、磨製石斧2点、磨製石斧未成品2点、敲磨石類8点、多面体敲石5点、砥石7点(破片含む)、石皿2点、石鑿未成品2点、石核3点、剥片類26点が出土した。

石核3点が出土する4B12グリッドでは、剥片類も16点と集中して出土している。一方、範囲内から散漫に出土する不定形石器は、このグリッド中からは出土しない。

礫石器では、磨製石斧製作との関連性が指摘される多面体敲石、砥石の出土が目立つ。4B2・6・7グリッドでは、砥石(174)を中心とした半径1.8m以内から磨製石斧1点、多面体敲石3点、砥石1点が近接して出土している。また、石皿、砥石については敷石として転用されたもの可能性もある。

時期 炉体土器からは判断できず、その構造上、本造構に伴う遺物も明確にし得ないため、断定できない。ここでは、北野遺跡での分析を通して土器埋設石組炉の出現を本遺跡でのI期(群)より新しい「大木10式新段階」[高橋2007]とした指摘、及び周辺から出土した土器の様相を合わせて勘案し、II期(群)とした後期前葉の可能性が高いとしておく。

B 集 石

SX4(図版4・18)

3B18・19・23・24グリッドに位置する礫の集中がみられる地点である。III層中に構築される。こ

のうち南北180cm、東西140cmの範囲を図示した。大形の礫では、扁平な円形の自然礫（194）、破損した石皿（183・185）が配されている。この範囲内から、土器、及び石器が出土している。土器は927g出土し、いずれも小破片である。石器は、不定形石器1点、打製石斧1点、敲磨石類3点、多面体敲石1点、砥石1点、石皿2点、剥片類3点が出土している。時期は、明確にし得ないが、周辺から出土した土器の状況から後期前葉の可能性が高い。

C 性格不明遺構

SX2 (図版4・18)

2C13・14・18・19グリッドに位置する。IV層上面で確認した。規模は長径が280cm、短径208cm、深さ23cmを測る。平面形は円形、断面形は浅い皿状である。単層の覆土中に炭化物・焼土ブロックを含む。これらは現地での被熱の痕跡は見出せなかつたため、別地点から持ち込まれて廃棄されたものと考えられる。遺物は出土していない。そのため、時期を明確にし得ない。

SX3 (図版4・19)

3C20グリッドに位置する。IV層上面で褐鉄鉱に縁取られる平面プランを検出した。規模は長径73cm、短径35cm、深さ24cmを測る。平面形は不定形、断面形は半円状である。覆土は2層に識別されるが、1層と2層との層理面に褐鉄鉱を含む特徴を持つ。遺物は出土していない。今回の調査範囲ではIV層上面で、SX3と同様の褐鉄鉱に縁取られた平面プランを複数検出した。しかし、その多くは平面形、断面形とも極めて不定形であり、人為的な掘り込みではないと判断した。よって、本遺構も人為的な遺構の可能性は低いと考える。

SX5 (図版4・19)

3C14・18・19・23グリッドに位置する。IV層上面で確認した。規模は長径444cm、短径76cm、深さ12cmを測る。平面形は溝状、断面形は弧状である。覆土は単層であり、径1～15mmの破碎礫を7%含む。IV層は破碎礫をほとんど含まない土層のため、平面プランの検出は容易であった。出土遺物は、土器が318g、石器は不定形石器D類1点が出土している。

SX6 (図版4・19)

2C3グリッドに位置する。IV層上面で褐鉄鉱に縁取られる平面プランを検出した。規模は長径93cm、短径66cm、深さ14cmを測る。平面形は不定形、断面形は弧状である。覆土は単層であり、IV層との層理面に褐鉄鉱を含む特徴を持つ。遺物は出土していない。平面形・覆土の特徴がSX3と共通することから、人為的な掘り込みの可能性は低いと判断した。

SX7 (図版4・19)

2C4・5・9・10グリッドに位置する。IV層上面で確認した。規模は長径350cm、短径80cm、深さ10cmを測る。平面形は溝状、断面形は弧状である。覆土は単層であり、径1～15mmの破碎礫を7%含む。遺物は出土していない。IV層は破碎礫をほとんど含まない土層のため、SX5と同様に平面プランの検出は容易であった。主軸方向が調査区の傾斜方向と一致することから、IV層上面に存在した小規模な水の流れによって形成された窪地とも理解できる。

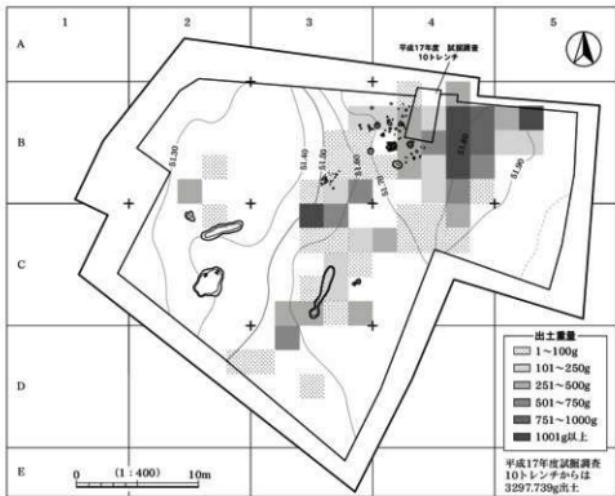
第V章 遺物

1 概要

遺物は、遺物包含層であるⅢ層からのみ出土している。これは、第Ⅲ章で述べたとおり、遺跡の埋没が土石流により短期間のうちに終了し、厚い堆積土に覆われたため、後世の擾乱や遺物の混入を逃れたことによる。そのため、包含層から出土する遺物も縄文時代のものに限定される。その出土量は、縄文土器20,109.62g、土製品1点、石器160点、石製品1点である。

2 縄文土器 (図版5~7・20~22)

土器は、中期後葉、後期前葉、後期中葉の3時期のものが出土している。各時期の間には土器型式の空白期を挟み、当時の土地利用が断続的であった可能性を示している。出土はSI1の東、4B9・10・14・15・19グリッド周辺に集中域を見出せ、ここから南西方向へと伸びる帶状の分布を示している(第10図)。この帶状の分布域の内でも、南に向かうにつれて出土量が希薄になる。この帶から外れると、出土量は極端に少くなり、散発的に出土する2B・2Cグリッドでの出土も合計で507gに留まる。



第10図 縄文土器出土分布図

A 資料の提示

(1) 掲載資料抽出の視点

今回主体的に出土した後期前葉の土器は、文様の個体差が大きい。加えて、絶対的な出土量の少なさもあり、文様を有する土器（地縄文を除く）に関しては可能な限り抽出し、掲載した。分類は、大別時期とその系統の把握に重点を置くものとした。各説では、「遺構出土」、「包含層出土」、「試掘調査出土土器」の3項目を設けて報告する。記述内容は、文様構成、風化、摩滅の状況や付着物の状況、器壁の質感など、観察表で表現しきれない個々の属性を補うよう努めた。

(2) 観察表の記載項目

No. 土器の掲載番号であり、実測図番号、写真番号に一致する。

遺構名・出土地点 遺構出土のものは遺構名を、包含層出土のものは、原則として小グリッドまでを記載した。試掘調査時に出土したものは、第2図で示したトレンチ番号を記載した。

層位 遺構覆土から出土したものは遺構固有の層名を、包含層から出土したものは基本層序の層名を記載した。試掘調査時に出土した土器については、本発掘調査と異なる層名が与えられている。これについては先立って公刊済み〔齊藤2006〕であることから、本欄には試掘調査時に用いられていた層名をそのまま記載し、「備考」にて本発掘調査で用いた層序との対応関係について明示した。

器種 器形、調整、文様等から器種を判断し、記載した。

縄文原体 施文された縄文の原体記号を記載し、施文方向は矢印で示した。横位の場合は「→」、縱位の場合は「↓」として記入した。燃糸文は、回転方向のみを記載した。

色調 『新版 標準土色帖』(2002年版)を用いて、記載した。

混和材等 胎土の観察を試みたが、有用な分類の抽出には至らなかった。所見は、個別の土器の相対的な比較の参考として、簡潔にまとめ記載した。

備考 各土器が有する個別的な属性を記載した。また、口径、底径の計測値は(○cm)内に、推定復元した口径の推定値は〔○cm〕内に、スヌの付着状況は〈内面：外側〉内にそれぞれ記載した。

B 分類

I群土器 中期後葉の土器群である。

II群土器 後期前葉の土器群である。

1a類 南三十稻場式に比定される土器で、沈線を主文様として文様を描出するもの。

1b類 南三十稻場式に比定される土器で、沈線に加え、刺突文を施して文様を描出するもの。

2類 非在地系の土器である。

III群土器 後期中葉の土器群である。

IV群土器 時期により分類し得なかった土器群である。いずれもI～III群に伴うものと考えられる。

C 各説

(1) 遺構出土土器 (図版5・20)

S11 (1～22) 遺構各説で述べたとおり、炉、及びピット部分を除き、固有の覆土を有さない遺構であ

る。しかし本遺構が、その構造的に時期決定の要素を欠くことも考慮し、ここでは資料の提示を優先したい。するために調査段階から、遺物と縄との位置関係、面的に遺物が広がる状況を加味した上で出土状況の観察記録を行った。ここで遺構との関連性を積極的に評価し得たものを遺構出土遺物として取り上げ、SI1出土土器として報告する。しかし、この方法では遺構との関連性の弱い、本来、包含層出土遺物とすべきものを含んでしまっている可能性が少なからずあることも明示し、遺構出土の一括性を保持しないことと合わせて、改めて断つておくものである。

1は、炉に埋設された炉体土器であり、唯一、確実に本遺構に伴うといえる土器である。器壁は脆く、文様は縄文部分が残存するが、時期決定の要素を欠く。

2～4・6・8・11・12・14～17は南三十稻場式に比定されるもの（II群1類）である。2・3・6は口縁部片で、凹線が施される。4は口縁部の凹線が連続刺突により描出されると考え、II群1b類とした。8は3単位（残存は2）の突起が施される深鉢で口唇部には刻み、口縁部には凹線が突起間を結ぶように施される。以下、口頭部は無文となり頸部には4本の横位沈線が巡る。胴部には縦位の集合沈線が施されている。11・12は沈線の集合化がより明確で、66に近似する文様構成となろうか。17は鉢である。内湾しながら立ち上がる器形で、口縁部は内面がわずかに肥厚している。文様は、横位の刺突列間に集合沈線が配されている。これは、南三十稻場式では普遍的な文様構成といえるが、器種を鉢に限定すれば類例に乏しい。その施文は細くて浅い繊細なものであるが、文様描写は精緻さを欠いている。

9・10・13は南三十稻場式と併行関係にある、いわゆる非在地系の土器（II群2類）である。9は口縁内面を巡る沈線、刻みを施す墳帶、及び充填縄文と墳之内2式の特徴を強く示す。10は縦横位の沈線による区画内部に縄文が充填される。13は斜位の沈線が施されており、72に類する文様構成と考えた。なお、IV群とした21・22も底径が小さく、薄手であることからII群に伴う可能性が高いと考えられる。

SX4（23～25） 固有の覆土を有しない遺構であるが、SI1と同様の観点で抽出、報告する。SI1と比較すると、出土量は少なく、破片もより小さいものが主体で図化できるものは限られた。23は、縦位の集合沈線が施されるII群1類である。24・25は縄文のみが残存する。

SX5（26～33） 挖り込みを有する遺構で、覆土からの出土である。I群とII群及びIV群が出土している。26・27はI群である。28～30・33はII群1類である。30は口縁部に縦位の短沈線が施され、その下部には刺突が施されている。31・32は縄文のみが残存する。

（2）包含層出土土器（図版5～7・20～22）

I群土器（34～40） 中期後葉の所産と考えられる土器群である。出土量は時期別で最も少なく、残存率も低い。いずれも深鉢片で、沈線後に縄文を磨り消すことで文様が描出されている。ここで用いられる縄文原体は0段及び1段の縄であるが、39は3段の縄を用いて複節斜縄文が施される。器壁は後続する土器群と比べ厚く、胎土への赤色粒の混入を特徴とする個体がある。小破片のみで型式決定の根拠には乏しいが、試掘調査で出土した118と同じ大木9式の範疇で理解される土器群と考える。

II群土器（41～87） 後期前葉の所産と考えられる土器群である。今回の調査で主体的に出土した一群である。地域差に由来する系統により2分類した。

1類（41～71） 県内を中心に分布する在地の南三十稻場式に比定されるものである。南三十稻場式は「これまでの研究〔駒形1973・1983、田中1985・1989a・b、1990、田中・渡邊1999など〕により、沈線の細密・集合化という変化の方向性で捉えられ」〔金子2002〕、古・新の2段階に区分されている。

今回出土したものは、胴部片でみられる縦位沈線の集合施文、扁平化した突起装飾。器壁の薄さ等から、新段階に位置付けられるものが多数を占め、明確に古段階と分離できるものは存在しない。文様は、集合化した沈線を主文様とし、縄文・円孔・刻み・凹線・刺突文等で構成される。縄文は、沈線施文後に充填されるものが主体となる。ここでは刺突文の有無で2細分した。

1a類 (41~62) 沈線を主文様として文様が描出されるものである。胴部に施される縦位集合沈線部が残存する破片が目立つ。44は4つの円孔が貫通する比較的大形の突起である。わずかに残存する太く深い凹線と合わせ、本遺跡中では異質であるが、突起以下の縦位沈線の細密さ、及び充填縄文を用いることから、他と同様、新段階に位置付けられる。47は円孔を有する突起を有し、口縁部は突起間を結ぶ凹線が施されると考えられる。口縁部は無文、頸部には6本の横位沈線が巡る。以下、胴部には6本を単位とした集合沈線が縦位に施され、内部には、縄文が施文される。54は、縦位集合沈線の両端の沈線が上部で連結することで△状を呈し、この内部に縄文が施文されている。55・58・59は口縁部に凹線が施されている。56は風化が著しいが、中央部に4本の縦位沈線があり、その両側に右に傾く斜位沈線が読み取れる。57は口縁端部が先細りの形状を呈し、内面は肥厚している。本遺跡では、一例のみの出土である。

1b類 (63~71) 沈線に加え、刺突文が施されるものである。沈線が残存するものについては、1a類と比べ、より細密な沈線を用いる傾向が看取できる。63で特筆すべきは胎土中に、径1mm以下の纖維状の混入物が認められる点である。混入量自体は少量であるが、一部は炭化して器壁に黒い斑点を残す。この胎土が認められるのは本例のみであり、混和材の一種として偶発的に混入したものであろう。文様は、風化が著しいが、円孔の下部から縦位の刺突列が確認でき、65と近似した文様構成と考えられる。64は、口縁部の凹線が連続刺突により描出され、頸部にも横位の刺突列が施される。65は、口縁部に3単位のリボン状の突起が施される。この突起間は凹線で結ばれ、その中央にもそれぞれ円孔を有する波頂部が配されることで、総体では6単位の波状口縁となる。口縁部は、沈線区画内の縦位の刺突列と溝文、及び沈線文で描出される。リボン状の突起下の文様は66に近似するが、波頂部下は縦位の沈線内刺突列の左右に溝文が配されるものとなり、両者で構成が異なる。縄文は沈線間に充填するように施されているが、風化により判然としない。頸部は横位の集合沈線間に刺突列を巡らし、以下、胴部も溝文と沈線、及び縄文による文様描出が行なわれる。器壁では、外面の頸部以下を除く外面と内面前においてススの付着が見られ、特に外面の口縁部下半、リボン状の突起や凹線の窪み内では大量のススが付着している。66は、基本的な文様構成は65と近似する。胎土は、65が黒褐色で砂が多く含むのに対し、66は緻密な胎土で、器壁も白色の強い色調となる。加えて、ススの付着が認められないなど、器形・文様以外の属性では相違点が大きい。69は外面の磨滅が著しく、半円状の沈線文、横位の刺突列もかろうじて残存する一方、内面は器面調整の痕跡まで観察され、頸部ではススの付着も見られる。

2類 (72~87) 在地色が強いとして1類で抽出したものを除いた一群を、便宜的に「非在地系の土器群」として一括した。1類とは併行関係にあり、広域的編年観によれば、堀之内2式併行期に収まるものが主体と考える。他地域であれば型式名を与えられるであろうものを含むが、出土状況が断片的であるため、ここでは事実記載に留めるものとする。72は縦位の沈線間に曲線及び、一筆で描く溝文で充填する文様構成になると考えられる。器形は、口縁に向かって直線的に開くものと思われる。73~75は同一個体片である。口縁内面に沈線が一条巡り、口唇部には刻みが施される。外面には沈線が横位に直線状と8の字状に施される。胎土は、径が2mm前後と大きめの砂粒が混入している。76・77は口縁部片で薄手

の造りである。縄文の有無は風化が著しく不明である。76は横位沈線と斜位沈線で文様が描出される。79～82・84・85は沈線による区画施文後に縄文が磨り消されることにより文様が描出されている。80はコップ形の器形を呈し、横位の平行沈線文により形成された文様帶内に曲線による区画文が收められる。86・87は沈線部のみの残存であるが、施文方法、器壁の質感から本群に含まれる可能性が高いと判断した。

Ⅲ群土器（88～97） 後期中葉の所産と考えられる土器群である。出土量はⅠ群に次いで少なく、残存率も低い。出土状況が断片的であるため、ここでは事実記載に留めるものとする。88は平行沈線間に、区切りの短沈線が縦位に施文され、その後に縄文が充填されている。89・90は沈線区画内に縄文を異方向に充填施文することで羽状縄文を描出する。89は口縁端部が肥厚することから、加曾利B3式に相当する可能性が高い。90・91は無文の口縁部片であるが、胎土、器壁の質感から本群に含めた。92は外反する口縁で、内面に浅い沈線が一条巡る。93は口縁内面に一条の沈線が巡り、頸部は強く屈曲する。器種は注口と考えられる。94は口縁部が大きく内湾する器形で、無文地の器壁に、沈線で文様が描出される。96は略尖形の鉢で、縄文地の上に、横位沈線が平行に4本施される。胎土は砂を多く含んでおり、全体に軟質である。内面では、口縁端部より3cmほどの部分の風化が著しい。この部分には、断定できなかつたため図化は見送ったが、わずかに沈線と考えられるものの痕跡が読み取れる。これについては、写真で示した。95も横位沈線が3本となる以外は、器形、胎土等が96と非常に似通っている。97は横位の平行沈線と縱方向の沈線による区画施文後に縄文が充填されている。小破片であるが、傾き、内面調整の緻密さから深鉢以外の器種を想定している。

Ⅳ群土器（98～116） 時期により分類しえなかった土器群である。無文土器、縄文のみが施されると考えられる土器を主体とし、残存率が低く文様構成が把握出来ないものも一括した。これらはⅠ・Ⅱ・Ⅲ群のいずれかに伴うものと考えられるが、各群の出土割り合から、Ⅱ群に伴うものが多数を占めると考えられる。98～104が口縁部片、106・107が胴部片及び105・108～116が底部の残存する破片である。用いられる縄文は無節、単節の縄文に加え、99・106では撚糸文が用いられる。107・111では沈線文が集合的に施され、107では刺突文も施される。108は高台付の鉢で、器面全体が無文である。口縁部及び台部分の端部では、磨り減りが著しい。磨り減った面が他の割れ口より平滑であることから、口縁部の再生を意図した調整が行なわれた可能性も指摘される。110は底面より胴下半の径が小さくなる器形である。

（3）試掘調査出土土器（図版7・22）

平成17年度に行なわれた試掘調査では、4468.38gの土器が出土した。そのうち3297.73gがSI1に隣接して設定された10トレンチから出土している。117は6トレンチからの出土である。条線が施されており、口唇部は平坦に作出される。118～120・122～125は10トレンチからの出土である。118は、4単位の波状口縁と屈曲する頸部を有する器形である。文様は沈線施文後に縄文を磨り消すことで描出されており、大木9式に比定される。119・120・122はⅡ群1類である。119は口縁部が肥厚しており、ここに円孔と沈線による区画文による文様帶が施される。以下の胴部には縦位の沈線が施されている。肥厚口縁に文様帶を有する土器は本遺跡では一例のみであり、沈線が比較的太めに施される点と合わせ、ほかのⅡ群1類と区別される。120は頸部に施された横位の沈線間に円形の刺突文が配されている。123・124はⅡ群2類である。共に横位の平行沈線内に文様帶を描出す。125は風化が著しいが、集

合沈線による連続山形文が施されているのが確認できる。器種は明らかにし得ないが、深鉢以外の壺、あるいは注口といった器種を想定している。121は14トレンチからの出土である。頸部に連続刻目文が施され、Ⅲ群と考えられる。

3 土 製 品 (図版7・22)

SX4とした範囲内(3B19グリッド)のⅢ層中から土器片円盤「八木2002」が1点出土した(126)。形態は円形を呈し、長軸31mm、短軸28mm、厚さ7mm、重さ6.13gとなる。土器の胴部破片を素材としており、縄文部のみが残存する。周縁には研磨痕が認められ、これは全周しない。元屋敷遺跡II「八木2002」でのB類、北野遺跡(上層)[高橋ほか2005]での(土器片円盤)C類に相当する。時期は明確にし得ないが、転用前の土器の器壁の厚さ及び質感から、後期に属する可能性が高いと考える。

4 石 器 (図版8~13・22~26)

出土した石器は第3表のとおり、合計で160点である。石器のように縄文時代の遺跡の調査において普遍的に出土する器種を欠くように、剥片石器は質・量共に乏しい。しかし、石核や剥片といった剥片石器製作に関わる残滓や石器の未成品が出土すること、加えて礫石器は一定量の出土と組成率を示すことを考え合わせると、剥片石器の乏しさは調査範囲の限定性によるものと考えるのが妥当であろう。

出土はSI1とした範囲、なかでも土器埋設石組炉を中心とした周囲、北から東側にかけて集中域が認められる(第11図)。集中域はSX4でも見出せ、これらの遺構から離れると出土は希薄となる。土器が調査



第11図 石器出土分布図

器種名 出土区分	石 匙	不 定 形 石 器	両 極 剥 離 痕 の あ る 石 器	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	磨 製 石 斧 未 製 品	敲 磨 石 斧	多 面 体 敲 石	砾 石 ※1	石 皿	小 計	石 皿 未 成 品	石 皿 核	剥 片 類	合 計
	遺構出土	0	10	0	1	2	2	11	7	8	4	45	2	3	29
遺構外出土	3	14	1	1	4	2	8	1	4	2	40	0	3	38	81
合 計	3	24	1	2	6	4	19	8	12	6	85	2	6	67	160
百分率(%)	3.5	28.2	1.2	2.4	7.1	4.7	22.4	9.4	14.1	7.1	100※2	—	—	—	—

※1 接合後の個体数である。

※2 各項目の百分率は、小数点第2位を四捨五入して表記しているため、この合計は100とならない。

第3表 器種別石器出土表

区内を横断するように分布するのとは対照的であり、明らかにSI1を中心とした分布の状況を示している。

掲載にあたっては、上器と異なり、遺構の内外を問わず、器種ごとに実行した。遺構に関わる出土状況については遺構各説でも一部記述した。以下、器種ごとの記載に関し、分類の定義及び細分類の視点、観察表の項目など基本的な部分については、北野遺跡（上層）〔高橋ほか2005〕に準じている。

A 石 匙 (127~129)

抉りのあるつまみと刃部を有する剥片石器である。出土数は3点である。1・3はいわゆる縦形石匙に分類できる。2はその形態から、刃部が折損した可能性がある。これにより生じた底縁には微細剥離痕が認められることから、折損後も使用が継続されたと考えられる。また、つまみ部分には幅11mmのアスファルトによって固定されたと考えられる繊維質の痕跡を確認できる。これは、つまみ部に巻きつけるような方向で確認でき、肉眼で確認できる繊維質の筋の間隔は約3mmである。石材は、いずれも頁岩を用いている。

B 不定形石器 (130~135)

剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕が認められる不定形な石器である。出土数は24点である。これを、刃部形状により細分した。

A類 (130・131) 連続または連続状の剥離による鋸歯状の刃部をもつもの（北野遺跡（上層）のB類に相当する）。2点出土している。

B類 (132、133) 両面に連続または連続状の剥離のあるもの（同、C類に相当する）。2点出土している。

C類 (134) 不連続な剥離の刃部をもつもの（同、F類に相当する）。4点出土している。

D類 (135) 明らかに刃部の二次調整が認められないものの、使用の結果と思われる刃こぼれ状の微細剥離・摩耗・光沢などの使用痕跡が認められるもの（同、G類に相当する）。16点出土している。

総数24点のうち、半数以上をD類が占めている。石材は、流紋岩8点、頁岩7点、緑色凝灰岩6点、凝灰岩3点が用いられている。4Bグリッドから総数の60%以上を占める16点が出土している。

C 両極剥離痕のある石器 (136)

両極剥離法によると推定される両極剥離痕のある石器である。1点のみの出土である。礫素材で2個1対の刃部を持つ。これは、下端では両面で、いわゆる階段状剥離として観察できる。石材は、斑レイ岩

である。

D 打製石斧 (137・138)

礫の側縁に二次調整を加え、斧状に仕上げた石器である。しかし、製作工程、形態等に後述の磨製石斧未成品との共通点が多く、明確な区別は困難であった。そのため、ここでは厚さに着目し、磨製石斧の成品の平均厚である2.5cmを下回るものと磨製石斧未成品から便宜的に分離し、本項を設けた。出土数は2点である。137は短冊形〔高橋1990〕で、側縁では敲打によるツブレが観察できる。一方、刃部では使用痕が認められることから、これを剥離調整段階の磨製石斧未成品と捉えることも可能であろう。また石材が斑レイ岩である点も、完成品の139、未完成品とした145・146との共通性を伺わせる。138は短冊形で、刃部は少し偏った弧状に作出されている。石材は頁岩である。2点のみの出土であるが、3B19と3B20という隣接したグリッドから出土している。

E 磨製石斧 (139～144)

剥離・敲打を基本に成形され、研磨で仕上げられた一端に刃部を有する斧形の磨製石器である。出土数は6点である。基部から刃部までが残存するものは1点のみで、ほかは刃部を折損により欠いている。139は完形品である。石材は斑レイ岩を用いており、使用による敲打で、刃部は丸みを帯びるようにツブレている。ツブレは、141でも確認することができる。こちらは、折損面の全面で認められることから、折損後に敲石として転用されて形成された敲打痕と考えられる。140は基部側の端部より2cm下の中央軸線上に深さ約3mmの円孔が両面に穿たれている。石材は安山岩である。142～144の石材は、いずれも蛇紋岩である。143は側面から大形の剥離が認められ、折損後の再加工を意図したものと考えられる。

出土分布は、本発掘調査範囲外に設定された4トレンチから出土した142を除き、SI1とした範囲及び近接した小グリッドから3点（隣接する10トレンチ出土の1点を含むと4点）が出土している。穿孔を有する140のみ、ほかから若干離れた位置（5B6グリッド）からの出土であった。

F 磨製石斧未完成品 (145～148)

磨製石斧の製作を途中で断念したと考えられるものである。絶対的な出土量が少なく、加えて製作途中という性質上、剥離や敲打痕を有する他器種との明確な線引きは難しい。しかし、後述する多面体敲石、砥石といった磨製石斧生産に付随する工具の出土を鑑み、磨製石斧製作過程の可能性を指摘できるものはここで積極的に抽出した。145・146は剥離調整段階の未完成品と考えられ、扁平な礫の長軸の一端に剥離痕が認められる。これは、成品の機能部である刃部を先行して成形した結果と考えられ、とすれば、この2点は素材とした礫の端部を弧状に整える作業から開始しているともいえる。石材は、共に斑レイ岩を用いている。また、この2点は、完成品の出土地点とは離れた調査区中央部からの出土であった。147は石材にホルンフェルスを用い、その形態からは打製石斧の未完成品の可能性も指摘される。148は剥離調整段階に後続する敲打調整段階の未完成品と考えられる。側面では平坦面の作出を意図した敲打による調整が行なわれるが、これは刃部には及ばない。一方で、表裏面には剥離調整が及ばない原石面が広く残る。剥離調整は刃部を中心に最小限しか行なっていない可能性が指摘できる。石材は、硬砂岩である。

G 敲磨石類 (149~165)

片手ないしは両手で把持できる大きさの礫の表面に、使用の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められる石器である。凹痕は敲打痕の集中と理解し、敲打痕に含めた。出土数は19点である。これを使用痕の種類、使用部位等で細分した。

A類 (149~158) 磨面のいずれかに磨痕が認められるもの。磨痕に加えて敲打痕も認められるものもある。從来、いわゆる「磨石」と呼称されていたものを含む。

1類 (149~154) 磨面のみが認められるもの。7点出土している。礫の形状は、全面に磨痕が認められる球形の151を除き、いずれも円形～楕円形を呈する。153は破損により生じた角をつぶすように新しい磨面が形成されており、破損後も使用が継続された様子がうかがえる。

2類 (155~158) 磨面に加え、敲打痕が認められるもの。5点出土している。敲打痕が表裏面でのみ認められるもの (155・156) と端部・側面で認められるもの (157・158) がある。礫の形状は、円形～楕円形と長楕円形 (156) の2種がある。

B類 (159~165) 磨面のいずれにも磨痕が認められず、いずれかに敲打痕が認められるもの。

1類 (159~161) 表裏面でのみ敲打痕が認められるもの。3点出土している。從来、いわゆる「四石」と呼称されていたものである。礫の形状は、完形の2点では長楕円形を呈している。

2類 (162~165) 端部・側面で敲打痕が認められるもの。4点出土している。さらに敲打痕の部位により、端部・側面でのみ敲打痕が認められるもの (162) と端部に加え、表裏面のいずれかで敲打痕が認められるもの (163~165) に2細分できる。前者は、長楕円形を呈する礫の両端部、両側縁にそれぞれ対になるように敲打痕が認められることから、楔のように使用された可能性がある。後者は、表裏面に敲打痕が認められるが、剥離を伴う端部の敲打痕も発達しており、形態、重量は次項の多面体敲石との共通性を伺わせる。また、165は細長く鋭い線状の圧痕が明瞭であり、両極技法による剥離作業時に台石としても用いられた可能性が考えられる。

石材は、安山岩8点、輝緑岩3点、凝灰岩3点、花崗岩1点、斑レイ岩1点、ホルンフェルス1点である。出土はSI1とした範囲からの出土が8点と多く、SX4とした範囲からも3点が出土している。包含層出土の8点の内、4・5Bグリッドから6点が出土している。

H 多面体敲石 (166~173)

敲磨石類の内、多面において敲打痕が認められるものをここで抽出した。磨製石斧との関連が指摘【阿部1984、1987】され、その製作に使用された工具と考えられるものである。出土数は8点である。いずれも、礫の端部、側縁に敲打によって平坦面と稜が形成されつつあり、この使用面の集合により多面体を呈している。この敲打は全面には及ばず、一部に磨面を残す。また、敲打に伴う剥離痕も顕著で、破損品 (170~172) も使用に伴う結果を示すものと考えられる。礫の形状は、やや扁平の円形のものを用いているが、173のように角柱状の礫を用いるものもある。

石材は、輝緑岩、斑レイ岩、緑色凝灰岩、硬砂岩を用い、いずれも緑色系に分類できるものである。これは、阿賀野川以北における磨製石斧の石材選択に、「見た目」の「近似」性が働いていたという指摘【高橋1999】に通じるものがあり、その製作工具においても、石材の持つ性質と共に、視覚的に緑色であったことが重要であったとも考えられる。出土は、SI1とした範囲から6点 (隣接する10トレンチ出土の

1点を含むと7点)と集中域を見出せる。SX4からも1点が出土している。

I 砥 石 (174~181)

主に砂岩や凝灰岩を用い、扁平な礫の表面に使用の結果残された磨面（砥面）が認められる石器である。絶対的な出土量が少なく、加えて機能面からも石皿との明確な線引きは難しい。そのため、ここでは便宜的に石皿とした使用面の周囲に縁を有するもの以外を砥石として報告する。破片を含めた出土数は15点であった。このうち接合するものが5点あり（177・178）、接合品を1個体として算出する最大個体数は12点となる。

A類（174・175） 溝状砥面が形成されるもの。2点出土しており、共に砂岩が用いられている。溝の幅は概ね5mm前後で、断面形状はU字状となる。

B類（176~181） 面状砥面が形成されるもので、砥面に敲打痕が認められるもの（176）もある。6個体出土している。砥面が比較的広範で平坦なもの（176~179）とわずかに凹むもの（180・181）がある。分類不可 破片資料で分類できないもので、いずれもB類の破片資料と推定される。図示した8個体を除く4点であり、重量101.74~375.20g（平均190.74g）のいずれも小破片である。SI1とした範囲から3点（4B11グリッドから2点、3B15グリッドから1点）、包含層から1点（4B14グリッド）の出土である。

石材は、砂岩7点、凝灰岩3点、安山岩2点が用いられている。さらに感覚的な分類であるが、これを粒子の粗いもの（174~179）と比較的細かいもの（180・181）とに細分することができ、用途や工程の違いによる使い分けが考えられる。また、前者が破片状態での出土である点も、剥離による底面の再生と関わる可能性が指摘され、後者の2点が完形である点とも対照的である。SI1とした範囲から7点出土しており、SX4からも1点出土している。一方、これらから離れた2C12グリッドにおいて単独出土するもの（176）もある。

J 石 皿 (182~186)

扁平な大形の礫の表面または表裏面に、使用の結果と推定される磨面や敲打痕が認められるもの。ここでは使用の進展により使用面の周囲に縁が形成される、いわゆる加工石皿を抽出した。出土数は6点で、いずれも欠損している。184は裏面の磨面、側面の剥離痕は、形状を整えた調整痕と考えられる。また、使用面とされる中央部が縁より高く、敲打痕が明瞭であることから、使用開始前あるいは使用開始後の比較的早い段階で欠損したものと考えられる。

石材は、安山岩5点、礫岩1点となり、砥石A類としたものと比較すると、粒子の細かい石材を用いているといえる。さらに、より粒子の細かい凝灰岩を用いるもの（186）もある。出土は、SI1、SX4とした範囲内から4点が出土する一方で、これらから離れた3C13グリッドから単独出土するもの（186）もある。

K 石 鐵 未 成 品 (187, 188)

成品である石鐵の出土はみられなかったが、小形の剥片に押圧剥離の二次調整を施したものと石鐵未成品として抽出した。素材、大きさ、二次調整などから、石鐵の製作を意図したが、何らかの理由により断念（失敗）したと考えられるものである。出土数は2点である。

出土はSI1とした範囲からであり、互いが約2m離れた状態で出土した。

L 石 核 (189, 190)

剥片剥離作業中に何らかの理由により剥離作業を断念した残核、剥片剥離作業終了後の残核である。出土数は6点（重量39.52～94.47g、平均73.32g）である。出土数が少ないこともあり、北野遺跡（上層）で提示された分類を参考に細分した。

A類 (189) 同一打面から別々の作業面に同方向の剥離作業が行われるもの（北野遺跡（上層）のC類に相当する）。3点出土している。189は同一打面から表裏2面について同方向の剥離が行なわれている。石材は鉄石英である。

B類 (190) 別々の打面と別々の作業面で剥離作業が行なわれるもの（同、F類に相当する）。3点出土している。190は3つの打面から、それぞれ異なる方向の剥離が行なわれている。石材は流紋岩である。

石材は、流紋岩3点、頁岩1点、鉄石英1点、緑色凝灰岩1点が用いられており、硬質で緻密な石材を選択しているといえる。出土は、SI1とした範囲内である4B12グリッドから図示した2点を含む3点が出土している。ほかは、10トレンチ、3B23・4Cグリッドから各1点の出土である。

M 剥 片 類

二次加工及び、使用痕の観察できない剥片をここで一括した。67点が出土している（第4図）。遺構からはSI1とした範囲から25点、SX4とした範囲から3点、P9の覆土から1点出土している。遺構外からは38点（試掘調査にて出土した10点を含む）が出土している。出土分布では隣接する4B14・19グリッドから計14点と集中域を見出すことができる。石材は、頁岩、緑色凝灰岩、鉄石英が用いられており、剥片石器、石核との共通性がうかがわれる。また、1点のみであるがメノウを用いているものがある。

出土位置	グリッド	点数	出土位置	グリッド	点数
SI1	4B6	1	遺構外	2B19	1
	4B7	4		(3C)	1
	4B11	1		3C15	1
	4B12	16		(4B)	1
	4B17	3		4B7	3
SX4	3B19	2		4B8	1
	3B24	1		4B9	1
P9	4B6	1		4B10	1
試掘	6トレンチ	1		4B14	7
	10トレンチ	9		4B18	2
				4B19	7
				(4C)	2

第4表 剥片類出土位置と点数

N 自 然 碓 (191～194)

遺跡内に持ち込まれた加工痕の見出せない碓である。今回の調査区内から回収できた自然碓の合計は254kgである。これらは建物の構築材として、あるいは石器の原石としてなど様々な用途を意図して持ち込まれたものと考えられる。ここでは、その中から特徴的なものを抽出、図示した。191は長さ62.2cm、重量25.5kgの棒状の碓で、今回出土した中で最大重量の碓である。192・193は碓石器の原石と考えられる。石材は共に斑レイ岩で、緑色系を呈している。192は円形の碓で、形態、重量は多面体敲石に適するか。193は形状が扁平であり、磨製石斧の原石の可能性も指摘できる。194は扁平な円形を呈する碓である。SX4にて、石皿2点と近接した状態で出土した。

5 石 製 品 (図版 13・26)

4B14 グリッドのⅢ層中から、楕形石製品が1点出土している(195)。口縁部径で約1/4を欠く欠損品である。外面は、平坦面の集合で形成されており、研磨により作出されたと考えられる。内面は、凹部分を割り貫くように円状の磨痕が微かに認められる。法量は、器の計測方法に則せば、口径5.2cm、底径3.8cm、高さ3.3cmとなる。石材には軽石が用いられており、重量は16.98gである。

第VI章 花粉分析

株式会社 古環境研究所

1 はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2 試 料

分析試料は、遺跡形成以前のIV層（河川堆積物：暗褐色～黒褐色シルト）、縄文時代後期前葉頃の遺物包含層であるIII層（褐色～暗褐色粘質シルト）、土石流由来のII層（暗褐色～褐色粘質シルト）の各層準から採取された計3点である。

3 方 法

花粉の分離抽出は、[中村 1973] の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトトリス処理（無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉〔1973〕および中村〔1980〕をアトラスとして、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

4 結 果

A 分 類 群

出現した分類群は、樹木花粉5、草本花粉2、シダ植物胞子1形態の計8である。分析結果を第5表に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。花粉数が100個以上計数された場合は花粉総数を基数

とする花粉ダイアグラムを示しているが、今回の試料はいずれもこれを下回っている。

〔樹木花粉〕

モミ属、ハンノキ属、クマシデ属—アサダ、エノキ属—ムクノキ、ハイノキ属

〔草本花粉〕

イネ科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子

B 花粉群集の特徴

IV層では、花粉密度は低いが、ヨモギ属が比較的優勢であり、樹木花粉のハンノキ属、クマシデ属—アサダ、ハイノキ属、草本花粉のイネ科が伴われる。また、シダ植物单条溝胞子も比較的多い。III層では、シダ植物单条溝胞子がわずかに検出され、花粉は検出されなかった。II層では、樹木花粉のモミ属、エノキ属—ムクノキ、草本花粉のイネ科、およびシダ植物单条溝胞子が検出されたが、いずれも微量である。

5 考 察

遺跡形成以前の河川堆積物のIV層では、花粉密度が低いことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、ヨモギ属やシダ植物などが生育する比較的乾燥した環境が示唆され、遺跡周辺にはハンノキ属などが生育する湿地的なところも分布していたと考えられる。

花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質

学名	分類群	基本層序		
		II層	III層	IV層
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Abies</i>	モミ属	1		
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		6	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属—アサダ			2
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属—ムクノキ	2		
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属		1	
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	1	2	
<i>Arenaria</i>	ヨモギ属		20	
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	单条溝胞子	2	9	23
Arboreal pollen	樹木花粉	3	0	9
Arboreal + Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	1	0	22
Total pollen	花粉總数	4	0	31
Pollen frequencies of 1cm^3	試料 1cm^3 中の花粉密度	2.8	0.0	1.5
		$\times 10$		$\times 10^2$
Unknown pollen	未同定花粉	1	0	4
Fern spore	シダ植物胞子	2	9	23
Helminth eggs	寄生虫卵	(—)	(—)	(—)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(—)	(—)	(—)
Charcoal fragments	微細炭化物	(—)	(—)	(—)

第5表 花粉分析結果

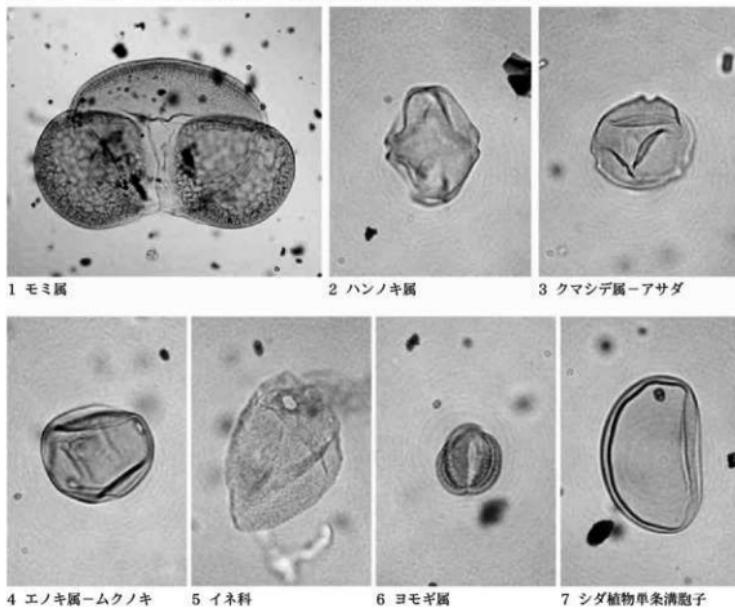
遺体が分解されたこと、土層の堆積速度が速かったこと、および水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが想定される。

縄文時代後期前葉墳の遺物包含層であるⅢ層では、花粉が検出されなかった。また、その上位のⅡ層でも花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、前述のようなことが考えられるが、特にⅡ層については土石流由来とされていることから、ここでは乾燥的な環境や堆積速度の要因が大きかった可能性が考えられる。

今回の分析では、各層における植生や堆積環境の変化、黒ボク土の形成がみられない要因の究明などが検討課題となっていたが、花粉の保存性の問題などから十分な情報を得ることはできなかった。今後、乾燥的な環境下の堆積物にも適用される植物珪酸体分析を併用することで、これらの課題に関するより詳細な知見が得られるものと期待される。

参考文献

- 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻 古代資料研究の方法』 角川書店
p.248-262
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p
- 中村 純 1973 「花粉分析」 古今書院 p.82-110
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標識」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集 91p



1 — 10 μm, 2-7 — 10 μm

第12図 花粉・孢子の顕微鏡写真

第VII章 まとめ

本調査は小規模であったものの、土石流によって埋没した縄文時代の集落の一端を調査することができた。得られた成果は、いずれも断片的なものであるが、ここで一度まとめておきたい。

1 遺跡の立地と埋没過程

本遺跡は、阿賀野川の左岸の河岸段丘上に位置する。この段丘は、二宮氏による段丘区分での「津川面」に相当すると考えられる〔二宮1973〕が、同段丘において普遍的に確認される鹿瀬軽石質砂層は確認できなかった。

遺跡の広がりは、土器の分布状況から、調査区の北側に集落の中心部が展開する可能性が高い。また、III群とした後期前葉の土器は、調査区の南西に設定した試掘調査14トレンチからも出土しており、後期前葉以前と異なる広範な分布域を示す可能性がある。

遺跡の性格については、言及する材料にも乏しい。得られた成果からは「調査区は、3時期の土器が出土する継続性を有する集落の一部であった」としておくのが妥当であろうか。さらには、遺跡の立地及び集落構造からの検討が必要である。

この集落を埋没させたのは、調査区の北を西流する阿賀野川支流を流下した土石流堆積物（II層）である。その活動は同質の土が連続的に層状を成し、間層を介在させないことから、開始から終了までが短期間であったと考えられる。これは、自然科学分析に供した土壤サンプル中において、土石流堆積物としたII層中の花粉混入量が少ない状況からも示唆されている。同時に、包含層であるIII層において花粉の混入がみられない点も留意される。これにより、III層にまで土石流の影響が及んでいたとも推測できる。

さらに層厚が1mを超える土石流堆積物は、原地形の推定さえも困難にしている。これにより、土器が表面採集可能な地表面まで容易に移動できないことは想像に難くない。遺跡の範囲を広く捉え、支流北側に広がる扇状地の下深くにも集落の一部が埋没している可能性を考慮しなければならない。

2 遺構と遺物

検出した遺構は住居1軒、集石1基、性格不明遺構5基である。このうち住居は、ほかの遺構に比べてわずかではあるが高い位置に構築され、人為的な遺地の意図がうかがえる。この住居は、土器埋設石組炉と、これを中心に敷かれる礎・柱穴と考えられるビットにより構成される。構造は、柱穴の規模が小規模であること、傾斜地に位置し平坦な床面を作出しないことから簡易的とも指摘できるが、1軒のみの調査であるため推測の域を出ない。時期は断定し得ないが、周囲から出土する土器の様相から後期前葉の可能性が高いとした。ほかは、SX4とした集石遺構周辺に遺物の集中がみられ、SX2からは焼土の廃棄痕跡がうかがえる。これ以外は、いずれも不定形で、人為的に構築されたとする決め手を欠くものである。

遺物のうち石器については、住居を中心とした分布の状況を確認できた。これについても土石流の影響がどれだけ及んでいるかが問題となる。調査では、その影響を明らかにすることはできなかつたが、住居

周辺の出土状況は、「自然作用で流動的に移動した遺物が偶然に集積した」状況を想起させるものではなかった。遺物の出土状況は、人為的な様相を残している可能性が高いと考える。

土器は、中期後葉、後期前葉、後期中葉の3時期のものが出土した。このうち主体となって出土したのは、II群とした後期前葉のものである。なかでも、いわゆる在地型式とされる南三十稻場式が中心となり、いずれも新段階に比定されるものである。これらに加えて壺之内2式など、系統を異にする土器も散見される。I群とした中期後葉、III群とした後期中葉の土器は出土量が少ない。調査範囲内においては客体的な存在であり、遺跡内の主要な出土分布域を外れているものと考えられる。

石器は、剥片石器については出土量が乏しいが、礫石器については一定の出土量と器種構成を示す。磨製石斧は、広域流通品である蛇紋岩製のものと、未成品との間に共通項を求める本遺跡で生産されたと考えられるものの2つに大別される。加えて、その製作に関わるとされる多面体敲石、砥石といった工具の出土も目立つ。磨製石斧生産は、阿賀野川に面した立地という豊富な石材環境を背景にしておこなわれたと考えられる。しかし、その生産は小規模で、蛇紋岩製磨製石斧の代替品の確保を目的とした補助的な側面もうかがえる。いずれにしても、自家消費的な範囲を超えるものではないと推定されるものである。

要 約

1 萩原遺跡は、新潟県東蒲原郡阿賀町谷花字萩原甲 555 ほかに所在する。遺跡は阿賀野川左岸の段丘上に立地し、標高 53m を測る。

2 調査は一般国道 49 号揚川改良事業の建設に伴い、平成 19 年 7 月 18 日から 10 月 22 日まで実施した。調査面積は 1371m² である。

3 阿賀野川に近接する河岸段丘上に立地しているが、これまで認識されているような状態では、鹿瀬輕石質砂層は確認されなかった。

4 遺跡は縄文時代後期中葉以降に発生した土石流により、ごく短期間のうちに埋没したと考えられる。そのため、後世の搅乱を免れた状態で遺存していた。この土石流の堆積開始から終了までは比較的短期間であったと考えられる。これは、自然科学分析に供した土壤サンプル中において、土石流堆積物としたⅡ層中への花粉混入量が少ない状況からも示唆される。

5 調査の結果、縄文時代の住居 1 軒、集石 1 基、性格不明遺構 5 基の遺構を検出した。遺物は縄文土器、土製品、石器、石製品が出土した。

6 遺物の出土分布状況から、調査区は集落の縁辺部にあたると考えられ、集落の中心は調査範囲の北側に展開していると考えられる。

7 住居は土器埋設石組炉を中心に、礫が敷かれている。これに柱穴と考えられるピットを加えて構成される。炉の形態、及び周辺から出土する土器の様相から、縄文時代後期前葉の可能性が高い。

8 土器は縄文時代中期後葉、後期前葉、後期中葉の 3 時期のものが出土した。

9 縄文時代中期後葉の土器は、大木 9 式が出土した。試掘調査時に残存率の高い個体が出土したが、個体数では 3 時期の内で最も少ないと考えられる。

10 縄文時代後期前葉の土器は、今回の調査で主体的に出土した。在地の南三十稻場式の新段階のものを主体とし、系統を異にするものも少量出土している。

11 縄文時代後期中葉の土器は、器種構成に多様性を見出せるものの、出土量は中期後葉の土器に次いで少ない。

12 石器は 160 点が出土した。住居を中心とした出土分布状況を示す。

13 刃片石器は石匙、不定形石器、石鐵未成品と石核、刃片類が出土しているが比較的少ない。礫石器は定量出土している。また、輕石製の椀形石製品が 1 点出土している。

14 近隣から素材の調達を行い、磨製石斧の製作を行っている。関連して原石と考えられる礫、剝離・敲打段階の未成品、多面体敲石、砥石が出土している。その生産は小規模なもので、集落内の自家消費的性格が強いと思われる。

引用・参考文献

- 阿部朝衛 1984 「多面体を呈する敲石について」『豊栄市史研究』第2号 豊栄市
- 阿部朝衛 1987 「考察編Ⅰ 第6章 磨製石斧生産の様相」『史跡 寺地遺跡』青海町・青海町教育委員会
- 阿部泰之 2006a 「揚城遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 阿部泰之 2006b 「大屋敷遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 阿部泰之 2006c 「下西ノ沢遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 阿部泰之 2006d 「人ヶ谷岩陰」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 石川智紀 2006a 「長者屋敷遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 石川智紀 2006b 「角神D遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 植葉 明・木村 広・二宮俊策・橋村裕一 1976 「津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について」『新潟県立教育センター研究報告』第9号 新潟県立教育センター
- 伊与部倫夫 2006 「堂田遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 伊与部倫夫・金子優子 2006 「蟹沢遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 歌代 効・高野武男 1977 「I 地形」『新潟県地質図説明書 新潟県』
- 遠藤 佐 2006a 「大谷原遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 遠藤 佐 2006b 「室谷平遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 遠藤 佐 2006c 「キンカ杉遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 遠藤 佐 2006d 「栗瀬遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 遠藤 佐 2006e 「孤塚遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 遠藤 佐 2006f 「下小島遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 遠藤 佐 2006g 「大尾遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 小野 昭・鈴木俊成編 1994 「理日本海地域の土器出現期の様相」雄山閣
- 金子優子 2002 「第VII章 まとめ 1土器・土製品 A 变遷と地域性(1) 後期前葉の土器様相」『朝日村文化財報告書 第22集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 元屋敷遺跡上段II (上段)』新潟県朝日村教育委員会
- 鶴井幸彦 1995 「II.新潟県北部・佐渡の地形と地質 6.津川地域」『地学のガイド(下)』コロナ社
- 桐原雅史^{ex-*} 2008 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第186集 大坂上道遺跡II・猪額遺跡II」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 國島 晴 2006a 「古志王遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 國島 晴 2006b 「原遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 駒形敏朗 1973 「IV 3 繩文時代後期前葉の土器について」『ツベタ遺跡発掘調査報告書』安田町教育委員会
- 駒形敏朗 1983 「VI 2 繩文土器について」『多賀屋敷遺跡発掘調査報告書』越路町教育委員会
- 齐藤 崑 2006 「揚川改良(三川村地区・猪額遺跡隣接地・西地区)試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成17年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦ほか 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第64集 上ノ平遺跡A地点」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦ほか 1996 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第73集 上ノ平遺跡C地点」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦ほか 2004 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第132集 吉ヶ沢遺跡B地点」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山武考古学研究所 1984 「原遺跡発掘調査報告書」津川町教育委員会
- 鈴木郁夫 1986 「I 地形分類図 I 地形概説」『新潟県下越地域 土地分類基本調査 津川』新潟県農地部農村総合整備課

- 高橋保雄 1990 「第IV章 石器B出土石器の分類と観察 7) 打製石斧」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第55集 清水上遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋保雄 1999 「阿賀野川以北の磨製石斧生産の様相」『新潟考古学談話会会報』第20号 新潟考古学談話会
- 高橋保雄ほか 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第141集 北野遺跡II（上層）』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第160集 上野東遺跡・現明獄遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄・荒谷伸郎 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第119集 北野遺跡I（下層）』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2007 「縄文時代中期後葉～後期初頭の炉の変遷－新潟県阿賀町 北野遺跡の炉の検討－」『研究紀要』第5号 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2002 「第V章 遺物 5石器・石製品C分類と分析（10）磨製石斧」『朝日村文化財報告書 第22集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 元星敷遺跡上段II（上段）』新潟県朝日村教育委員会
- 滝沢規朗ほか 1995 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第68集 大坂上道遺跡・猿頭遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 只見川第四紀研究グループ 1966 「福島県野沢盆地の浮石砂砾の基底部より算出した木材の14C年代－日本の第四紀層の14C年代 XXVI－」『地球科学』第82号
- 田中耕作 1985 「所謂『三十稻場式土器』の成立について」『信濃』第37巻第4号 信濃史学会
- 田中耕作 1989a 「北平B遺跡」『新発田市埋蔵文化財調査報告書第7 北平B遺跡・岡塚遺跡範囲確認調査報告書』新発田市教育委員会
- 田中耕作 1989b 「三十稻場式土器様式」『縄文土器大綱』4 小学館
- 田中耕作 1990 「三十稻場式土器研究の現状と課題」『新潟考古学談話会』第5号 新潟考古学談話会
- 田中耕作・渡邊裕之 1999 「第2章 縄文時代 第2節 縄文土器 第5項 後期」『新潟県の考古学』高志出版
- 谷口康浩 1996 『室谷洞窟出土土器の再検討』『かみたに 新潟県上川村神谷地域学術総合調査報告書 人文編』上川村
- 中島栄一 2006a 「自然環境」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 中島栄一 2006b 「遺跡の分布状況」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 中島栄一 2006c 「星敷島遺跡」『東蒲原郡史 資料編1 原始』東蒲原郡史編さん委員会
- 中村孝三郎 1960 『小瀬ヶ沢洞窟』長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎・小片 保 1964 『室谷洞窟』長岡市立科学博物館
- 二宮俊策 1973 「新潟県東蒲原地方における阿賀野川の河岸段丘について」『新潟県立教育センター研究集録』第6集 理科研究編（2）新潟県立教育センター
- 八木勝枝 2002 「第V章 遺物 4 土製品 D 土器片円板」『朝日村文化財報告書 第22集 奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 元星敷遺跡上段II（上段）』新潟県朝日村教育委員会

観察表

土器觀察表(1)

No.	通称名・出土地点	層位	分類	器種(現存部・残存部)	文様・施文等	調文部体・施文方向	色調(内・外)	混和材等	備考(2段階(内)・複数段(外))
1	S31 (全体上位) 中土	古都	深鉢	深鉢～底部	縞文	L.R.↓	に少し黄褐色 黒褐色	砂多量、なごみで4 白色粒目立つ	(直径7.0cm) 底面削除
2	S31 (4B12)	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	円錐	黒褐色～灰褐色	砂	に少し黄褐色 黒褐色
3	S31 (4B12)	田	日群1b層	深鉢	縞部部分	刮拭、凹面、沈綴	灰褐色	砂	に少し黄褐色 黒褐色
4	S31 (4B12)	田	日群1b層	深鉢	縞部部分	円孔、連続斜窓による凹面	灰褐色；黒褐色	砂	(スヌ；スヌ(特に外側ではタール状))
5	S31 (4B17)	田	古都	縞	縞部部分	刮拭	に少し黄褐色 に少し黒褐色	砂	に少し黄褐色 黒褐色
6	S31 (4B6)	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	刮拭、伏輪	に少し黄褐色 黒褐色	砂	に少し黄褐色 黒褐色
7	S31 (4B7)	田	古都	深鉢	縞部部分	縞文	L.R.→	灰褐色	砂少量
8	S31 (4B9 (4B12)) (上位)	田	日群1a層	深鉢	縞部(1~2) 刮拭	円錐斜文、凹面、刮拭	に少し黄褐色 に少し黄褐色	砂	(直径20cm) (スヌ；底面に擦痕)： スヌ(凹面、沈綴内中心に擦痕)
9	S31 (2B10)	田	日群2層	深鉢	縞部部分	粘土・断粘土付による降帶 に少し、沈綴、光沢文	L.R.→ 裡：裡	灰褐色	小径の白色粒下体 の黒褐色
10	S31 (4B17)	田	日群2層	深鉢	縞部部分	凹面、光沢文	L.R.→	灰褐色；黒褐色	小径の白色粒下体
11	S31 (4B17)	田	日群1b層	深鉢	縞部部分	伏輪、刺突、縞文	L.R.↓	に少し黄褐色	砂
12	S31 (4B17)	田	日群1b層	深鉢	縞部部分	伏輪、刺突	に少し黄褐色	砂、黑色粒目立つ、スヌ(沈綴内に少額)	スヌ(沈綴内に擦痕)
13	S31 (4B16)	田	日群1b層	深鉢	縞部部分	伏輪	浅褐色	裡	砂少量 黒化著しい
14	S31 (4B16)	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、光沢文	L.R.↓	に少し黄褐色	砂
15	S31 (4B7)	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、光沢文	L.R.↓	に少し黄褐色	砂少量
16	S31 (4B7)	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、縞文	L.R.↓	に少し黄褐色	砂少量
17	S31 (4B12 (4B13)) (上位)	田	日群1b層	縞	縞部(1~4) 刮拭、刺突	凹面	に少し黄褐色 灰褐色	砂、白色粒目立つ	(直径22cm) (スヌ；(L.R.より4cm厚壁))： スヌ(底面に擦痕)
18	S31 (4B13)	田	古都	深鉢	縞部部分	縞文	L.R.→ (?)	に少し黄褐色 に少し黄褐色	調文部体、3段(BLR)の可能性あり
19	S31 (4B13)	田	古都	深鉢	縞部部分	縞文	L.R.↓	灰褐色	雲母・砂多量 (スヌ(周辺に少額))
20	S31 (4B17)	田	古都	深鉢	縞部部分	然朱文	↑	灰褐色	裡
21	S31 (4B13)	田	古都	深鉢	縞部～底部	然朱文	↑	灰褐色	砂多量 (直径5.8cm) 砂面削除か？
22	S31 (4B7)	田	古都	深鉢	縞部～底部	伏輪	↑	灰褐色	砂(直径7.4cm) 砂面削除 (スヌ(底より2cm上に擦痕))
23	S34 (3B24)	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪	↑	に少し増色	砂、白色粒目立つ
24	S34 (3B24)	田	古都	深鉢	縞部部分	縞文	?	浅褐色	砂
25	S34 (3B23)	田	古都	深鉢	縞部部分	縞文	L.R.↓	浅褐色；褐色	砂多量 (スヌ；スヌ(外側削除だが、内面は全面多量))
26	S35 (3C23)	1層	1層	深鉢	縞部部分	伏輪、縞文	L.R.→	に少し黄褐色 に少し黄褐色	砂多量 (直径5.8cm) 砂面削除か？
27	S35 (3C23)	1層	1層	深鉢	縞部部分	伏輪、縞文	?	灰褐色；褐色	砂、白色粒
28	S35 (3C19)	1層	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪	↑	灰褐色；褐色	雲母・砂
29	S35 (3C18)	1層	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、光沢文	L.R.↓	に少し黄褐色 に少し黄褐色	砂
30	S35 (3C18)	1層	日群1b層	深鉢	縞部部分	伏輪、刺突	?	灰褐色；褐色	砂多量 (スヌ(網内中心に擦痕))
31	S35 (3C19)	1層	古都	深鉢	縞部部分	縞文	L.R.→	に少し黄褐色	砂
32	S35 (3C19)	1層	古都	深鉢	縞部部分	縞文	L.R.↓	に少し黄褐色	砂 (スヌ(網内中心に擦痕))
33	S35 (3C18)	1層	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、光沢文	L.R.↓	に少し黄褐色	砂
34	3D2	田	1層	深鉢	縞部部分	伏輪、刺突	?	に少し黄褐色 黒、白色粒	?
35	3C22	田	1層	深鉢	縞部部分	伏輪、刺突	?	灰褐色；褐色	砂、白色粒
36	3C23	田	1層	深鉢	縞部部分	伏輪、刺突	?	灰褐色；褐色	砂、白色粒
37	3C22	田	1層	深鉢	縞部部分	伏輪、光沢文	L.L.	に少し黄褐色	砂、白色粒
38	3C23	田	1層	深鉢	縞部部分	伏輪、光沢文	L.→	に少し黄褐色 黒、白色粒	?
39	5B6	田	1層	深鉢	縞部部分	伏輪、刺突	L.R.↓	に少し黄褐色 黒、白色粒	砂、白色粒
40	4B13	田	1層	深鉢	縞部部分	伏輪、刺突	L.R.↓	に少し黄褐色	砂、白色粒
41	4B8 (上位)	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、縞文?	?	褐色・裡	雲母・砂多量	黒化著しい
42	4B8 (上位)	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、縞文	L.R. (?)	灰褐色 に少し増色	雲母・砂多量	黒化著しい
43	4B14	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、凹面	?	灰褐色； 灰褐色； 黒褐色	砂多量 黒化著しい
44	4B13 (上位)	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	円孔、凹面、伏輪、 光沢文	?	灰褐色； 灰褐色； 黒褐色	小径の白色粒下体 成員部に堅縫
45	4C6	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、縞文	L.R.↓	に少し黄褐色 に少し黄褐色	砂
46	3B20	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、縞文	L.R.↓	に少し黄褐色 に少し黄褐色	調文部体 (スヌ(網内中心に擦痕))
47	4B15	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、刺突	L.R.↓	に少し黄褐色 黒褐色	雲母・砂多量 (スヌ(沈綴内中心に擦痕))
48	4B8 (上位)	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、縞文	?	に少し黄褐色 に少し増色	砂	(スヌ(沈綴内中心に擦痕))
49	3B19	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪	?	に少し黄褐色	砂
50	4B17	田	日群1a層	深鉢	縞部部分	伏輪、光沢文	L.R.↓	に少し黄褐色 に少し黄褐色	小径の白色粒下体

土器觀察表(2)

No.	通標名・出土地点	層位	分類	器形	既存部(既存部)	文様・施文等	調文原体・施文方向	色調(内・外)	真相材等	備考(既存部内)(推定部)(付着物内・外)
51 4B10	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	沈鉢、光刻調文	L.R.↓	に赤い黄褐色: 黒鉄色	小径の白色粘土体		
52 4B	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	沈鉢、光刻調文	L.R.↓	に赤い黄褐色: 黒鉄色	砂		
53 4B13	■	日野(上位)	深鉢	深鉢片	沈鉢		に赤い黄褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体		
54 4B15	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	内輪、沈鉢、光刻調文?	L.R. (7) ↓	に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂多量	風化著しい	
55 4C6	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	沈鉢		に赤い黄褐色: 黑鉄色	雲母・砂		
56 4B19	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	沈鉢		に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂多量	風化著しい	
57 4B19	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	沈鉢		に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂、白色粘土様が 他にべたつき	焼成良好で堅韌	
58 3C9	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	沈鉢、沈鉢、調文	L.R. (7) ↓	浅褐色: 黑鉄色	雲母・砂多量	(スス(内輪内に極微量))	
59 4B13	■	日野(上位)	深鉢	深鉢片	沈鉢、沈鉢		に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂多量		
60 5B	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	円孔		浅褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体	風化著しい	
61 4C6	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	沈鉢、光刻調文	R.L.→	に赤い黄褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体	焼成良好で堅韌 (スス(既片下半に少量))	
62 4B6	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	沈鉢、光刻調文	R.L.→	に赤い黄褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体 (スス(既片下半に少量))	風化著しい	
63 4B10	■	日野1a層	深鉢	深鉢片	円孔、内輪、沈鉢、刻文		に赤い黄褐色: 黑鉄色	1mm以下の細繊 塵大	風化著しい	
64 4B13	■	日野(上位)	深鉢	深鉢片	円孔、底脚削による凹痕		に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂多量	焼成良好で堅韌 (スス(内輪内を中心に))	
65 4B24	■	日野1b層	深鉢	深鉢片	円孔、沈鉢、刻文?		に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂	(口幅10cm)(スス(スス (外蓋底部上から内面まで多量))	
66 4B10	■	日野1b層	深鉢	深鉢片	内輪、沈鉢、刻文?	L.R.↓	に赤い黄褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体 で可塑性		
67 5B	■	日野1b層	深鉢	深鉢片	円孔、沈鉢、刻文?		に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂多量	塑性軟質	
68 3C14	■	日野1b層	深鉢	深鉢片	沈鉢、刻文		に赤い黄褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体		
69 4B8	■	日野(上位)	深鉢	深鉢片	刻文、内輪、沈鉢、刻文?		に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂	(スス(既片より下部):)	
70 5B	■	日野1b層	深鉢	深鉢片	沈鉢、刻文		に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂多量	塑性軟質で風化著しい	
71 3C14/ 3D6	■	日野1b層	深鉢	深鉢片	沈鉢、刻文		に赤い黄褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体		
72 4B20	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢		に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂多量	塑性軟質で風化著しい	
73 2B23	■	日野2層	深鉢	深鉢片	内輪部分、沈鉢:		灰褐色: に赤い黄褐色	小径の白色粘土体	74、75同一個体	
74 2B23	■	日野2層	深鉢	深鉢片	内輪部分、沈鉢:		灰褐色: に赤い黄褐色	小径の白色粘土体	73、74、76同一個体	
75 2B23	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢		に赤い黄褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体	73、74、77同一個体	
76 4B19	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢		灰褐色: 黑鉄色	砂少量	風化著しく、黒文調文の有無不明	
77 3C22	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢		灰褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体	78(内輪内に極微量)	
78 3C14	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢、刻文	?	灰褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体	79(内輪内に極微量)	
79 4B14	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢、光刻調文	L.R.↓	灰褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体	80(内輪内に極微量)	
80 3C14	■	日野2層	深鉢	深鉢片(1/4)	沈鉢、病害調文	L.R.↓	に赤い黄褐色: 黑鉄色	砂	(口幅10cm) 風化著しい (スス(既片底部に少量))	
81 4B19	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢、病害調文	L.R.↓	浅褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体	焼成良好で堅韌(スス(既片下半 に極微量)): スス(既片内に極微量))	
82 4B13	■	日野(上位)	深鉢	深鉢片	沈鉢、病害調文	L.R.→	暗褐色: 黑鉄色	砂少量		
83 3C4	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢		灰褐色: 黑鉄色	砂		
84 4B	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢、病害調文	L.R.↓	浅褐色: 黑鉄色	砂少量	風化著しい	
85 4B19	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢、病害調文	L.R.↓	灰褐色: 黑鉄色	砂少量		
86 4B14	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢		灰褐色: 黑鉄色	砂		
87 5B12	■	日野2層	深鉢	深鉢片	沈鉢		浅褐色: 黑鉄色	砂		
88 4B19	■	日野	深鉢	深鉢片	沈鉢、光刻調文	L.R.↓	に赤い黄褐色: 浅褐色	小径の白色粘土体		
89 5B6	■	日野	深鉢	深鉢片	肥厚口縁、沈鉢、光刻調文	L.R. (0.05m)	灰褐色: 黑鉄色	雲母・砂		
90 5B6	■	日野	深鉢	深鉢片	沈鉢、光刻調文	L.R. (0.05m)	灰褐色: 黑鉄色	雲母・砂		
91 4B24	■	日野	深鉢	深鉢片	沈鉢		灰褐色: 黑鉄色	砂		
92 3C4	■	日野	深鉢	深鉢片	口縁内面に沈殿する		灰白色: 白色	砂少量		
93 4B13	■	日野	口縁	口縁部分	沈鉢: 口縁内面に沈殿する		灰褐色: 黑鉄色	砂少量		
94 4B15	■	日野	口縁	口縁部分	沈鉢		灰褐色: 黑鉄色	小径の白色粘土体		
95 4B19	■	日野	口縁	口縁部分	沈鉢、幾文	L.R.	灰褐色: に赤い黄褐色	砂少量	風化著しい	
96 4B4	■	日野	口縁	口縁部分	沈鉢、幾文	L.R.↓	灰褐色: に赤い黄褐色	砂少量	(口幅16.2cm、底径6.8cm) 風化著しい	
97 4B19	■	日野	口縁	口縁部分	沈鉢、光刻調文	L.R.↓	黒褐色: 黑鉄色	砂少量		
98 3C3/ 3C4	■	口縁	口縁部分	口縁	口縁内面に沈殿する	R.L.→	灰褐色: 从闇向明	砂	(口径24cm) (スス(闇内に少量))	
99 4B14/ 4B19	■	口縁	口縁部分	口縁	沈鉢	?	灰褐色: に赤い黄褐色	砂	(スス(闇内に少量))	
100 4B15	■	口縁	口縁部分	口縁	沈鉢	L.R.↓	に赤い黄褐色: に赤い黄褐色	砂、ガラス質の斑 人物が目立つ	(スス(下部に極微量))	
101 4B14	■	口縁	口縁部分	口縁	?	L.L.	赤褐色: 灰褐色	砂		

観察表

土器観察表(3)

No.	遺物名・出土地点	解剖	分類	器種	現存部位 (既存率)	文様・施文等	縄文原体・施文方向	色調(内・外)	基材等	備考(既存部 内) (既存部 cm) (付帯部 内)
1024C2	田	IV群	深鉢[縁部剥片]	縄文	LR→		浅黄褐色～灰白色	砂	縄文斜立つ	
1035B7	田	IV群	深鉢[縁部剥片]	縄文	LR↓		灰褐色～黄褐色	砂		
1044B24	田	IV群	深鉢[縁部剥片]	縄文	LR→		灰褐色～黄褐色	小径の白色粘土体	口径10cm	
1053C19	田	IV群	深鉢[底部]	弦纹、網目			灰褐色～黄褐色	砂		
1064B19	田	IV群	深鉢[側面部剥片]	無文	↓		灰褐色～黄褐色	小径の白色粘土体		
1073B25	田	IV群	鉢[縁部剥片]	沈縄文、網目文			灰褐色～黄褐色	砂	白色斜立つ	
1084B10/4B20	田	IV群	高台[縁部付近]	底部			灰褐色～黄褐色	小径の白色粘土体	口径18.7cm、底径7.8cm	
1094B19	田	IV群	深鉢[底部～底部]	底部			明褐色～灰褐色	砂少量	底径6.8cm	
1104B9	田	IV群	深鉢[側面部剥片]	底部			灰褐色～黄褐色	小径の白色粘土体	底径5.5cm	
1113C4	田	IV群	深鉢[底部剥片]	沈縄文			灰褐色～黄褐色	砂	(直径5.5cm) (スヌ(底より4cm上に帶状))	
1124B19	田	IV群	深鉢[側面部剥片]	底部			灰褐色～黄褐色	砂、黑色斜立つ	(直径11.2cm) (スヌ(底より2cm上に帶状))	
1134B15	田	IV群	深鉢[側面部剥片]	縄文	RL→		灰褐色～黄褐色	砂	底径5.5cm (スヌ(縄文内に施縄量))	
1144B19	田	IV群	深鉢[側面部剥片]	縄文	LR→↓		灰褐色～黄褐色	砂多量	(直径11.7cm) (スヌ(底より4cm上に帶状))	
1153C3	田	IV群	深鉢[底部剥片]	木案底			灰褐色～黄褐色	砂多量	(直径11.3cm)	
1164B19	田	IV群	深鉢[側面部剥片]	底部	LR↓		灰褐色～黄褐色	砂多量	(直径12.0cm) (スヌ(底より2cm上に帶状、削れ口なし))	
1174B19 (05試験)	田	IV群	深鉢[縁部剥片]	底部			灰褐色～黄褐色	砂	本調査時の「Ⅱ層」に相当	
11810トレンチ (05試験)	下層	1群	深鉢[縁部剥片]	沈縄、網目文	RL↓		灰褐色～灰白色	黑、白色粘	(口径30.0cm) 本調査時の「Ⅰ層」に相当 (スヌ(削下時に带状))	
11910トレンチ (05試験)	上層	II群1a層	深鉢[縁部剥片]	円凸、沈縄文			灰褐色～灰白色	小径の白色粘土体	(直径11.7cm) (スヌ(底内に施縄量))	
12010トレンチ (05試験)	上層	II群1b層	深鉢[縁部剥片]	沈縄、網目文、光燒縄文	LR↓		灰褐色～黄褐色	砂、白色斜立つ	(直径11.2cm) (スヌ(底内に少量))	
12110トレンチ (05試験)	田	III群	深鉢[側面部剥片]	通縫網目文、縄文	L↓		灰褐色～灰白色	雲母+砂	本調査区分範囲内のため対応層位不明 (スヌ(表面と底面))	
12210トレンチ (05試験)	上層	II群1b層	深鉢[縁部剥片]	円凸、通縫網目による凹凸			灰褐色～灰褐色	砂多量	本調査区分範囲内のため対応層位不明 (スヌ(表面と底面))	
12310トレンチ (05試験)	上層	II群2層	深鉢[側面部剥片]	沈縄、縄文	RL→ (?)		灰褐色～灰褐色	小径の白色粘土体	本調査区分範囲内(スヌ(既存部附近に少量))	
12410トレンチ (05試験)	上層	II群2層	深鉢[側面部剥片]	沈縄、縄文	LR→		灰褐色～灰褐色	砂	本調査区分の「Ⅲ層」に相当、 既存部質(スヌ(表面と底面とも微量))	
12510トレンチ (05試験)	上層	IV群	鉢[縁部剥片]	沈縄			灰褐色～灰褐色	砂少量	本調査区分の「Ⅲ層」に相当	

石器観察表

No.	出土地點(遺構名)	出土解剖	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	基材	遺存状態	備考
127 4C	田	A	8.3	5.6	2.4	85.14	頁岩	板長	完形	觀型石器
128 4C	田	B	5.4	4.3	1.6	25.80	頁岩		折損?	
129 4B8	田(壁上位)	C	6.5	4.1	1.2	25.17	頁岩	板長	完形	觀型石器

不定形石器観察表

No.	出土地點(遺構名)	出土解剖	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	基材	遺存状態	備考
130 4B18	田	A	5.6	7.3	2.3	71.40	砂凝灰岩	板長	片側縫～底縫	
131 4B13	田	A	5.3	5.6	2.2	38.17	砂凝灰岩	板長	片側縫～底縫	
132 SII (4B6)	田	B	2.5	6.0	0.8	13.63	頁岩	?	底縫	切削有り
133 SII (4B1)	田	B	5.1	4.1	1.5	26.80	泥紋岩	板長	片側縫～底縫	
134 SII (4B11)	田	C	4.9	3.8	0.9	10.07	頁岩	板長	片側縫～底縫	
135 5B6	田	D	5.5	4.5	1.5	32.08	泥紋岩	板長	片側縫	

兩極剝離窓のある石器観察表

No.	出土地點(遺構名)	出土解剖	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	基材	遺存状態	備考
136 4B24	田	E	8.7	5.4	2.3	156.07	圓滑岩			
137 SX4 (3B19)	田	F	10.9	4.9	2.2	159.02	圓滑岩	圓	完形	磨製石斧の未完成
138 3B20	田	G	8.7	4.3	2.2	87.85	頁岩	圓	完形	

打製石斧観察表

No.	出土地點(遺構名)	出土解剖	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	基材	刃削断面形	遺存状態	備考
137 SX4 (3B19)	田	A	10.9	4.9	2.2	159.02	圓滑岩	圓	刃削		
138 3B20	田	B	8.7	4.3	2.2	87.85	頁岩	圓	刃削		

磨製石斧観察表

No.	出土地點(遺構名)	出土解剖	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	基材	遺存状態	備考
139 SII (4B7)	田	A	8.9	4.5	2.3	165.03	圓滑岩	圓	刃削	刃削部(肉刃)、刃削部に鋸打状のつぶれあり。
140 5B6	田	B	8.2	5.3	2.2	109.63	頁岩	圓	刃削	
141 10トレンチ(05試験)	上層	C	11.0	6.3	3.4	399.57	舞鶴岩	圓	刃削	本調査時の「Ⅲ層」に相当
142 4トレンチ(05試験)	上層	D	6.1	4.3	2.4	109.74	蛇紋岩	圓	刃削	本調査区分範囲外のため対応層位不明
143 SII (4B12)	田	E	8.8	5.2	2.5	171.43	蛇紋岩	圓	刃削	
144 4B23	田	F	6.2	5.6	2.4	123.83	蛇紋岩	圓	刃削	

磨製石斧未成品観察表

No.	出土地点(遺構名)	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	工程	備考
145	S225	III	15.6	9.9	3.7	1030.19	黒レイ岩	剥離調査段階	
146	3C13	III	9.5	7.3	3.3	447.45	黒レイ岩	剥離調査段階	
147	SII (4B12)	III	8.8	7.6	3.1	277.12	ホルンフェルス	剥離調査段階	打製石斧の未成品?
148	SII (3B10)	III	14.8	7.1	3.4	485.27	硬砂岩	敲打調査段階	

敲磨石類観察表

「面」は前面、「端」は敲打面を表している。「○」は表面の凹面、凸面端、「○」は片面、片側面、片端部に使用痕が認められることを表している。「△」は使用痕が認めないものである。

No.	出土地点(遺構名)	出土層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	表面 磨 削 痕 端 面 部	側 面 部	端 部 部	遺存状態	備考
149	SII (4B7)	III	A1	16.8	11.4	3.5	999.66	凝灰岩	○	○	○	完形	
150	3C1	III	A1	12.7	9.7	3.4	551.66	安山岩	○	○	○	完形	
151	SII (4B12)	III	A1	7.3	7.6	7.3	601.76	花崗岩	○	○	○	完形	前面に崩れ
152	SII (3B15)	III	A1	12.4	8.1	5.3	699.44	安山岩	○	○	○	完形	
153	4B10	III	A1	13.8	9.8	3.6	429.00	凝灰岩	○	○	○	4/5	欠損後も使用継続
154	5B16	III	A1	9.8	8.3	3.8	460.63	安山岩	○	○	○	完形	
155	SX4 (3B24)	III	A2	10.2	9.6	4.4	486.06	安山岩	○	○	○	完形	
156	4B	III	A2	12.8	6.5	4.3	528.05	安山岩	○	○	○	3/4	
157	SII (4B6)	III	A2	8.8	8.3	4.9	498.51	安山岩	○	○	○	完形	
158	SII (4B12)	III	A2	10.9	8.0	2.8	274.00	安山岩	○	○	○	2/3	
159	SII (4B11)	III	B1	18.8	6.8	3.8	723.47	安山岩	○	○	○	完形	
160	4B9	III	B1	15.1	8.3	3.7	570.56	凝灰岩	○	○	○	完形	
161	SX4 (3B24)	III	B1	8.7	11.7	7.0	1060.80	輝緑岩	○	○	○	欠損	
162	4B	III	B2	12.2	5.4	2.4	278.73	ホルンフェルス	○	○	○	完形	
163	SX4 (3B19)	III	B2	11.4	5.6	4.4	418.12	輝緑岩	○	○	○	完形	
164	4B	III	B2	10.2	7.3	4.4	560.52	黒レイ岩	○	○	○	欠損	
165	3C	III	B2	9.2	8.2	4.9	488.74	輝緑岩	○	○	○	欠損	

多面体敲石観察表

No.	出土地点(遺構名)	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
166	SX4 (3B24)	III	9.4	9.3	5.6	722.28	輝緑岩	完形	
167	SII (3B20)	III	6.4	5.0	2.8	129.10	輝緑岩	完形	
168	SII (4B2)	III	6.8	6.4	4.0	270.97	輝緑岩	完形	
169	SII (4B16)	III	6.0	7.1	3.9	245.21	黒レイ岩	完形	
170	SII (4B6)	III	5.3	6.1	2.9	123.95	硬砂岩	1/2	
171	SII (4B6)	III	6.6	6.1	3.7	323.16	黒レイ岩	1/2	
172	10トレンチの試掘	上解	5.8	7.1	2.5	138.54	黒レイ岩	1/2	本調査時の「Ⅲ解」に相当
173	SII (4B17)	III	9.5	5.4	3.6	298.08	綠色凝灰岩	完形	

砾石観察表

No.	出土地点(遺構名)	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
174	SII (4B7)	III	17.3	14.9	6.8	1707	砂岩	欠損	
175	SX4 (3B24)	III	16.3	11.8	5.8	908	砂岩	欠損	
176	2C12	III	13.9	15.0	4.1	925	砂岩	欠損	使用面に敲打痕
177	SII (4B11)	III	21.7	24.7	4.5	1938	砂岩	欠損	
178	SII (3B10)	III	40.0	21.3	4.5	2950	安山岩	欠損	
179	4B	III	31.6	14.8	5.1	3625	砂岩	欠損?	
180	SII (4B7)	III	33.8	18.1	4.6	3517	凝灰岩	完形	
181	4C7	III	36.6	15.7	4.8	3438	砂岩	完形	

石器観察表

No.	出土地点(遺構名)	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
182	SII (4B12)	III	22.2	19.5	5.9	2855	安山岩	2/5	
183	SX4 (3B24)	III	21.0	27.3	8.8	4417	穂岩	2/5	
184	SII (4B6)	III	16.9	19.6	7.3	2375	安山岩	1/2	
185	SX4 (3B23)	III	19.4	20.4	4.1	2167	安山岩	1/2	
186	3C13	III	37.9	22.1	10.9	3750	凝灰岩	3/5	

石器未成品観察表

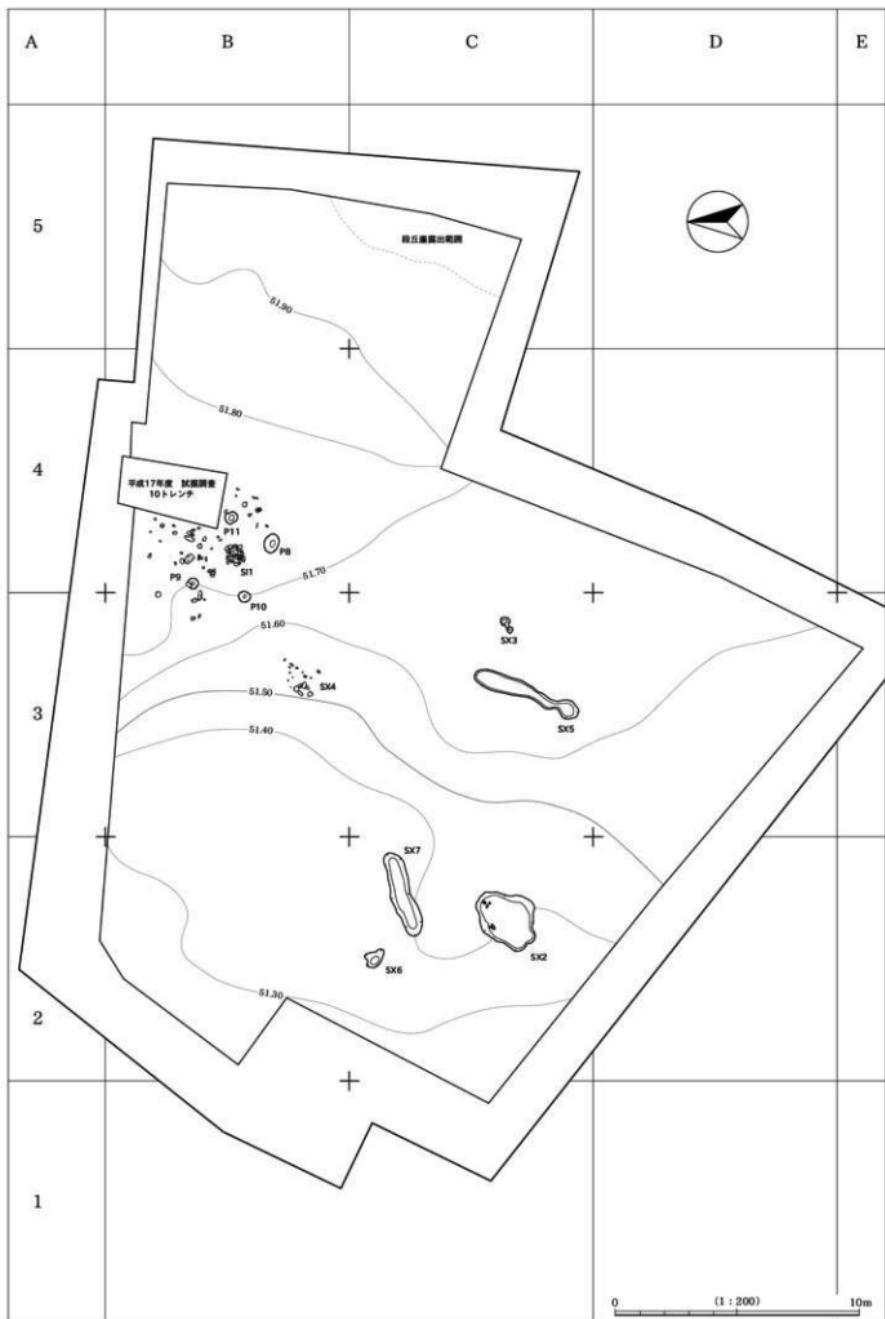
No.	出土地点(遺構名)	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
187	SII (4B6)	III	5.8	4.7	0.8	22.67	頁岩	縦長剥片	
188	SII (4B1)	III	2.4	2.6	0.6	3.07	流紋岩	縦長剥片	

石器観察表

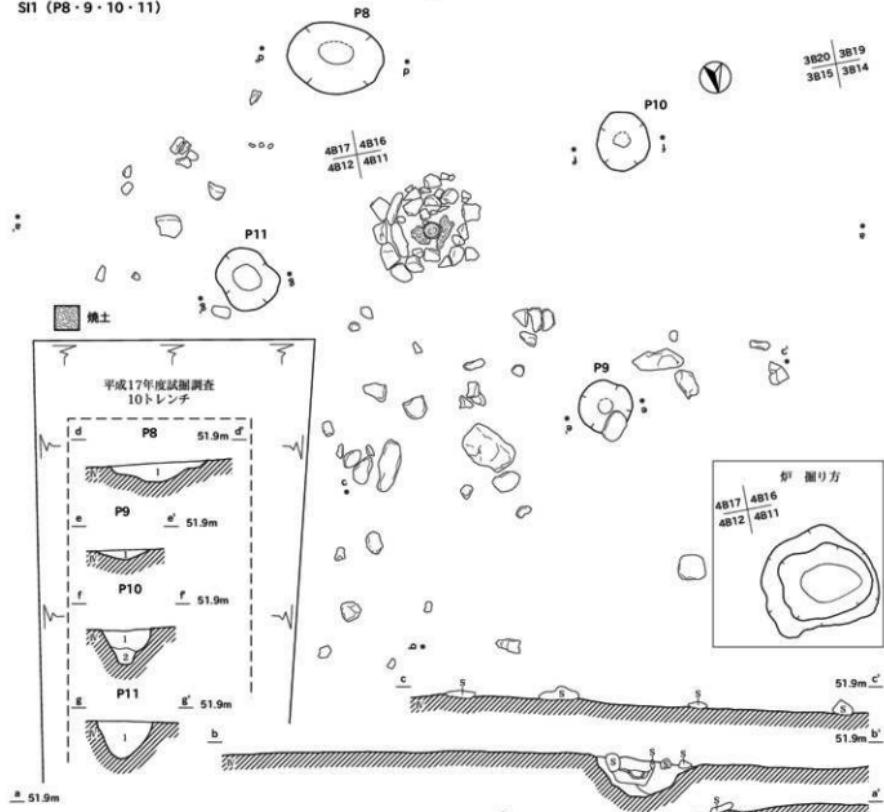
No.	出土地点(遺構名)	分類	出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
189	SII (4B12)	A	III	8.1	4.5	3.7	89.44	黒レイ岩	
190	SII (4B12)	B	III	8.3	3.3	4.1	79.99	流紋岩	
191	4B			62.2	17.4	13.1	255000	花崗岩	完形
192	SX4 (3B19)			8.1	6.9	5.8	545.65	黒レイ岩	完形
193	3D2			12.0	8.1	3.8	750.72	黒レイ岩	完形
194	SX4 (3B18)			25.5	26.1	7.7	7000.00	花崗岩	完形

図 版



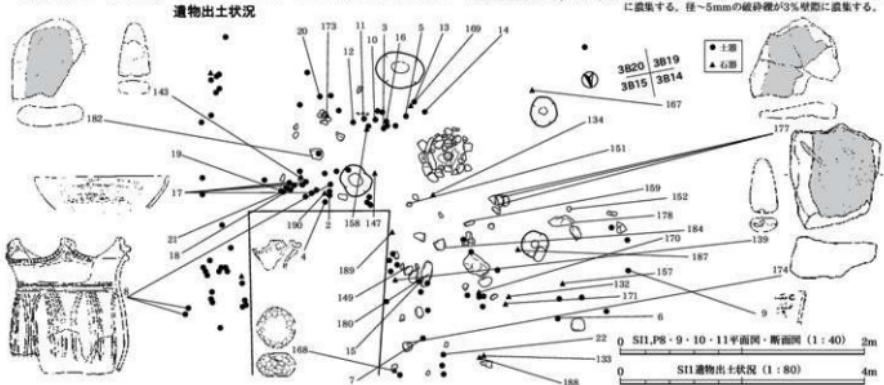


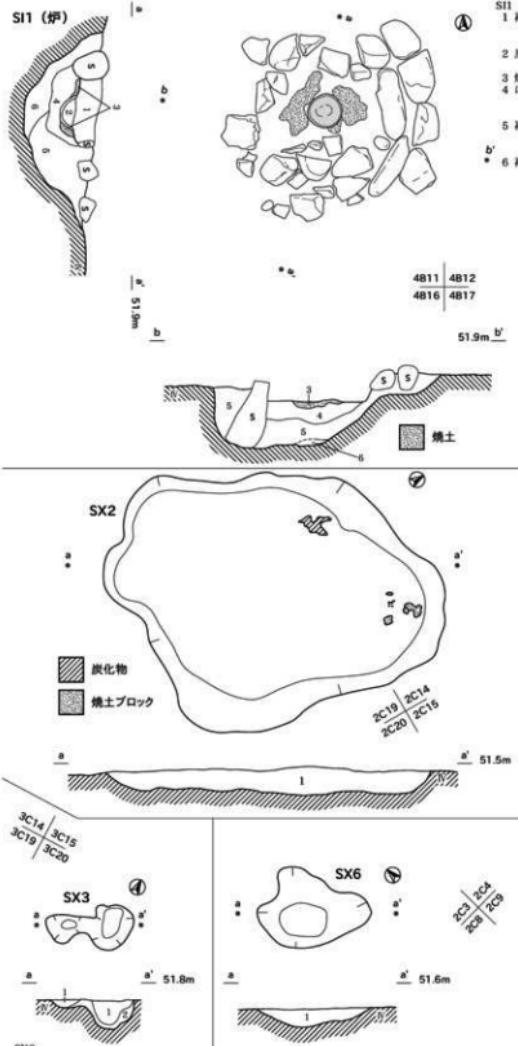
SI1 (P8・9・10・11)



P8 黒褐色粘質シルト(10YR3/2) 粘性中、しまり中。径1~3mmの炭化物粒を1%含む。径10mmの礫を1%以下含む。

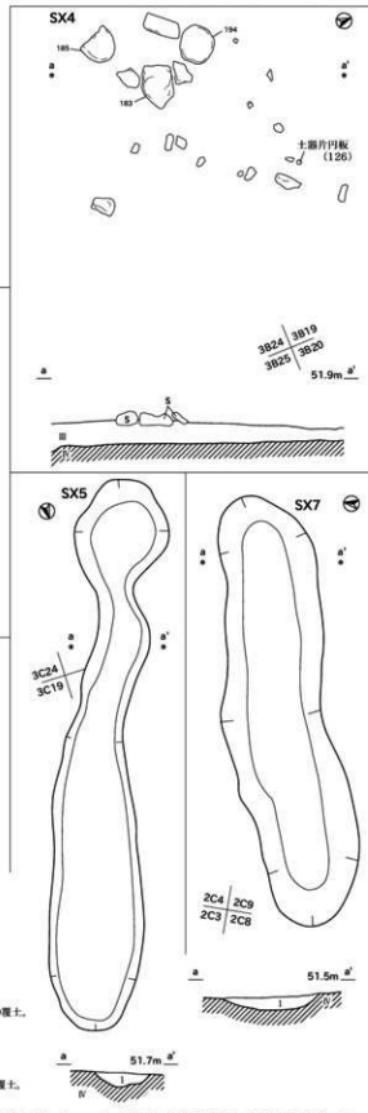
P9 梅色粘質シルト(7.5YR4/4) 粘性中、しまり中。径1~3mmの礫を3%均等に含む。
遺物出土状況





造構別図2 SI1 (炉)・SX2・3・4・5・6・7

- SI1 (炉)**
- 褐色シルト (7.5YR4/4) 粘性中。しまり中。径1~1mmの炭化物粒を1%均等に含む。径1~1mmの焼土粒を1%以下位に濃集する。
 - 褐色シルト (7.5YR3/1) 粘性中。しまり弱。径5~5mmの炭化物粒を5%下部に濃集する。炉体内部の覆土。
 - 燒土主体層 (5YR5/8) 粘性弱。被熱強質部分。
 - ない赤褐色シルト (5YR4/4) 粘性弱。しまり弱。径1~3mmの焼土粒を5%均等に含む。径1mmの炭化物粒を1%以下均等に含む。
 - 褐色シルト (7.5YR4/4) 粘性中。しまり弱。径3mmの被鉄縫を1%均等に含む。径1mmの炭化物粒を1%以下均等に含む。炉石設置より方理土 (II)。
 - 褐色粘質シルト (7.5YR4/3) 粘性中。しまり中。径1~5mmの被鉄縫を3%左側に濃集する。炉石設置より方理土 (II)。



SX2
1 褐色粘質シルト (7.5YR3/3) しまり中。地山 (下解) との接觸が低めが、覆土のほうのがわずかに高い。
径1~15mmの炭化物粒を1%均等に含む。局所的に炭化物集中部分あり。
径5~20mmの焼土ブロックを3%均等に含む。局所的に径50mmの焼土
ブロック集中部分あり。

SX3
1 褐色粘質シルト (7.5YR4/3) 粘性強。しまり中。2層との接觸面に被鉄縫を含む。

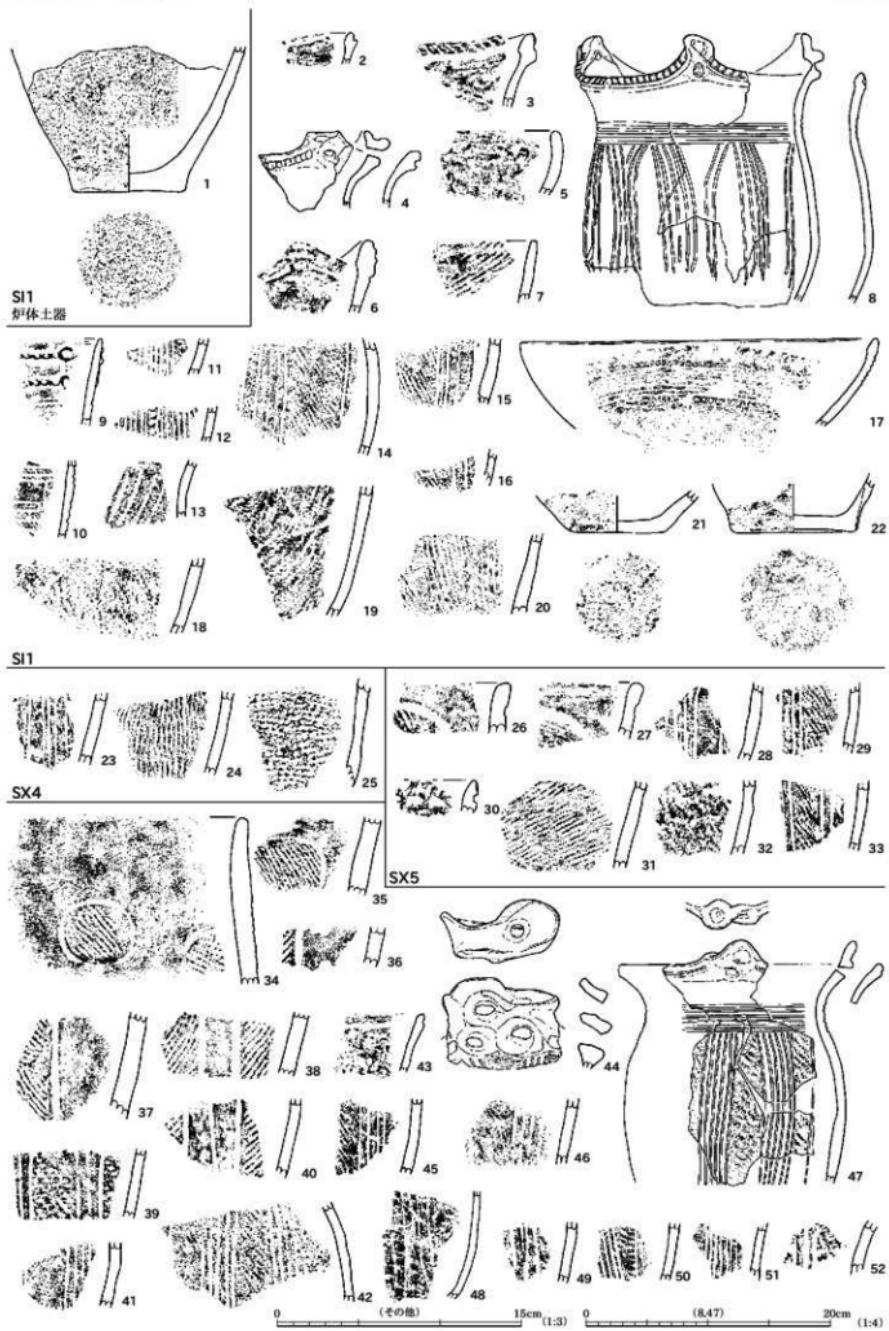
2 暗褐色粘質シルト (7.5YR3/4) 粘性中。しまり中。径1~5mmの炭化物粒を1%均等に含む。
径1~5mmの被鉄縫をブロック状に1%均等に含む。

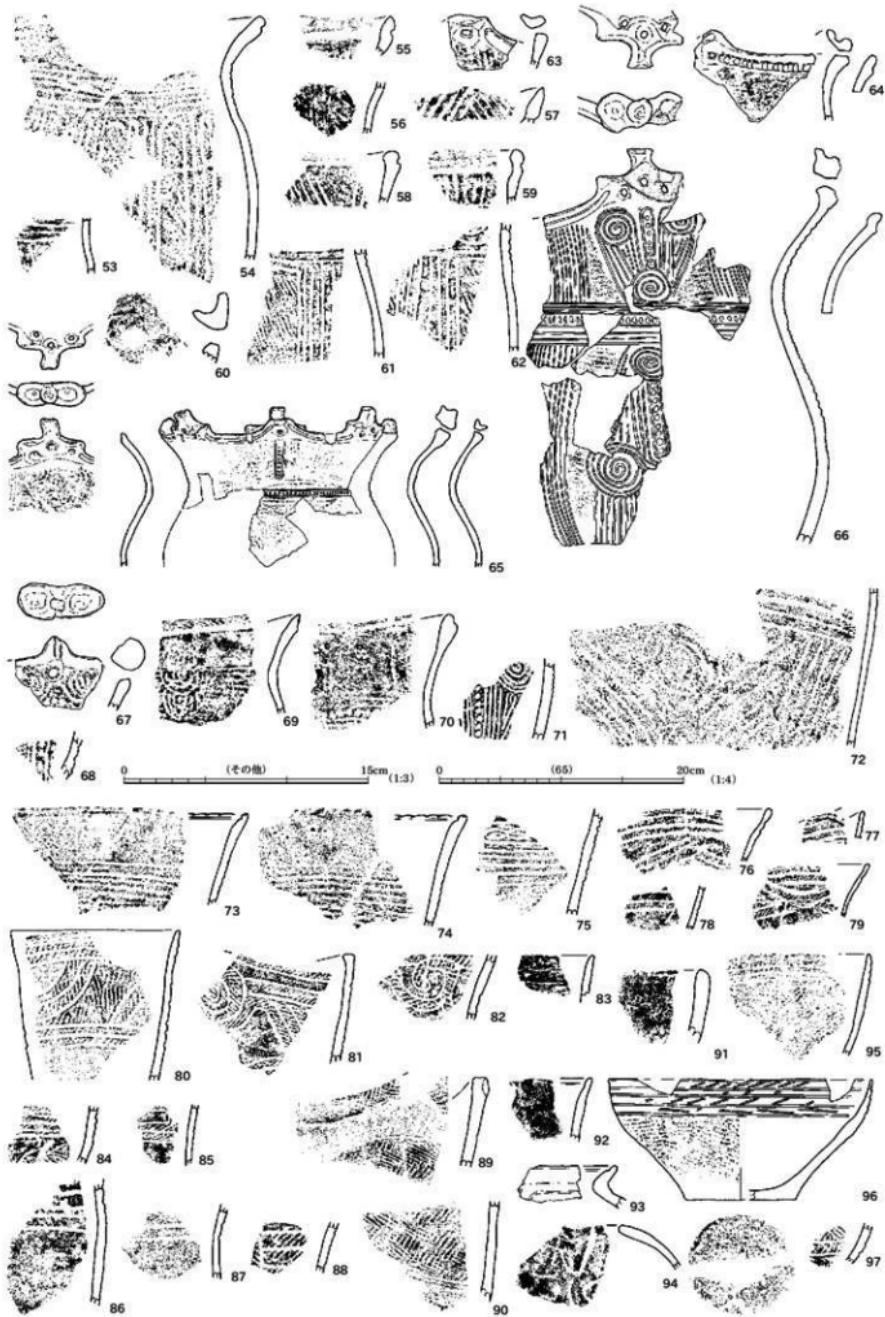
SX6
1 褐色粘質シルト (7.5YR4/3) 粘性中。しまり弱。地山 (下解) との接觸面に被鉄縫を含む。SX3と同様の覆土。
径1~10mmの被鉄縫を1%均等に含む。

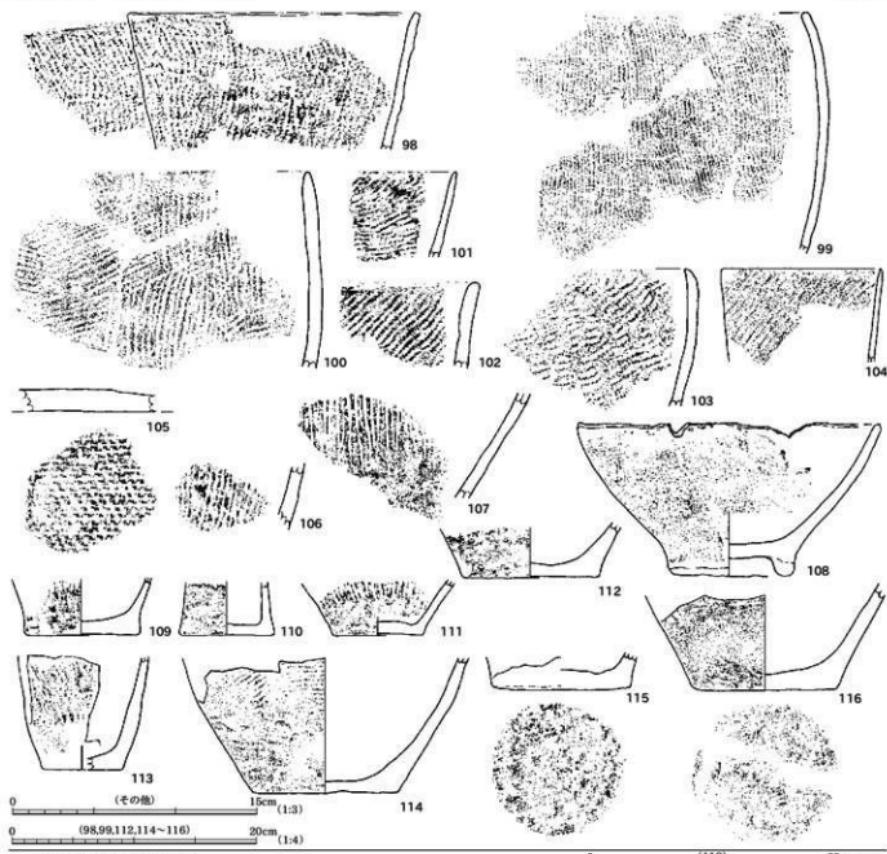
SX5
1 褐色粘質シルト (7.5YR4/4) 粘性中。しまり弱。径1~15mmの被鉄縫を7%均等に含む。

SX7
1 褐色粘質シルト (7.5YR4/4) 粘性中。しまり弱。径1~15mmの被鉄縫を7%均等に含む。SX5と同様の覆土。

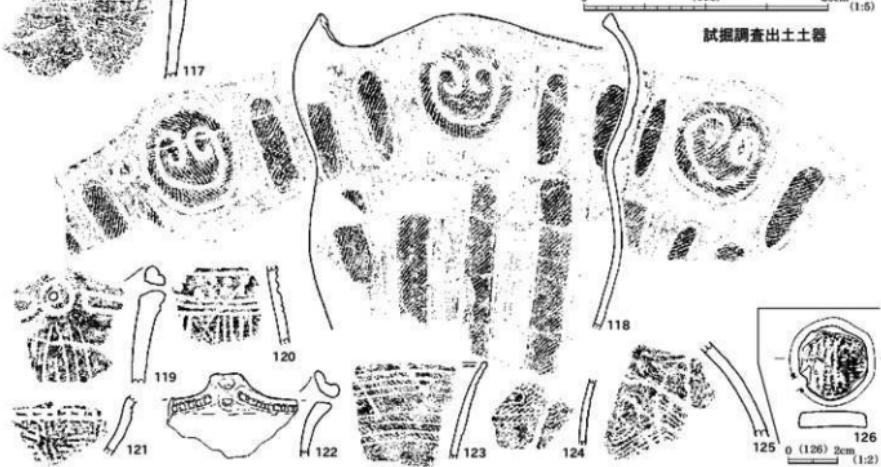
0 SI1 平面図・断面図 (1:20) 1m 0 SX4 平面図・断面図 (1:30) 1m 0 SX2・3・4・5・6・7 平面図・断面図 (1:40) 2m

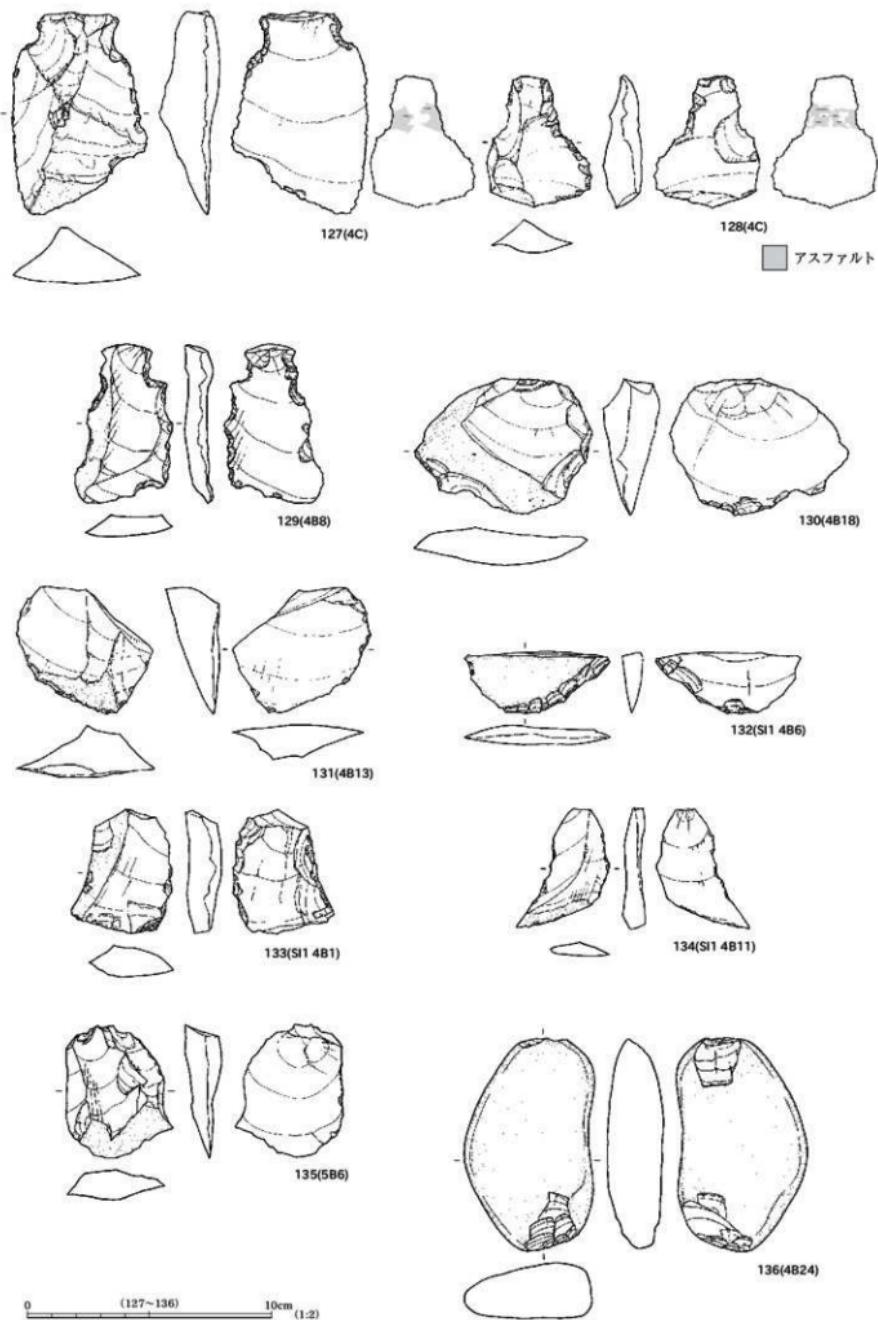


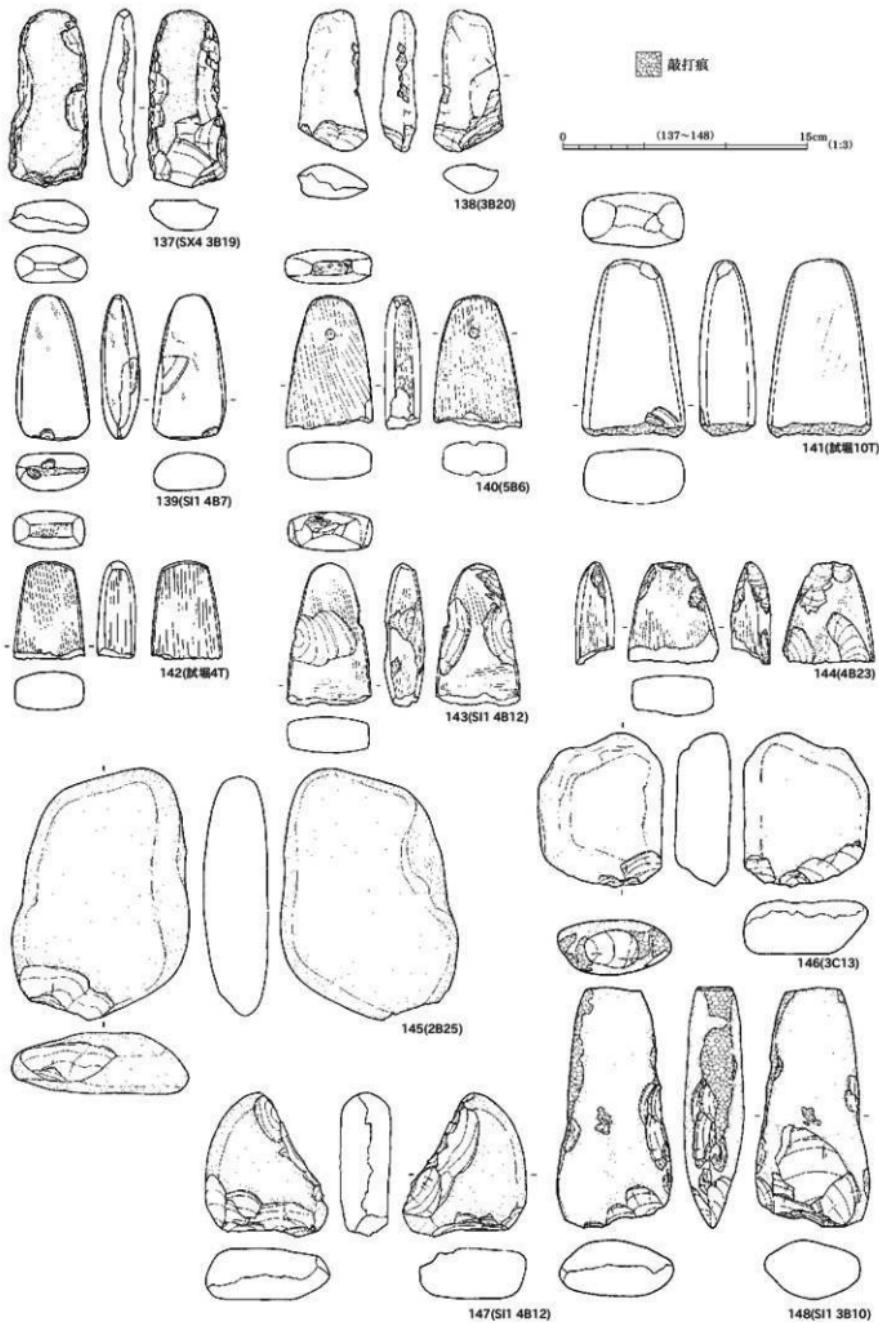


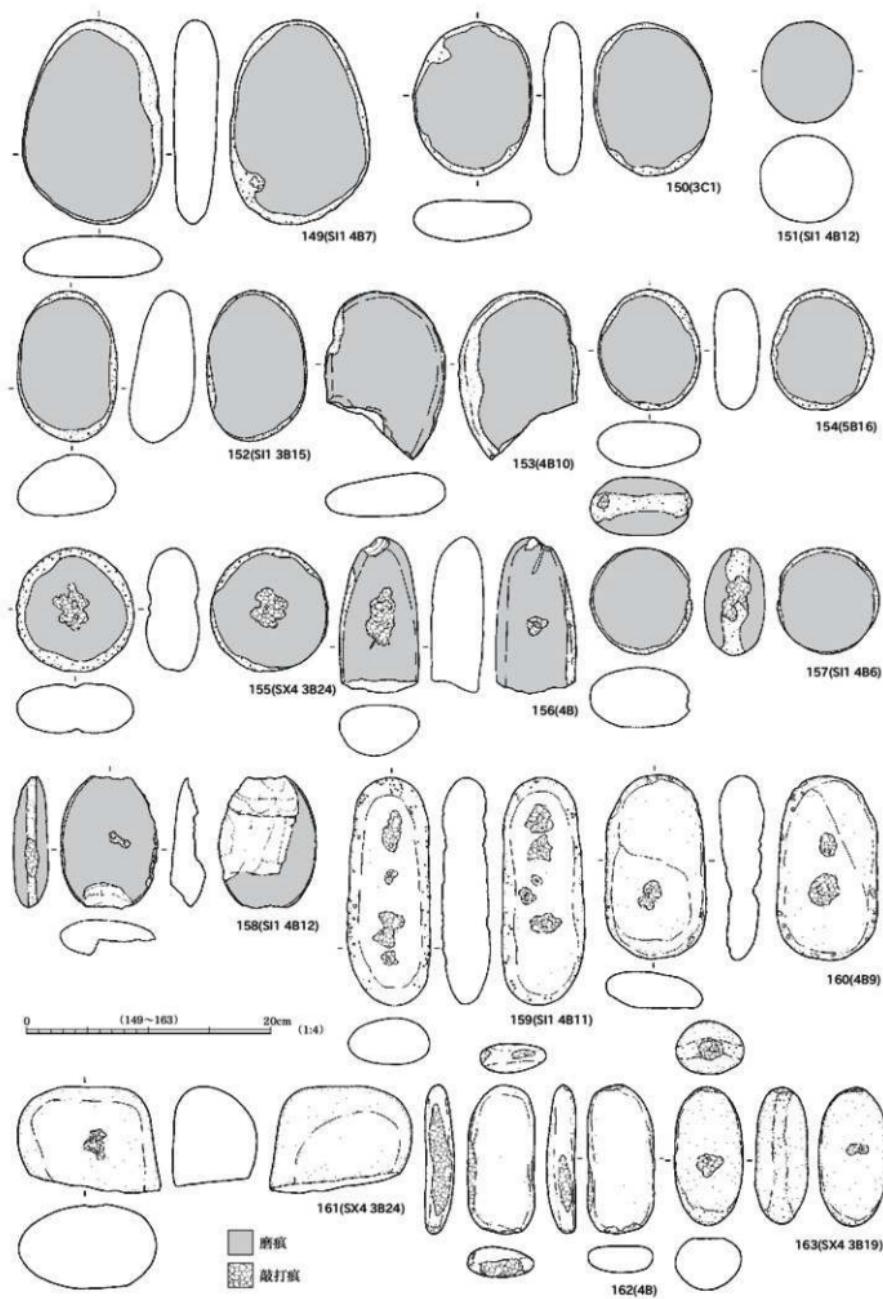


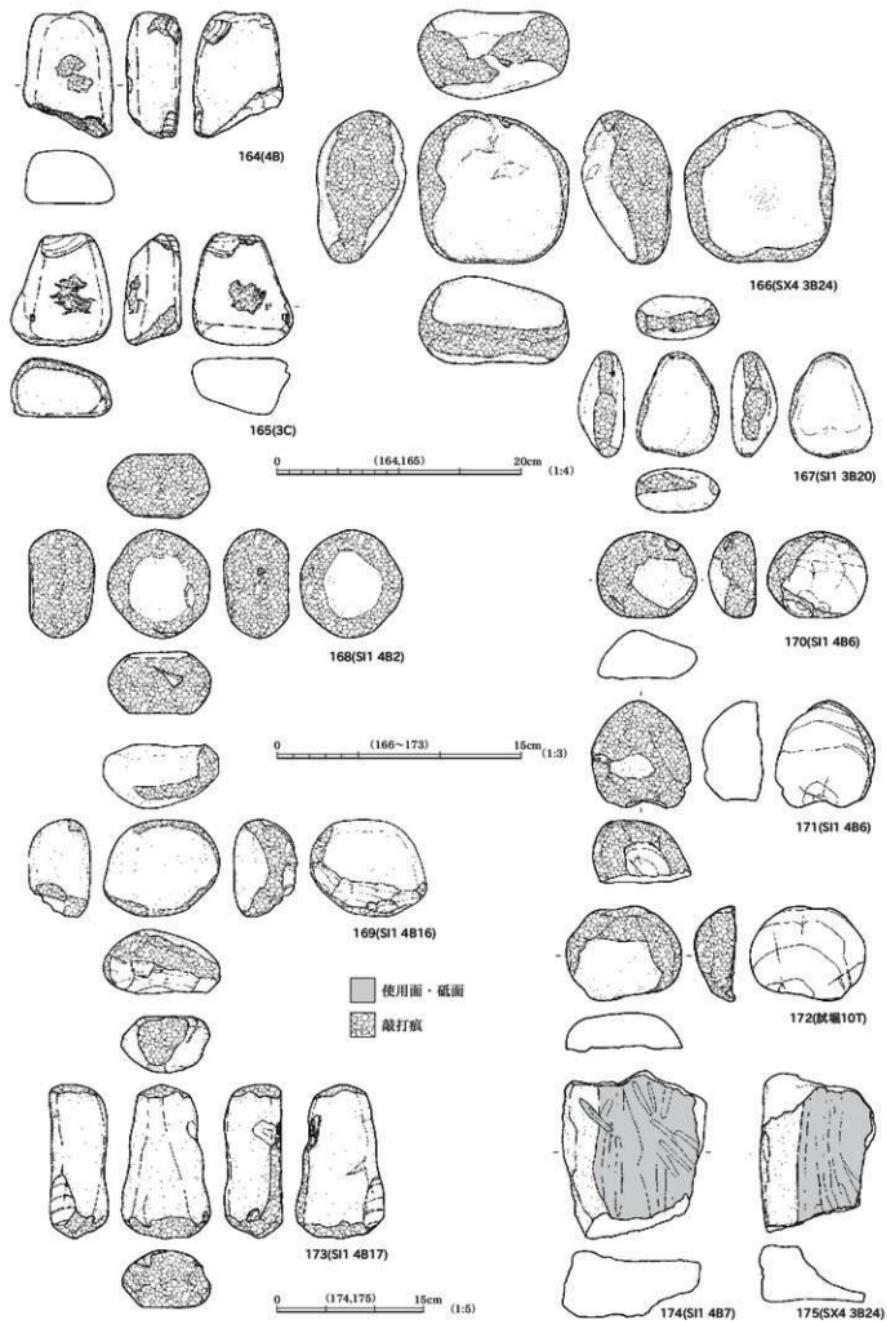
試掘調査出土土器

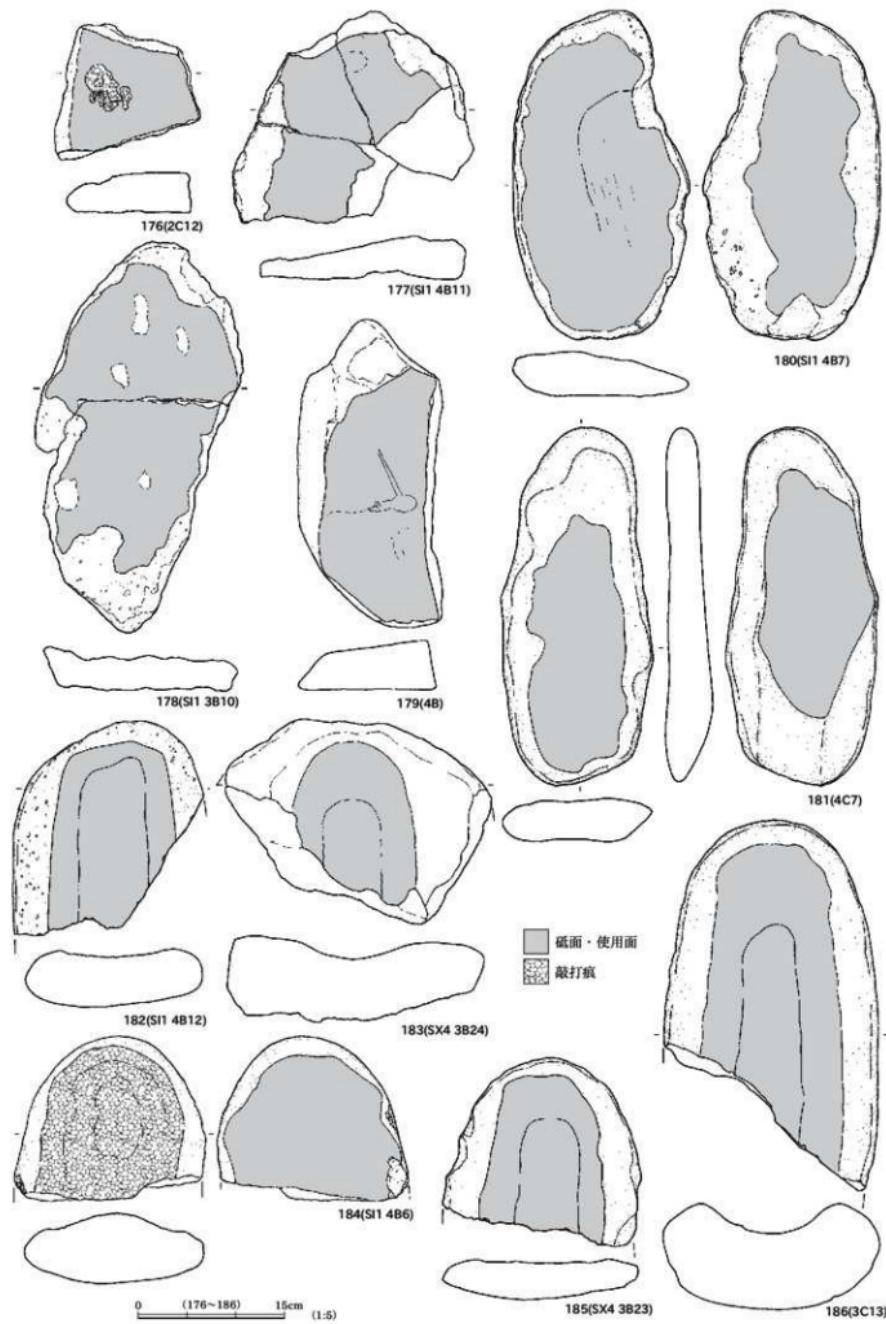


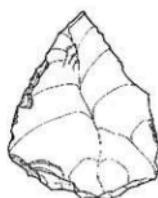




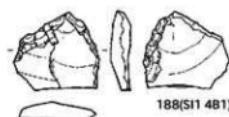








187(SI1 4B6)

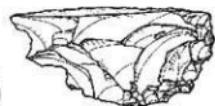


188(SI1 4B1)

0 (187,188) 6cm (2:3)
0 (189,190,195) 10cm (1:2)



189(SI1 4B12)



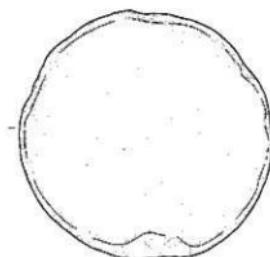
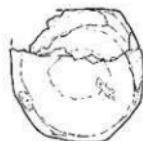
190(SI1 4B12)



192(SX4 3B19)

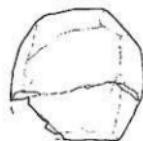


193(3D2)



194(SX4 3B18)

0 (191,194) 15cm (1:5)



195(4B14)



遺跡全景（東から）



遺跡の位置と周辺の景観（国土交通省国土地理院 昭和51年9月19日撮影、空中写真）



遺跡遠景（播川ダム堤体付近から）



遺跡遠景（阿賀野川の対岸、荒倉山中腹から、矢印の交点が遺跡位置）



調査前近景（南から、奥左手が荒倉山）



調査前近景（東から、中央右手が阿賀野川）



完掘全景（西から）



完掘全景（南から）



拡張部分遺物出土状況（東から、奥中央がSI1）



V層以下土層確認トレンチ（人物の頭部の高さがほぼIII層に相当）



基本層序（第7回①地点、東から）



基本層序（第7回⑤地点、北から）



基本層序（第7回②地点、南から）



基本層序（第7回②地点、南から 遺物包含層部分を拡大して）



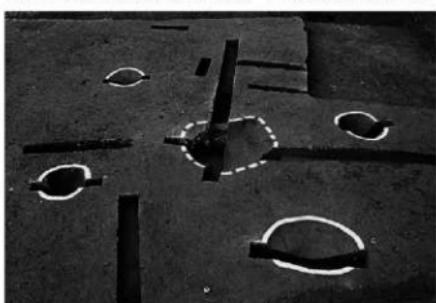
SI1 磚・遺物出土状況（西から）



SI1 磚・遺物出土状況（北西から。右手側へ下る緩斜面に磚が配置される）



SI1 掘出状況（西から）



SI1, P 8・9・10・11 完整（南から）



Si1 炉検出状況（西から）



Si1 炉平面（北から）



Si1 炉断面（西から）



Si1 炉掘り方完掘（北西から）



P8 断面（南から）



P8 完掘（南から）



P9 断面（南から）



P9 完掘（南から）



P10 断面（南から）



P10 完掘（南から）



P11 断面（南から）



P11 完掘（南から）



SX2 掘出状況（南東から）



SX2 断面（南東から）



SX4 平面（東から）



SX4 断面（北東から）



SX3 断面（南東から）



SX3 完掘（南東から）



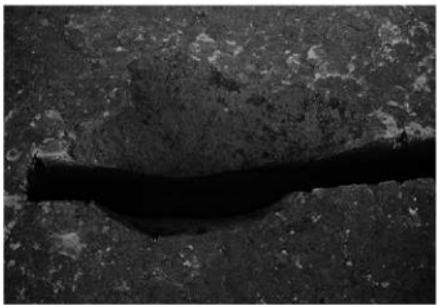
SX5 断面（北東から）



SX5 完掘（北東から）



SX6 断面（南西から）



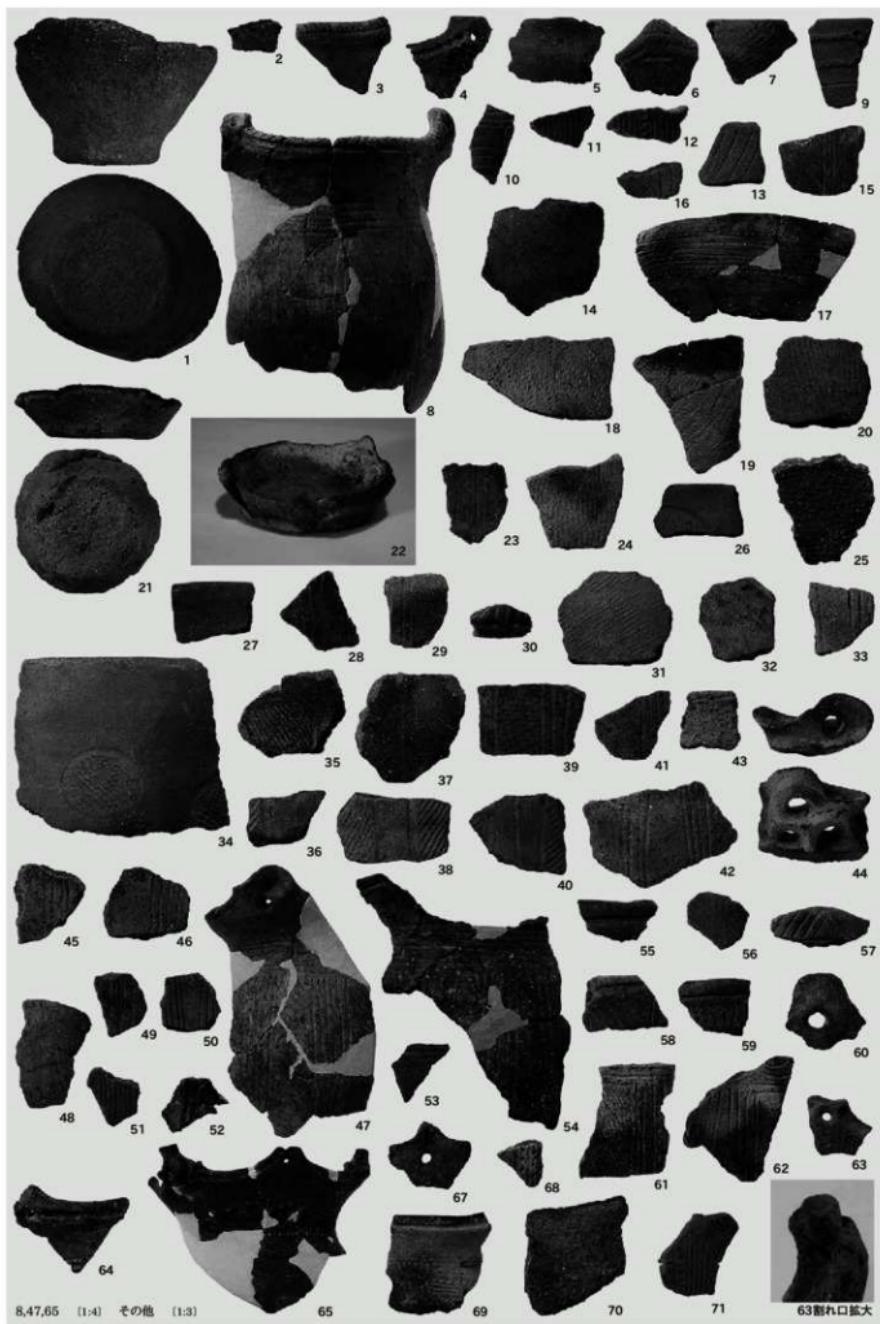
SX6 完掘（南西から）



SX7 検出状況（北から）

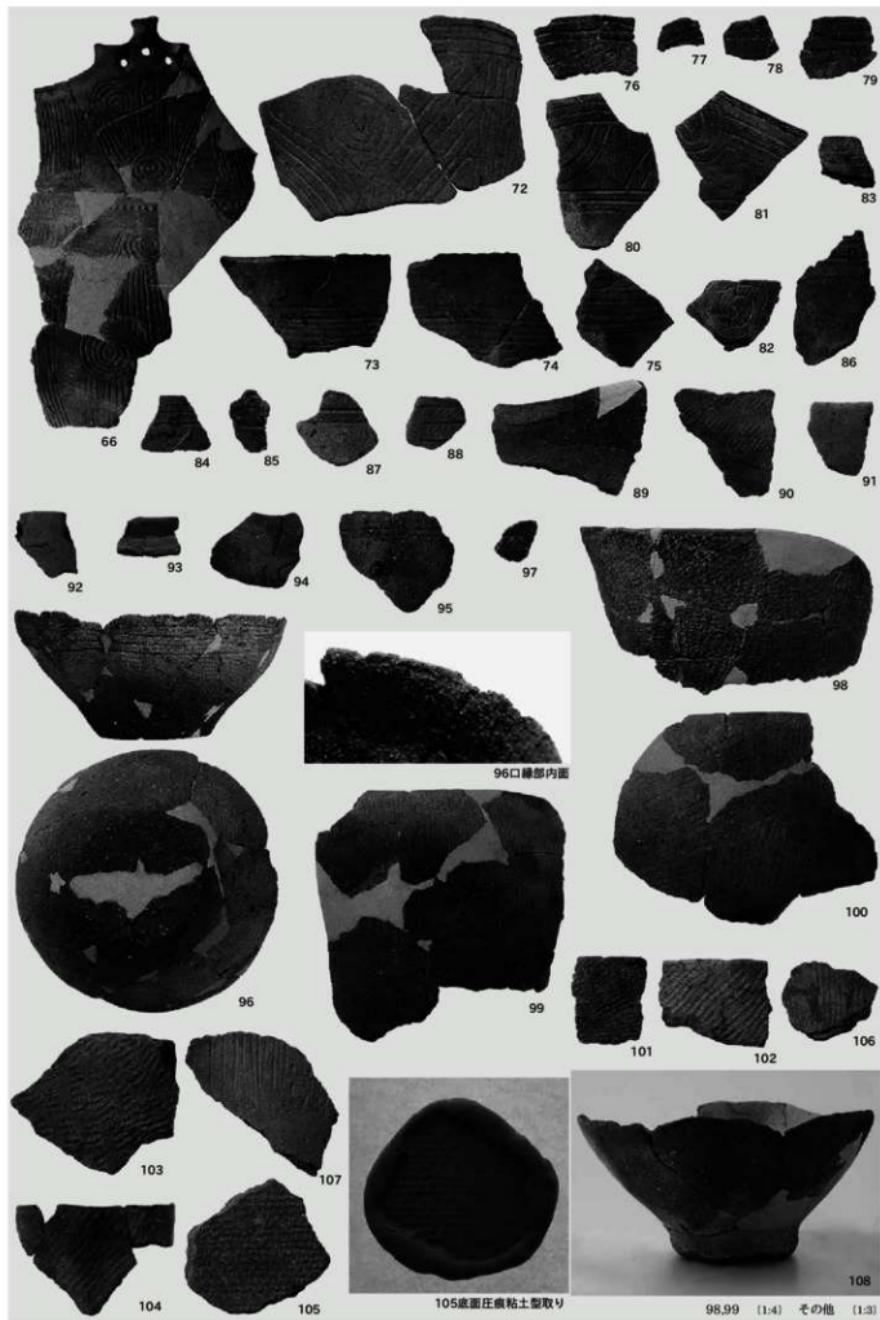


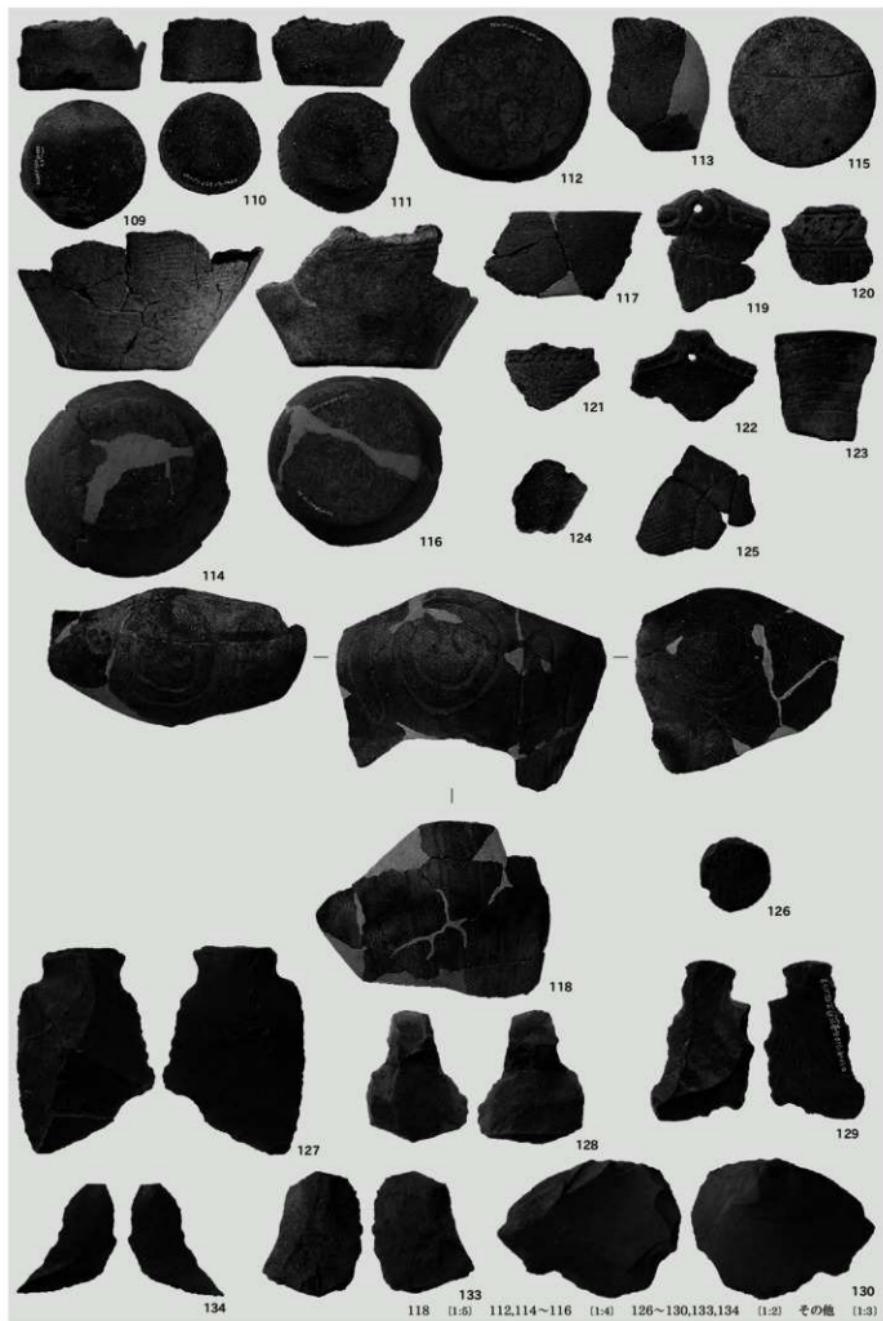
SX7 完掘（北から）

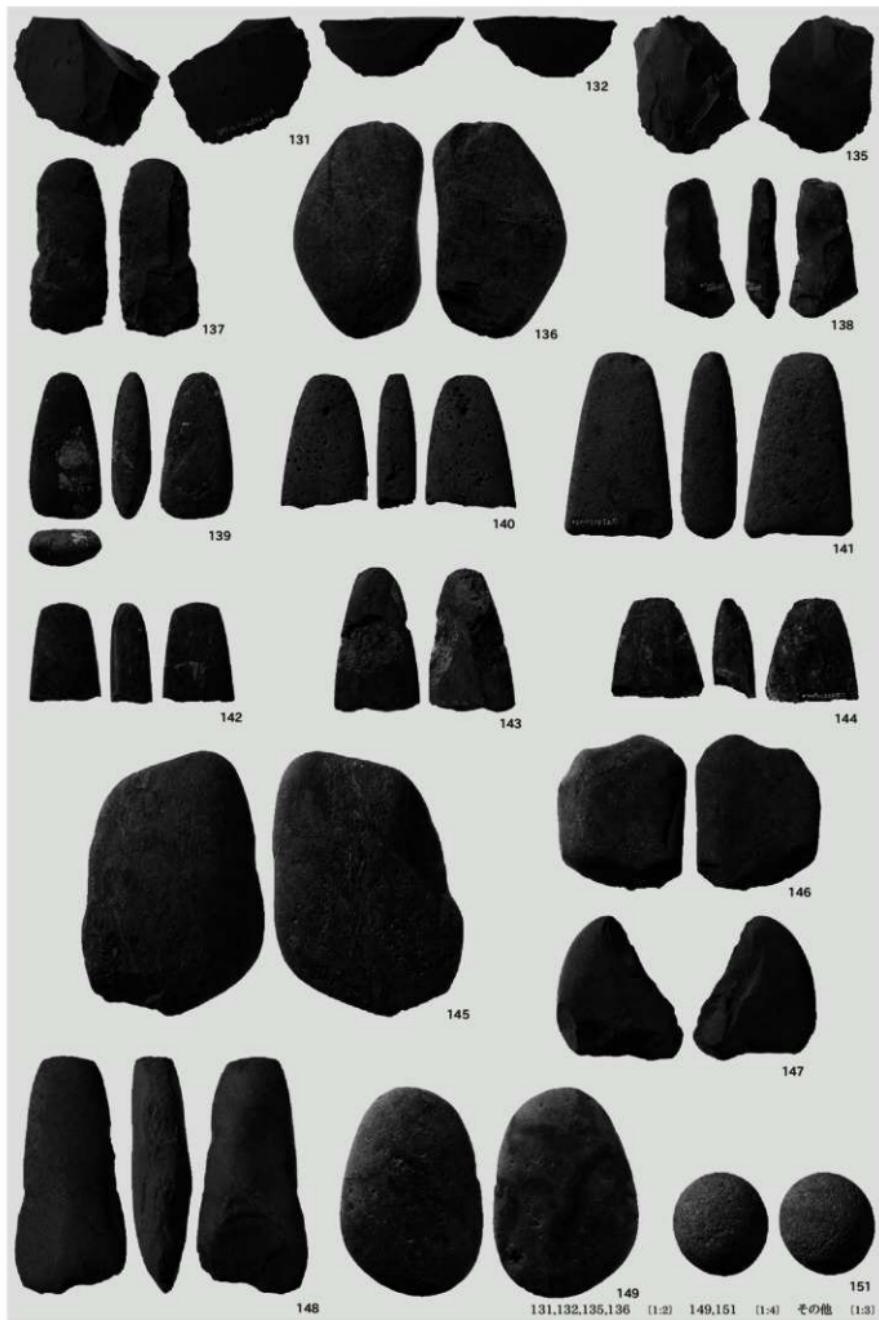


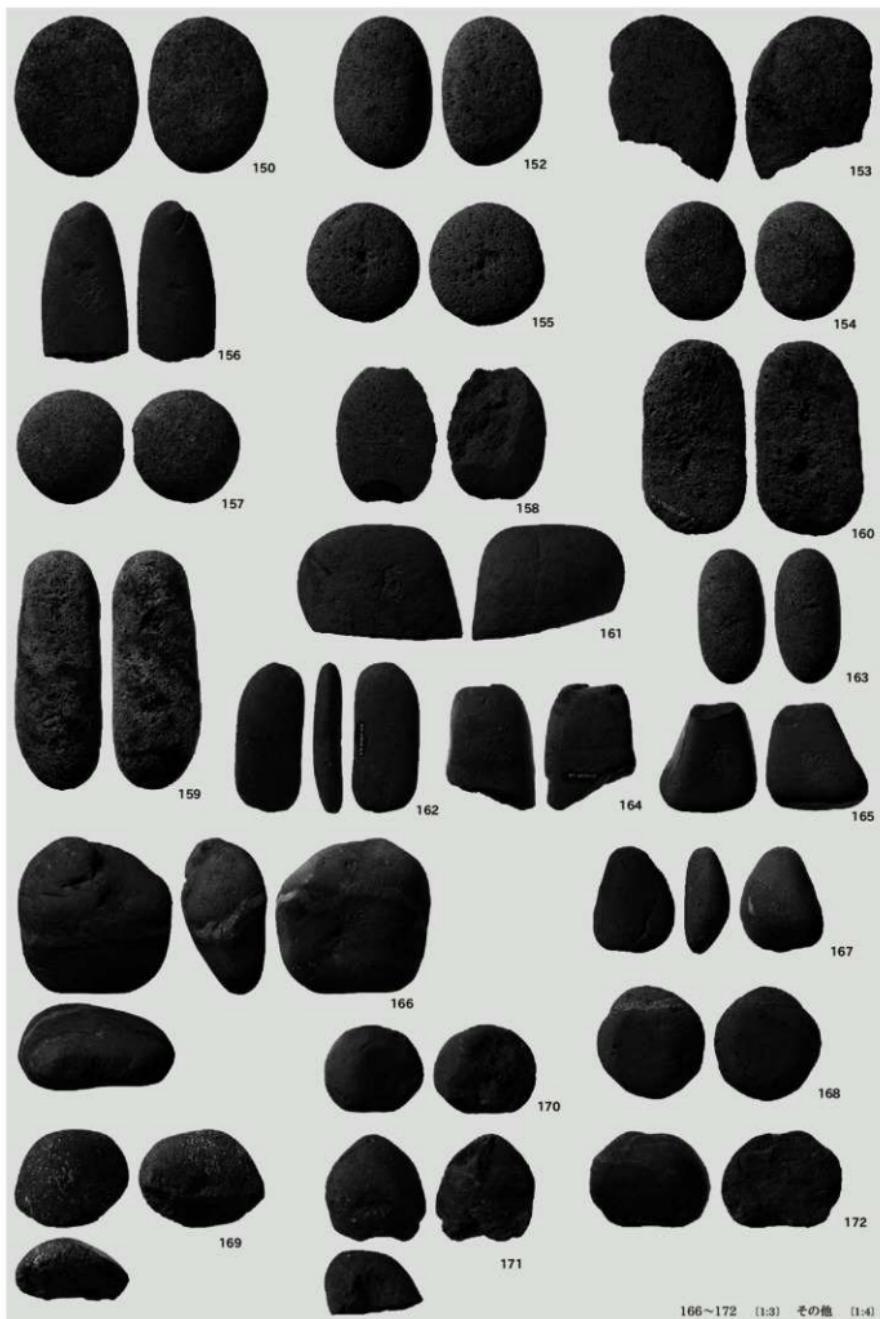
8,47,65 (1:4) その他 (1:3)

63割れ口拡大

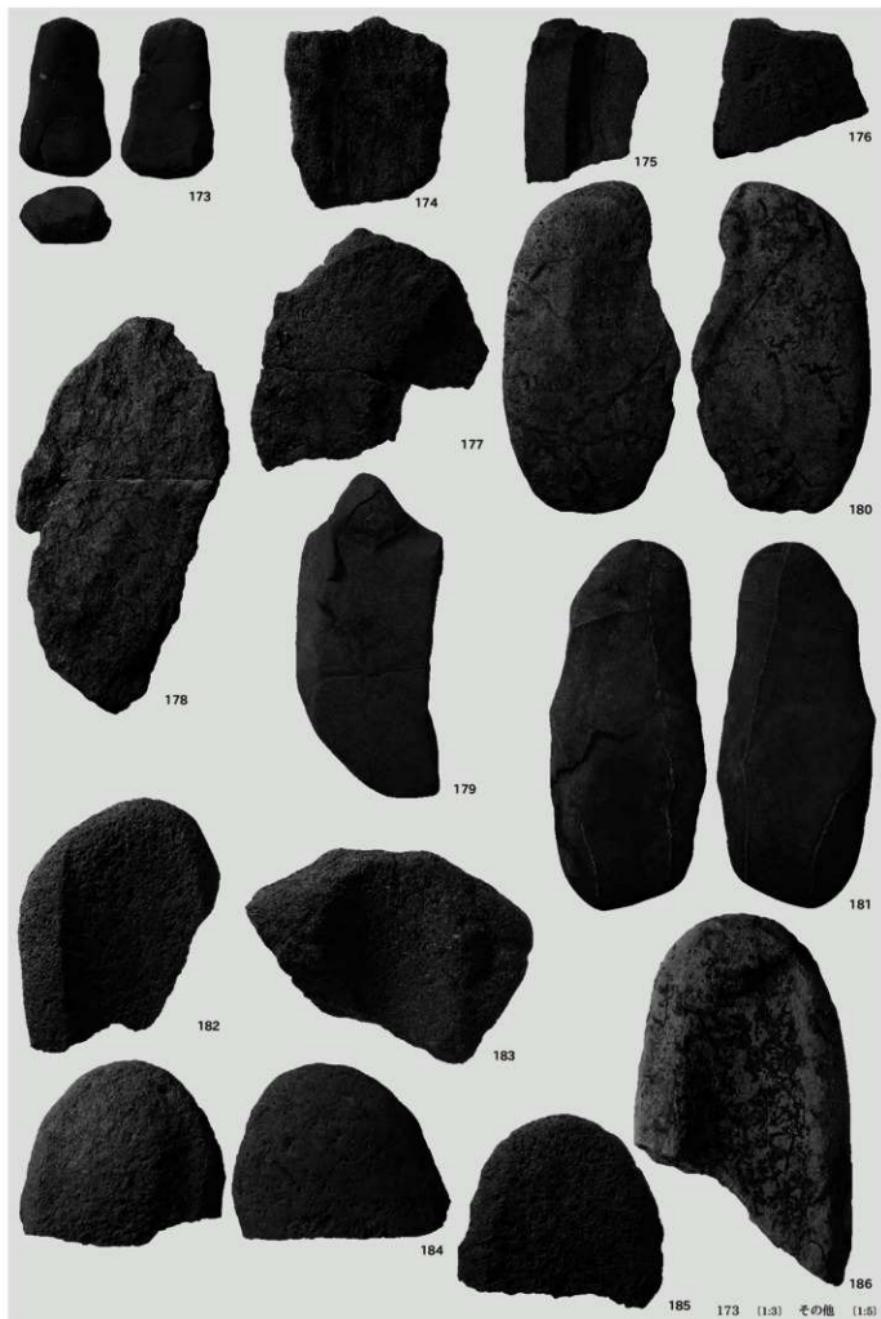








166~172 (1:3) その他 (1:4)





187



188



189



190



191



192



193



194



195

187,188 (2:3) 189,190,195 (1:2) 192,193 (1:3) 191,194 (1:5)

報告書抄録

ふりがな	はぎわらいせき							
書名	萩原遺跡							
副書名	一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書							
巻次	III							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第204集							
編著者名	土橋由理子・小川真一（埋文事業団）、荒谷伸郎（株式会社ノガミ） 金原正子（株式会社古環境研究所）							
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行年月日	2008(平成20)年11月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
萩原遺跡	新潟県東蒲原郡阿賀町谷花字萩原甲555ほか	15385	205	37° 41' 38.3984"	139° 23' 44.5107"	試掘調査 20050509～ 20050513・ 20061002～ 20061013 本発掘調査 20070718～ 20071022	1371 m ²	道路（一般 国道49号 揚川改良建設）
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
萩原遺跡	遺物 散布地	縄文時代 (中期後葉、 後期前葉、 後期中葉)	住居1軒 集石1基 性格不明遺構 5基	縄文中期後葉土器、縄文後期前葉土器、 縄文後期中葉土器 縄文時代土製品（土器片円板） 石器（石器・不定形石器・両極剥離旗の ある石器・打製石斧・磨製石斧・磨製石 斧未成品・敲磨石類・多面体敲石・砥 石・石皿・石籠未成品・石核・剥片類） 石製品（橢形石製品）				阿賀野川左岸の河 岸段丘上に位置す る。土器埋設石組 物を有する住居1 軒を検出した。土 器は、南三十櫛場 式が主体となって 出土した。

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第204集 一般国道49号揚川改良関係発掘調査報告書III 萩原遺跡
平成20年11月14日印刷 平成20年11月28日発行 編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1 電話 025 (280) 5584
財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 電話 0250 (25) 3981 FAX 0250 (25) 3986 URL http://www.maibun.net
印刷・製本 株式会社 ハイングラフ 〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号 電話 025 (233) 0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第204集『萩原遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄錄	北緯	37度41分38.3984秒	37度41分49秒
抄錄	東経	139度23分44.5107秒	139度23分33秒